
南の海を愛する姉妹の四重奏

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南の海を愛する姉妹の四重奏

【Zコード】

Z2062W

【作者名】

まるは

【あらすじ】

次期、女公爵になるため、スバルタ教育で育てられた纖細な姉と、その容姿や性質から、母にほつたらかされて育てられた元気な妹が、初めて故郷のロアアルを出て王都へ行く。

そこで一人を待っていたものは、良い男と 悪い男。

「姉さん、見て！」

馬車の硝子窓に、張り付くよつこにして外を見ていたウイニーが、感嘆の声をあげた。

振りかえる彼女の顔は、素晴らしいものを見た黒い瞳を大きく見開いて、じつ言つのだ。

「雪が終わってる！　じこから春なの…？」

その言葉は、余りに純粹過ぎて、レイシエスを笑わせる。

「やあね、ウイニー。いきなり季節は変わつたりしないわ、雪のない南側へ出ただけよ」

腰を浮かせたままの彼女を席へと戻し、落ち着かせよつとするもの、やはりウイニーは、そわそわして窓の外を何度も何度も見ている。

珍しくてしょうがないのだ。

少し寄り目の愛嬌のある瞳が、めまぐるしく動いている。

ウイニーは、15歳。

元気のいい　言葉を変えるなれば、跳ねやすい　輝く赤毛を何とかなだめてひつ詰めているが、本人の元気の良さはとても隠せ

るものではない。

美人と呼ぶには少し難しいが、寄り田氣味の子犬のような黒い瞳と明るい性格も相まって、愛嬌のある顔をしている。

オリーブグリーンの古風なレースをあしらつたドレスは、そんなウイニーには少しおとなしい印象だが、祖母からもらつた物なのでとても気に入っているようだ。

レイシェスは、16歳。

ミルクティーのようななめらかで艶やかな淡い褐色の髪に、雪よりも白い肌、氷のような透き通る青い瞳。

気合を入れて作られた最新のドレスは、見ているだけで寒くなるような青。

母に、家の歴史の中で、一番美しい公爵として名を残すでしょうと言われた、ラットオージェン公爵家の長女にして、跡取り娘である。

そして、このまつたく真反対の姿をしている二人は、姉妹だった。

彼女らの父の領地であるロアアル（北西）地方は、雪はうんざりするほど見られるが、夏はあつという間に去ってしまう。

そのため、農業が出来るのは南部の地域だけ。

代わりに、良質な針葉樹の木材と、鉄鉱石を始めとする鉱脈に恵

まれ、それらを売つて穀物などの農産物をよそから買つ」と、ロアアールの地は成り立つていた。

そんなラットオージェン公爵家は、エージェルブ諸公国の一員である。

5人の公爵の領地と、一人の王の直轄地を合わせ、そう呼ばれている。

彼らの王は、マイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）という名で呼ばれている。

個人の名前はあるが、王冠を戴いたその日から、みなにそう呼ばれるのだ。

現在、8世。

すなわち8代前に、5人の領主を支配下に置き、王の名の元に彼らに公爵の地位を与え、この国を興したのである。

それまで、各領主はそれぞれ小競り合いを続け、境界線の変化を多少なりとつけていたという。

彼らの中で、ロアアール（北西）だけは、特殊な土地だった。

大きな大陸の東の端。

この国は、その大陸の一一番北側から細い回廊のよつにくびれ、そこから南西へ大きな拳を描くよつな形で存在している。

だからこそ、『大いなる拳の王』と呼ばれているのだ。

すなわち、この国と大陸をつなぐ場所は、ロアアールしかない。

昔から、大陸の敵はこの回廊を通りて、ロアアールを侵攻しようとしていたのだ。

現在では、拳側はみな平和な関係を維持できているからいいものの、彼女らの先祖は大陸と拳の両側から、圧力を受けていた。

そのため、軍は堅牢な防御を得意としている。

今もなお、大陸側の防衛にその力は受け継がれていた。

地形と気候を存分に利用し、二三十年、一切の侵攻を許していない。

そんな危険な領地を、レイシェスはじき継がねばならなかつた。

父は、現在病床に伏せついている。

優秀な側近たちのおかげで、領主としての仕事は、何とか出来ているものの、とても拳の中央に位置する王都まで行くことは出来ない。

そこで、レイシェスが父の代理として向かうことになったのだ。

二年に一度、冬の終わりに行われる謁見会に参加するために。

王の威光に陰りがないことを示威するための集まりではあるが、

参加拒否は許されない。

もしも、やむを得ず公爵が出席出来ない場合は、限りなく血の近い者の代理を立てる事を許されている。

この場合、それがレイシェスといふことになるのだ。

16歳で、王を始め他の公爵たちと渡りあわねばならない。

代理の話を聞いた時、それはもうレイシェスは憂鬱になつた。

彼女は、公爵を継ぐための勉強や稽古は、子供の頃から山ほどしてきた。

自分には、それ以外の未来などないことも分かつている。

しかし、やはつまだたつた16年しか生きていないので。

海千山千の相手を前に、うまく渡り合える度胸も自信もありはない。

それどころか、失敗してロアアールに届くほどの恥をかいてしまうのではないか そんな不安が重くのしかかる。

もし、ロアアールまで届くよつたことがあれば。

足元の視線を落としてため息をつくレイシェスは、ゆっくり憂鬱に浸ることは出来なかつた。

視線と靴の間に、ウイニーの顔が割り込んできたからだ。

「大丈夫よ、姉さん！」

妹は、おどけて笑う。

レイシエスの心配や不安を、彼女は知っている。

だから、いつも元気つけようとしてくれるのだ。

「何か失敗したら、にっこり笑って『「めんあそばせ』』と叫んで、姉さんの美貌で、きっと何でも許されるわ」

それに。

レイシエスが顔を上げると、ウイニーも顔の位置を戻しながらこう続けるのだ。

「他の公爵様たちが姉さんに意地悪をしても、フラン（南）の公爵様だけは、絶対に姉さんの味方だから！」

ロアアルの夏の太陽よりも明るく、妹は自信たっぷりに笑ったのだった。

フランの辺

ロアアール（北西）のラットオージェン。

ロア（北）のファークロア。

アール（西）のクレイアルス。

ニール（東）のチエットセン

そして、フラン（南）のタータイト。

これが、諸公国の5公爵とその地域だ。

ロアアール以外は、全てイスト（中央）の王の直轄領と接している。

そのため、レイシェスたちはロア（北）かアール（西）のどちらかの土地を通らなければ、イストに行くことは出来ない。

よほどのことがない限り、ロアを通過するのが習わしだ。

ロアとは古い付き合いで、木材や鉱石を購入してくれるお得意様でもある。

牧畜が盛んで、良い家具職人や、鍛冶職人が揃っていることで有名な地だった。

アールは、優良で広大な農地を持つてゐるため、ロアアールの泣

き所である食料が豊富だ。

多くの食料を買う相手なので、ロアとは逆の意味でお得意様なのだが、食料といつ命に関わるものを取りしているため、時折衝突することがある。

食料を自給出来ないと云ふことは、他の公爵にロアアールの命をおさえられるようなものなのだ。

逆に、土地を接していない領地を持つ相手とは、利害がぶつかることが少ないため、穏やかな付き合いが可能だ。

そんな中、フラン（南）のタータイト公爵家だけは、レイシェスたちにとっては特別な国だった。

一年中、太陽が降り注ぐといつ、ロアアールからしたら夢のよくな国。

王家の多数が、明るい赤の髪と褐色の肌を持つ、最後までイストの王の統一を苦しめた武闘派の多い国。

そう　彼らの髪は、赤いのだ。

妹のウイニーには、いや、レイシェス自身にも、間違いなくフラン（南）の血が入っていた。

父の母、すなわち祖母は、フラン（南）の公爵家から嫁いできたのである。

その髪の色は、父には遺伝しなかつたが、とびこえてウイニーに

受け継がれた。

ロアアールにいながら、フラーのことを思わずにはいられないのは、妹のこの鮮やかな赤毛のおかげだね。

彼女の衣装の多くは、祖母から譲り受けたもの。

祖母も赤毛だつたため、その髪に似合つ色の衣装を揃えていたのだ。

祖母は、沢山のフラーの話を聞かせてくれた。ロアアールにはない、奇想天外な物語の数々。

そして、フラーとロアアールが、遠い距離を越えて深い縁で結ばれることとなつた昔話も。

その縁に導かれて、祖母はこんな寒い地に嫁いできたのだ。

青い空、青く透き通る海、真っ白な砂浜。

祖母の話の中で、レイシエスが死ぬままで一度は見てみたいものがそれ。

ロアアールは、冬が長くどんどんとした空が多いし、回廊の北側の海は凍つていて、南側の海はいつも灰色で荒れていた。

漁業にも貿易にも、とても向いていない。

だから、そんな鮮やかな青といつものを、一度でいいから見てみたかったのだ。

そんな祖母も、レイシエスが12の時に亡くなってしまった。

ウイニーは、唯一の赤毛の理解者を失い、ひびく落ち込んでしまつたのだ。

だが、彼女には祖母から遺産が残されていた。

古いが質のいい、赤毛に似合つ色のドレスと 文箱。

祖母が、故郷であるフランと交わした手紙である。

遠く嫁いできた彼女は、時代で相手は変えていったものの、その文通は死ぬまで続いていたのだ。

最初の手紙は、祖母の弟へ。まだ、嫁いできたばかりの若かりし頃だ。

それが、次第に弟の息子になり、最後は弟の孫になった。

祖母が大事にされていだと分かるのは、手紙の相手は全てターライト公爵本人、もしくはその跡継ぎだったからだ。

祖母の弟も、弟の息子も そして昨年、弟の孫がその公爵を継いだのである。

父も公爵を継ぐ前は、手紙を交わしていたといつ。

レイシエスたちが、その習慣を受け継げなかつたのは、一重に母の圧力だつた。

母は、ロア（北）の公爵家の人物で、ロアとロアアールの友好をより深めるために嫁いできた。

元々、非常に保守的だった上に、なかなか子どもに恵まれず、心苦しい生活を送っていたようだ。

ようやく出来た子どもが、レイシエスである。

女であることを残念に思つた矢先、もう一度子どもを授かつた。

今度こそは息子を、と言つ母の祈りは結局通じず、ウイニーが生まれたのだ。

母は、そこで伏せつてしまつような、か弱い人ではなかつた。

もはや自分が子どもを産めないと分かるや、レイシエスを完璧な世継ぎに育てるため、スバルタ教育を開始したのである。

おかげで、彼女が物こころひいた頃には、多くの教師に囲まれていることとなつた。

放つておかれたのは、妹だつた。

母にとつて、二人目の娘ということをどづめを刺したウイニーは、その上、ロアにもロアアールにもほとんどない赤毛で。

一方、レイシエスは父に似た生粋のロアアールの容姿をしていて、そしてまたとても美しかつたため、母の中の格差は誰の目から見ても明らかになつた。

最低限の教師はつけられたが、事実上妹は母に無視されていたのだ。

そんなウイニーの心を、明るく育てたのが祖母だった。

その祖母が亡くなつた後、妹はドレスとフラとの文通を受け継いだのである。

誰に出しているのかと聞くと、公爵本人だというではないか。

公爵は忙しくて失礼だろうから、どなたか紹介をしてもらいたいと言つたのだが。

その次のフラからの手紙を、ウイニーは見せてくれた。

『ロアアールとの手紙は、三代に渡り公爵か公爵になるものが書く、栄誉とも言える仕事。残念ながら、まだ私には世継ぎがないため、許されるならばこのまま私と手紙を続けて頂けないだろうか』

驚いたのは、そのへりくだつた文章だ。

公爵本人が、他家の公爵の娘とは言え、これほど丁寧に手紙を書いているとは思わなかつたのである。

レイシェスは、大慌てでその文通に参加した。

ロアアールに、これほどまでに礼儀を尽くす国を、無碍にしてはならないとすぐに理解したのだ。

この付き合いは、昔話だけで終わる話ではなく、ロアアルの末に関わるかもしれない。

次期公爵になるはずの自分が、それをウイニーだけに任せたおけなかつた。

妹を、信頼していないと叫ぶ意味ではない。

自分が、責任を持つべきところだと思ったのだ。

最初の手紙は、これまで手紙を出さなかつたことへの非礼を詫びることから始まつた。

そして、それをウイニーの手紙に同封してもらひやうとしたのだ。

母は、気性も何もかも違つた祖母とは、うまくいつていなかつた。

同時に、母は祖母に抱く感情を、フラン(南)に抱いているようこ思えたのだ。

放つておかれるウイニーだからこそ、母に詫びられることがなくあるいは氣づいたところで放置され 文通を続けることが出来る。

しかし、レイショスまでフランに関わっていることが分かれば、おそらく強硬に止められるだらうと思つたのだ。

母と戦つ争いをすることは、もはや彼女の中にはない。

過去何度か試みたそれは、ことじじと母の絶対に折れない姿勢を見せつけられただけだった。

理屈ではない。

駄目なものは駄目なのだ。

それから、フランの公爵からの手紙は一通になつた。

ウイニー宛ての封を切ると、一つの封書が現れる。

挨拶のように、女性に対する多くの賛辞の言葉が並べられた手紙を、最初は赤面して読んだものだつた。

まだレイシエスは、そういう手紙を男性にもらつたことがなかつたのだ。

しかし、それは勿論ウイニーの手紙にも書いてあり、社交辞令であることはすぐに分かつた。

フランは、きっとこれが当たり前のだろう。

祖母への手紙でも、よく祖母をほめるよつた書を出しで始まつていたものだ。

身内であつてもそういうのだから、若い異性相手には更に情熱的なのだろう。

ロアールとはまるで違う季節の話や、大陸からの侵攻を心配する話、もしそんなことがあれば、フランから飛んで来てくれるることを

誓われたりもした。

他愛のない少女への手紙と思われるだらうが、レイシスは次期ロアールの公爵だ。

そして、手紙の相手は現フラの公爵。

そんな手紙に、どうして冗談など書けようか。

多少の誇張は入っているかもしだれないが、その点は社交辞令ではないような気がした。

事実、四代前に本当に来てくれたからだ。

昔話は、後口に譲るとじて、これらの手紙のやりとりで、ロアールの姉妹はすっかりフランを好きになってしまった。

元々、祖母の話で半分恋をしていたようなものだったのだ。

そこへ、手紙の駄目出し。

これで、フラン（南）を嫌えと言われても無理な話である。

だから。

この都への謁見会で、唯一の楽しみがあるとするなりばの公爵との対面。

これまで、一度も出会ったことはなかつた。

フラン

祖母の葬儀の頃、不幸にも公爵の正妃も亡くなっていて、他の身内の方が参列したのだ。

この馬車が、王都へ着けば、すぐにでも会える人。

だが、南への憧れを、いま思い浮かべているのはレイシェスだけではないようだ。

「フランの公爵様は、誰かと一緒に来てるかなあ」

姉の都への旅に、ギリギリで飛び乗つて来たウイニーは、かの公爵一家に興味津々のようだった。

まだ咲は無い

馬車がイスト（中央）へ一歩近づくと、外の景色はどんどん明るいものに変わっていく。

同じ月だとこの辺り、ロアアール（北西）とは何もかも違つ景色。暦では、三月に入つたばかり。

故郷では、まだまだ雪が降る時期だとこの辺り、道端には花が咲き始めている。

妹のようにおおはしゃがむことはないものの、心が浮揚していくのが分かる。

春が遅い分、この国の誰よりも春を喜ぶロアアールの地。

それは、領民だけでなく、公爵家も同じなのだ。

そんな春の道程を楽しみながら ついに姉妹は、イストの都へ入つたのだった。

王の都は、すさまじかった。

大きな道には石畳が敷き詰められ、馬車の混雑も物凄い。

それを、熟練の御者たちがまるで魔法のように操って、ぶつけないようにならしていくのだ。

ロアールから連れて来た御者たちは、父の謁見会にも付き添っていた者なので、もちろん都を走ったことはあるだろう。

しかし、これまでとは明らかに違う、少しきこちない馬車の動きに、レイシエスはハラハラしてしまった。

「姉さん見て、すぐ大きな教会！」

ウイニーは気づいていないのか、すっかり窓から観光を始める。

窓の外にも興味は山ほどあるが、今はとりあえず王宮へと無事たどり着きたかった。

そんな彼女の願いは聞き届けられたようで、馬車は大きな石造りの建物の前で止まつたのだ。

「お嬢様……」から王宮に入るための馬車の先導がつきます

「そう告げられ、どれだけほつとしたことか。

レイシエスは、この馬車のことしか考えていなかつたが、馬車の後ろには荷馬車の後続があるので。

公爵家が、謁見会に参加するのに、手ぶらといつわけにはいかない。

献上品に、着替えなど滞在に必要な物などを詰め込むと、1台目
の荷馬車はこつぱいだ。

そりに、召使も連れて来ているため、もう1台。

これだけのものを、無防備に運ぶ訳にはいかない。

護衛が、軍より騎馬で10騎。

これでも、おそれく公爵家としては質素な方だろう。

派手に飾り立てる慣習は、ロアアールにはなかった。

外で、男の話し声がする。

片方は、護衛隊の隊長のものだが、もう片方はこの施設の人間だ
うづか。

「申し訳ありません…しばしあ待ちいただけませんでしょうか」

「何と、公爵家の馬車を待たせるところのか」

じつやう、トライブルのようだ。

謁見会の年である。

5公爵が都へ詣でることを、都の人間で知らない者はいないだろ
う。

いまの王都では、他のどんな立場の人間より、最優先されるはずなのだが。

「ほんの少し前、二ール（東）の公爵様がおいでになられまして… たつた今しがた、王宮に向けて出発されたばかりなのです」

何という間の悪いことか。

たつた5組しか来ない公爵が、同じ日のほぼ同じ時間でぶつかつてしまつたということだ。

二ールは、彼女らの父よりも年上の老公爵だつたはず。

会つた事はないが、情報としてレイシスはそれを覚えていた。

「他に先導はいないのか？」

「王家か公爵家にしか使わない、特別な先導ですの…」

外の会話に、彼女はため息をつきながら、自分の不運を嘆こうかと思つた。

幸先が悪い」と、と。

「姉さん…助けてあげない？ キツとあの人、いま泣きそつだよ」

だが、ウイニーがそつと囁いてくる。

不幸なタイミングだったのは、二人の人間にとつても同じだらう。

更に、彼には何の手落ちもないといふのに、公爵家を待たせた罰が降りかかるかもしれないのだ。

「隊長…… その辺で

妹に言われてから行動する自分を、少し恥ずかしく思いながらも、レイシエスは馬車の外に軽い制止をかけた。

「し、しかし

どうにもならないことは、彼も分かっているが、主が軽んじられるような事が許せないのだろう。

「待ちましょつ…… まだ日は高いのですもの

『まだ日は高い』

ロアアールの故事でもあるそれは、『最後には勝つ』という意味。正確には、『まだ日は高い』、雪は降つておらぬし、足も動く』といふ、ご先祖様の言葉だ。

戦いの場で語られたものだけに、軍人たちにとつてそれは特別な言葉。

馬車を待たされた程度で、敗者というわけではないのだと、それをレイシエスは柔らかく伝えようとしたのだ。

「……ハツ！」

一瞬にして、外の空気がピコッとしたのが分かる。

やんわり伝えようとしたつもりが、隊長の軍人魂をくすぐってしまったのだろうか。

「姉さん、やね~」

「ウイーーー、小さくひやかされる。

「馬鹿なことを言つてないで…」

そんな事件のすぐ後、もうひとつ事件がレイシエスの唇を止めた。

後方が騒がしくなったのだ。

「待たれよ、待たれよ…」

複数の馬の、いななく声。

護衛の隊が、ざつと後ろへと駆けていくではないか。

「「ひらは、公爵家の馬車である、さがられよ。」

「何と…」しおらも公爵家の馬車である…」

恐ろしい事態が発生したのは、考えるまでもなく明らかだった。

ニール（東）の公爵だけで飽き足らず、またも別の公爵と時間がぶつかったといつのだ。

「何で…」
「」とだ

外で、男が呆然とつぶやく声が聞こえた。

滅多に起きないことが、起きてしまったようである。

もはや、この男の職は守られないかもしない。

わすがのレイシヨスも、他の公爵の怒りまでは止めようがないからだ。

しかし。

「その紋は…ロアアルの公爵家であらせられるか？」

驚きの声と共に、事態は違う方向へと流れ始める。

「なんど、フラの方ではありますか」

護衛同士が、半ば呆然とお互この地域を呼び合いつではないか。

フラ…?

反射的に、レイシヨスはウイニーと顔を見合させていた。

次に、ウイニーは慌てて首を伸ばして後ろを見ようとするが、馬車の後に窓はなく何も見えるはずなどない。

レイシヨスは、おとなしく座つたまま、胸だけを高鳴らせた。

祖母の国でもあり、手紙を送り合う相手でもあるフラの公爵が、すぐ後方にいるというのだ。

どうしても耐え切れなそうなウイーーを、視線で制する。

「だめよ… 父上の名代なのだから。 公爵家の人が、簡単に外に出る訳にはいかないのよ」

そう遠くなく、王宮で対面することが出来るのだ。

挨拶をすればいい。

ウイニーの言つよひなことをした口には、無作法で無教養な跡取りとして、悪い噂を故郷に届けてしまつ。

そうしたら母の怒りと、更なる教育が始まるに違いない。

母のことを思い出すと、レイシスはどれほども自分を律する
ことが出来た。

なのに。

「私の可愛い『はとり殿』は、いかがな?」

馬車の外から、信じられない言葉が投げかけられた。

低すぎない、張りのある強い声。

扉につけられた窓の外に、人影はない。

わざと、覗かないようにしてくれているのだらう。

まさか。

いや、そんなまさか。

レイシェスは、余りのことに席で硬直してしまった。

「タータイト公爵のおじ様？」

だから、ウイニーの口にふたは出来なかつた。

外にいるのが誰か分かつて、嬉しくてたまらないのだ。

「おつと、驚いたな。その呼び方は、赤毛同盟の姫ではないか？」

少し芝居がかつた、おどけた口調。

ウイニーが、軽やかに笑つた。

手紙で交わした、お互にしか分からぬのだらうか。

「さて、可愛らしい一人のはと」殿……もしあ許しいただけるなら、
「尊顔を押し奉りたいのだが」

レイシェスは、余りに常識はずれで、そして強引な公爵にただただ驚くばかりだつた。

「とにかくでせ、落ち着いて挨拶も出来はしない。

ど、どうしましょ。」

じきじきと高鳴る胸では、とても冷静に考えられそうにな。

やつしたら、ウイーーが。

妹が、自信満々に笑いかけてくるではないか。

まるで、『大丈夫』と言わんばかりに。

この根拠のない自信は、一体どこから出でてるのか。

けれど、その不敵なまでの妹の態度は、ほんの少しレイシエスを落ちつかせた。

相手は公爵で、ここまでへりくだられ、馬車の前まで来てもらつたものを、無碍にするわけにもいかないだろつと。

「光榮ですか？」

緊張で震えそうになる手を、膝の上できゅっと握つて、レイシエスはよひやくやつ答えた。

馬車の外で、わずかに空気が緩んだかと思つと。

「では…失礼を」

言葉の後、一呼吸おいて馬車の扉のとつてが、ゆっくりと弧を描く。

ロアアールよりも温かい、春の空気が扉からふわりと入ってきた。それと同時に、馬車の横にいたであろう男が、二人の前に現れる。ロアアールは、ウイーーのものとそつくりだ。

前髪を後ろに流し、それでおさまりをつけているようだが、とてもおとなしい髪質には見えなかった。

太陽の下がよく似合つ、褐色の肌と逞しい胸板。

それらを、濃い緑の礼服にあしめているのが、窮屈に見えるほどだ。

彫りの深い目元を、長いまつげに縁取られた黒い瞳が輝き、その上を太めの眉がきりりと這つている。

そして、物を自由に語るに違いないと思われる、大きめの唇を全部ひつくるめて一言で言つのならば 精悍、だらうか。

「馬車の中から失礼致します。わたくし、ラットオージェン公爵代理、レイシェス・ロアアール・ラットオージェンと申します」

ロアアールの男の、誰とも似ていのその容姿に、レイシェスは驚きながらも己の最初の使命を果たそうとした。

その、教科書のような挨拶を、フランの公爵は目を細めて見ている。

「噂はもつと誇張して流すべきだな…美しきはとじ殿…いや、レイシェス殿。私は、カルダ・フラ・タータイト。私は雪を見たことはないが、さつと雪の精靈は、レイシエス殿のよつた姿をしてこるので、違いない」

馬車のステップに片足をかけ、身体半分だけを中心に入れると、彼がとても大きな男であることが伝わってくる。

片手をへりにかけ自分を支えると、公爵はもう片方の手をレイシエスに伸ばす。

しつかりと握りしめていた膝の上の手の片方を、優しく取られたかと思つと、深く上半身を屈めながらして挨拶の唇が寄せられる。男性から女性への、普通の挨拶だと分かっていても、こんな場での変則的な行為に、平然としているのは難しかつた。

「タータイト公爵のおじ様」

一方、ウイニーは皿を輝かせて自分の番を待つていた。

「やあ、可愛い私の赤毛姫…会いたかったよ。我らの行儀の悪い赤毛を、よくぞ受け継いでくれた。それに、素晴らしい色のドレスだ…よく似合つているよ」

祖母の古いドレスをほめられて、妹はとても喜んでいた。

ウイニーへの挨拶は、おでこ。

正式な挨拶と云ふのは、まるで親戚の子どもにあるよつたものに見えた。

「可愛い一人のはどこの殿。王都に入つてすぐ、一人に出会えるなんて…何と云う神の思ひ召しだらうね。こんな幸運は、なかなかないものだよ」

ステップに片足をかけたまま、フランの公爵は本当に嬉しそうに微笑む。

レイシエスが、何故か眩しさで目を細めてしまいそうになるほど。しかし、ロアアルの姉妹とフランの公爵は、初めて顔を会わせる」となった。

そうして、内に、一ールの公爵を送つた先導の馬の隊列が戻つてきたという。

公爵家の馬車が2台も待つて、云う前代未聞のこのトラブルは、次のように解決された。

2台の公爵の馬車は、ひとつ先導と共に王宮に入る」としたのである。

贈り物

ロアールの公爵家に、王宮の部屋は4つあてがわれた。

ひとつが、公爵代理であるレイシェスの部屋。

この部屋が一番広く、応接室と寝室が別々の部屋になつてゐる。

ひとつは、召使いたちの部屋。

あとのふたつは、一緒に来た家族のための部屋だ。

謁見会は、公爵たちの義務であつたが、家族を伴つことを許されていた。

家族にとつては、都への観光のような面もあり、連れて行つて欲しいと願う者も多いといつ。

ロアールの姉妹には、多すぎる部屋数である。

父の時代は、家族は誰もともなわなかつた。

母は、極度の馬車酔いの体质で、結婚のためにロアから来たのを最後に、一度と馬車に乗らないと誓いを立ててゐるようだ。

当然、レイシェスは後継ぎの勉強に釘付けにされていたし、ウイニーは母に反対されていた。

今回、妹がこの旅に滑り込めたのは、半ば奇跡のようなものだつ

た。

わざわざ病床の父と、お願いに行つたといつのだ。

「元々、熱意のあるウェーニーではあるが、今回のそれは今まで以上で。

それほど、レイシェスと王都に行きたかったのだらう。

レイシェスは、妹にとつて良い姉ではないはずだ。

妹を母から守つてやるのも出来ないし、しつこいつ時に助けることも出来ないのだから。

それでも、ウイニーは彼女をとても慕つてくれる。

レイシェスは、そんな可愛い妹に、良いところへ嫁いで欲しいと願つていた。

公爵家の娘だ。

嫁ぎ先など、その気になれば引く手あまただらう。

ロアアールで不憫な人生だつた分、嫁いで幸せになつて欲しかつた。

「姉さん……おじ様のところに行つてもいいかなあ

三十にも満たないフラの公爵も、妹にかかればおじ様扱い。

それに、レイシエスは苦笑しながら、妹を諫めなければならなかつた。

「後で、正式に挨拶に行くから……その時まで待つて」

まだ、召使いたちは荷馬車の道具を、部屋に運び終わつていないので。

ようやく、長旅の疲れをふかふかのソファに座つて休め始めたばかり。

王への謁見は、日程がしつかり決まつているものの、その前にやらなければならないこともある。

王太子 次期王になる者への、挨拶だ。

王太子不在の場合は、王弟などの継承1位となる。

未来の王にも、これまでと変わらず末永い忠誠を誓います、という儀式である。

レイシエスは、実践経験こそ少ないが、とにかく頭の中には多くの知識が詰め込まれていた。

そのため、数々の儀式の中に王の権威への執着が、透けて見える時がある。

しかし、この平和協定で結ばれた拳の国は、ロアアールにとっては助かるものなのは間違ひなかつた。

もはや、背後の心配をせずに、大陸からの圧力に防御を徹することができるのである。

更に、他家と比較してより危険な地域であることから、都より財政援助が来る。

どこよりも、兵力を抱えていなければならぬためだ。

人的援助は、どの時代も拒み続けていた。

もしもの時の増援ならば受けるが、他の地域の人間を入れる事は、領地にとつて良いことではないと、代々判断してきたのである。

過去に一度、王の圧力で一年だけ常駐させたことがあつたらしくが、都の人間がロアアールの寒さに耐えられるはずがなく、王に泣きついて帰つていつたということだ。

レイシエスが公爵になつたとしても、直接軍の先頭に立つことはないだろう。

軍の将軍たちの決めたことを、承認するくらいか。

領民としては、力強い男の公爵に先頭をに率いて欲しかつたことだろうが。

こればかりは、どうしようもない。

ソファに身を預け、様々なことを考へるともなく考へていたら、来客を告げるノックの音。

正確には、来客ではなく。

「フラの公爵様より、お届け物です。」

赤毛の召使いがそつまつと、大きな箱が一つ運び込まれて来た。

まだ、こちらは下ろした荷物の整理に追われているところ、向こうはもう終わったのだろうか。

届け物そのものといつよりも、その速さに驚いた。

元々、この謁見会では、お互の公爵への贈り物も当たり前のことだ。

勿論、ロアールから各公爵への品々は準備済みだつた。

ウイニーが、開けたくてたまらないように箱を見ている。

その様子が、見ていて余りに明らかなので、ついふつと吹き出してしまつほど。

「召使いを呼んで、開けてもらわなきやね」

「忙しそうだから、私が開けてあげる」

わんわんっ！

子犬が転がる玉めがけて駆けるように、ウイニーはテーブルの上の箱の前に陣取つた。

公爵家の娘が、そんなことでどうするのー。

母の怒号が聞こえてきやうな気がするが、それはレイシスの被害妄想に過ぎない。

一瞬、きょろきょろと周囲を確認してしまったが。

妹は、まったくめらわず、美しい包装を解き一つの皿の箱を開ける。

「わあー！」

箱を開けたとたん、中から艶やかな色が溢れる。

青のドレスだ。

こま、レイシスが着てこようやうな寒い青ではなく、深く濃い青。

まるで、想像の中の海の色のよつた。

「うーー、綺麗ー！」

よく見えるように、妹は箱を斜めに立ててくれた。

間違いなく　レイシスのための衣装だとこいつことが分かる。

箱を立てたことによつ、レイシスの赤毛とその青が並んだのだ。

その残酷なまでの色の食い違ひは、誰の目にも明らか。

しかし、それは逆に言えば、赤毛の多いフランの間にとっても同じこと。

彼らは、こんなに美しい青を、似合わないところの理由であざらめなければならなかつたのか。

さつと、レイショスにその色を着て欲しくて、フランの公爵は送つたのだ。

もうひとつのは、

「あれ？」

それも、やつぱりドレスだつた。

暖かい緑と白の織り込まれたそのドレスは、今度は別の意味でウイニーに贈られたものだうとうことが、一目で分かつた。

だから、妹も変な声をあげたのだ。

フランの公爵の考えが伝わつて来て、レイショスはふふふと笑つてしまつ。

「ウイニーは、ドレスを見たまま驚きで動けないでいる。

「私、都へ行くつて書いてなかつたのに」

どうして、自分の分の贈り物があるのか、理解できていないのだ。

「そんなのは、決まつていいじゃない

可愛い妹の様子に、笑みを浮かべたまま、レイシエスは答えを教えてあげることにした。

「あなたが来てなくとも、最初からそのドレスを贈りうと思つていたからよ」

一人で手紙を送つていたのだ。

ウイニーが来て、いよいよがいまいが、あの公爵が妹を無視するなんて思えなかつた。

「あ……あは……嬉しいな」

跳ねまわつて喜ぶかと思つたら、妹は少し困惑したかのような笑いを浮かべる。

「やつぱり……フランの公爵様つていい人だね」

感慨深げに、呴かれる言葉。

妹のドレスを見る瞳は、まるで亡くなつた祖母を懐かしむもののように見えた。

次女の秘密の野望

ウイニーは、ラットオージョン家のオマケである。

彼女自身、自分のことをそう思っていた。

姉のレイシェスさえいれば、あの家は成り立つ。

その代わり、ウイニーは自由気ままに生きることが出来た。

祖母が亡くなつて、本当にオマケの自分を痛感してはいたが、彼女にはフラと手紙のやりとりがあつた。

遠い地の人だが、それでもフラの公爵のことは、母よりも近い人だと思っていたのだ。

それに、姉が参加してきた時は、本当は少し落ち込んだ。

フラとの手紙は、赤毛の自分の唯一の特権だと思っていたから。

文通相手を、取られる気がした。

けれど、姉はあの母の愛を、良くも悪くも一身に受けている人で。

いつか重圧に壊れてしまつのではないかと、子どもの時からとも心配していた。

そんなレイシェスに、「なんくだらないことで文句を言つことも出来ず、届けられる2通の手紙の内の1通で我慢することを、ウイ

「一は少しすつ覚えていたのだ。

そんな時、姉が王都へ行くことになった。

父の代理だ。

フランの公爵にも会えるだらうし、王都にも行つてみたかったウイーは、こつもより何倍も母と戦つた。

しかし、やはつ母が折れることはありえず、ついに彼女は病床の父に泣きついたのだ。

わつとこれが、最後の王都になるでしょ、どうかお願ひしますヒ。

すつかり病でやつれた父は、しばらくじつと彼女の顔を見たかと思つと、「分かった」と言つてくれたのだ。

王都へ行ける、そしてフランの公爵に会えるー。

ウイーは、心震わせた。

嬉しその余り、部屋のベッドで枕に顔を埋めて泣いてしまつたらいいだ。

生まれて初めての、嬉し泣きだつた。

泣くほど喜ぶ理由は、ちやんとある。

彼女には、王都で成すべきことがあつたからだ。

自分の、今後の人生のために。

ウイニーは、オマケとは言え公爵の娘だ。

15歳だが、公爵になる姉とは違い、そう遠くなく結婚してもおかしくないだろう。

姉の結婚は、とにかく乗り越えるべき壁が高い。

公爵の夫になるということは、ロアアルの政治に関わる可能性があるからだ。

保守的で防御に徹した冬の国を守るために、両親はおそらく候補の中から、相手を厳選中だろう。

そんな時、召使いが奇妙な噂をウイニーの耳に入れた。

この召使いは、元々祖母に仕えていた者で、フランから一緒に来た召使いの孫に当たる。

残念ながら、赤毛には生まれなかつたが、祖母にウイニーを守るよう頼まれたらしく、普通の召使い以上に頼ってくれた。

その召使いが仕入れてきた噂は ウイニーはアール（西）の公爵家に嫁がせようか、というものだった。

母の召使いから、流れてきたものだという。

アール！

よりもよつてアールなのだ、あのアール！

ロアアールと領地を接し、農業に恵まれた肥沃な土地を持つ地。

そして、何度も食料のことで、父を悩ませたといふだ。

そういう意味で、ウイニーはアールが一番嫌いだった。

これまで、ロアアールからアールに嫁いだ者はいない。

逆もまた然り。

たとえ食料の件があつたとしても、誇り高いロアアールは、アールには媚びない。

そんな、これまでの先祖が示してきた規範が、こんなところで崩されようとしているのだ。

いや、ウイニーにとって、規範など本當はどうでもいい。

しかし、これまでの公爵同士の関係を考えると、嫁いだとこゝで冷遇されるのは目に見えている。

そして、彼女の輿入れが、食料の安定供給にはおそれべつながらないだろう。

それを分かつていながらアールの話を出すところとせ、母はただ単に、ウイニーを視界から消してしまいたいのだ。

ロア・アールでは、頻繁に顔を合わせることになるかも知れないし、自分の故郷であるロア（北）に嫁にやるのはもっての他。

ならば、アール（西）。

母には、政治的才能はない。

そのため、そんな単純な消去法で出した考えだつたのだろう。

しかし、冗談抜きでやりかねない人だとも思っていた。

だからこそ、ウイニーは何が何でも王都へ行こうと考へたのだ。

父に、「これが最後かも」と言つたのも、2年後は嫁いでいるかもしれないという意味を匂わせたのである。

だが、それはアールにではない。

その相手を自力で探すため、彼女はここにいるのだ。

ウイニーは、母の思い通りにだけはなるものかと、心に決めている。

自分の人生は、自分で見つけて切り開くのだ。

女の人生が、嫁ぎ先で決まるというのなら、それを自分で探し出す最後のチャンスがここなのである。

15歳。

姉のレイシエスほどの美貌もなく、素晴らしいプロポーションも才能もない。

しかし、とにかく前向きな行動力だけはあった。

どれほど姉が美しくても、未来の公爵になる人を、勝手に手折ることとは許されない。

姉に求婚出来ない人の中で、公爵の娘ならもらいたいと思つ人は、きっといるはず。

多少見劣りはするが、ウイニーは丈夫だし、きっとたくさん子どもも産めるだろう。

何色の髪の子が産まれても、可愛がるんだー。

それは、彼女が子どもの頃から想像していたこと。

そして、これが ウィニーが王都へ来た理由と決意だった。

姉には、絶対内緒だ。

アールに嫁がせられるかもしないと聞いても、苦しめるだけ。

だって、姉さんは母さんには逆らえないもの。

その残酷な現実は、子どもの頃から知つている。

どんなにつらくても、姉に泣きつかないのは、どうにも出来ないのが分かっているから。

母からの重圧に耐えているレイシェスに、これ以上負担はかけられない。

だから、ウイニーは泣きつく相手を、外に求めたのだ。

自分を愛して、大事にしてくれる人。

そんな人が、誰か一人でもいてくれたら　それが、彼女の乙女らしい夢だった。

王太子

ようやく部屋の仕度が整つた頃、レイシエスの元に王太子からの呼び出しが来る。

「いらっしゃりだつたかしら。

教えられたこととの、ずれを覚える。

確かに、身の周りが落ち着いたら、レイシエスの方から働きかけ、その後王太子への挨拶の時間が伝えられる 実際に動き始めるのは、それからと聞いていたのだ。

しかし、遣いの者は『王太子殿下がお待ちです』と言つたのである。

これではまるで、既にロアアールのために時間を取つてくれているかのようではないか。

王太子を、待たせる訳にはいかない。

急いでレイシエスは装飾品を身につけ、公爵令嬢らしい身なりを整える。

普段、故郷でこんな宝石をつけて歩き回る』とはなかつた。

男の公爵であれば、必要のないもの。

しかし、まだ何の実績もないレイシエスを、少しでもよく見せよ

「うど、母が持たせてくれたのだ。

「姉さん、すつじく綺麗！」

ウイニーは、皿を大きく瞬きながら、嬉しそうに笑う。

「留守番、お願ひね」

その笑みに勇氣の後押しをされ、レイシエスは部屋を出た。

初めての人に会つ時は、いつもビキビキする。

フラの公爵とは、また別の意味のビキビキ。

「これからは、わずかの甘えも許されない世界なのだと、自分に言い聞かせる。

みなが、フランのように優しいわけではないのだ。

美しい花が、溢れるほど惜しみなく飾られる廊下と、踵を取られるのではないかと思えるほどやわらかい絨毯を、高いヒールで慎重に踏みしめながら、王宮の左奥へと向かっている あらっ。

また、知識と現実がずれた気がした。

王太子との面会は、もつひとつつの謁見の間だと聞いていたのである。

王宮には、謁見の間がふたつあり、ひとつは王のためのもの。

わづひとつは、王太子のためのものだ。

勿論、規模は明らかに違うが、王太子の内から、公爵をひざまづかせることに慣れさせるための練習場のようなどうなのだねつ。

ともかく、それらの謁見の間は、王宮のひたすら中央の奥のはずだ。

相当の奥まで来て、ようやく先導は扉の前で歩みを止める。

立派な扉ではあるが、場所的におそらく王太子の謁見室ではないはず。

「ロアールの公爵代理様を、お連れ致しました」

「…お通しなやこ」

返事をした男の声は、事務的なもの。

おそらく、王太子本人ではないだろつ。

いくつかのズレは気になりはするが、いよいよ挨拶の時間だ。

レイシエスは、背筋を緊張させながらも胸を張つた。

いまは公爵令嬢として、そして未来は公爵として付き合つていいく相手。

ひとつと開かれる扉を、彼女はまばたきもせず見つめた。

「レイシェス・ロア・アール・ラットオージェン…御前に参りました」

視界に映つてゐるものに、一切心を乱されないよつに己を律しながら、ドレスを大きくふくらませ、中で片膝をつくほど折り曲げる。

しかし、彼女を見ている男に、心を乱さないでいることは出来なかつた。

部屋の奥の大きな椅子に腰をかけ、足を組み、ひじ掛けに肘をついてこちらを見ている男がいたのだ。

レイシェスより少し年上のはずの彼は、柔らかそうな艶のある黒髪と、縁がかった灰色の瞳を持っている。

しかし、髪質とは裏腹にその瞳に柔らかさはない。

傲慢さと自信たっぷりの気は、離れていても十分にレイシェスまで届いていた。

金糸銀糸をふんだんに使われた豪奢な上着の襟もとから胸元にかけて、女性でもため息の出そうな、こまやかなレースが溢れて出ている。

それほどぞの贅をつくした衣装を、着るべくして着る男。

その自分勝手な乱暴な気配は、レイシェスを戸惑わせた。

「Jijiは謁見室ではなく、Jの男の態度を見る限り、公的な場には感じなかつたのだ。

まるで、私的に部屋に呼ばれたかのようだ。

「なるほど… 噩以上だな」

彼女の礼儀作法の教師が見ているならば、素晴らしいことはめぐれただろう挨拶など、男 王太子は興味もないよひこ、レイシスを見ている。

頭のてっぺんからつまきまで、何度も。

噂。

フランの公爵もそんなことを言っていた。

ロアールに閉じこもっていたレイシスの知らないことじりいで、噂とやらば流れていたのだろう。

「側に寄ることを許す」

厳しげほどの強い声は、レイシスを脅かすようなものだった。

身体がびくと震えそよくなるのを、何とか止める。

側に？

習っていた」ととは、違う。

ところで、王太子は公爵の遠方よりの上京について、労をねじり言葉をかけるはずだった。

中に入れとこつ」とだらうか。

「おそれります」

レイシエスは、三歩で部屋に入った。

「……」

「……」

そのまま止まつてみたが、ただ後ろの扉が閉ざされるだけで、王太子からは何の声も発せられない。

それどころか、明らかに機嫌を損ねた目で、こちらを見てくるではないか。

多くの使用人も側近もいるが、彼らは一切に反応せず、ただこの部屋の隅の空間を埋めているだけ。

重苦しく息苦しい気配と想定外すぎる状況に、レイシエスが次の行動を模索している。

「耳が悪いのか？ 僕は『側』と言つたはずだ」

その不機嫌な声が、鉄鉱石のような重さを持つて投げつけられる。

一般的の女性であれば、泣き出してしまつような威圧感と言葉の暴力。

これが…挨拶？

もはや、ズレなどとこゝ境界は飛び越えていた。

王太子の表情を見ながら、ゆくゆく足を踏み出す。

彼の言つ『側』とやらが、一体どこまでなのか その田を見て
いなければ距離が分からぬ『氣』がしたのだ。

一歩一歩、探るように近づく。

瞳も唇も、意思を強く表してはいるがピクリとも動く『氣配』はない。
椅子の三歩手前まで来た時、さすがのレイシエスも足を止めた。
手を伸ばしても、触れられない距離でいたかったのだ。

「そこまでか」

そして機嫌の直つていらない声で、突き刺される。

自分の顔の中心に、大穴でも開けられるのではないかと思えるほ
どの気配に、しかし彼女は必死に耐えた。

「そこまで……お許し下せませ」

「これは 普通の謁見とは違つものだ。」

その感触は、もう十分すぎるほどわかつてゐる。

噂、なるもののせうだらう。

ロアールの公爵代理に、興味があつたわけではないのだ。

ただ、美しい女を噂通りか確かめたかつただけ。

そう思つと、レイシェスは泣きたい気持ちになつた。

自分の美しさというものを、いまほど情けなく思ったことはない。

彼の目に映つてゐるのは、ただの女。

どんなに勉強をしようとも、良い公爵になるべく努力をしようとも、そんなことは男たちには何の興味もないのだ。

「その距離で…挨拶が出来るのか？」

王太子は、無造作に自分の手をレイシェスに向かつて投げ出す。

普通であれば、男が女にするような挨拶を、しろと言つているのだ。

過去、女公爵が存在しなかつたわけではない。

5公爵の地位は、この国ではとても大きかつたため、傍系に成り代わられるのを嫌がつた本家が、直系の娘を公爵に据えることがあつたのだ。

そんな彼女らの物語を、レイシェスもいくつか読んでいた。

だが、その中にこんな話は書いてない。

彼らも おそらく、男には分からぬつらさを数多く味わつたことだろ？

しかし、レイシスは今、ロアアールの公爵の名代だ。

家のため。

彼女はもう一歩足を踏み出し、膝を深く折つた。

「失礼いたします」

投げ出されている大きな手を、そつと下から触れる。

自分のすべての動きを、王太子は見ている。

完璧に。

レイシスは、男が女にするように完璧に、親愛の挨拶を終えたのだった。

そつと、手を離す。

視線を上げると。

「さすがは、ロアアールの血筋だな

満足そうな、王太子の目があつた。

だが、それは決して優しい瞳ではない。

「すぐに溶けるような、ひ弱な氷ではないといつていいのか」

手を取り返される。

身を引き上げられるかと思ひほどの強さで、手を引かれた。

あつと思つた時には。

「その氷の瞳に敬意を払つて、俺も挨拶をくれてやる。」

指先に。

口付けられていた。

もう一人の赤毛の男

ウイニーは、部屋から顔を出してキヨロキヨロしていた。

姉が出て行つて、もうどれほどたつだら。

たつた一人で部屋にいるには、とても退屈す、あい。

うつかり、フランの公爵でも通らないものかと、様子を見ていたのだ。

そうしたら。

一人の召使いを従えて、赤毛の男が廊下の向こうから歩いてくるではないか。

赤毛！

一瞬、公爵かと思ったが違つた。

彼よりももっと髪を短くした、そしてもっと若い男だったのだ。

耳が出るほどサイドの髪も短いため、赤い石の耳飾りが鮮やかに見える。

柔らかさよりも硬さを感じる体つきと、田つわ。

若々しい身体を、鈍い茶金の礼服がぴたりと包んでいる。

大人しい血には、とても見えない。

赤毛であるという事実に意識を取られ、ウイニーは思わず彼を眺め入ってしまっていた。

その髪の色を持っているといつことば、フランの関係者かと思つたせいだ。

そんな風に、長く眺めていたものだから、向こうにも気づかれてしまつた。

じきつ。

「」の時のウイニーは、相手に向かつて胸を高鳴らせたのではない。

赤毛の男が、自分を赤毛だと理解し、そして赤毛であることについての反応があるのではないか。

そう思つていたのだ。

しかし、とてもとても深い怪訝の眼を向けられた。

「……」

その怪訝な視線を、わずかもそらさないままこちらに近づいてくるため、ウイニーも引っ込むタイミングを見失してしまっていた。

いや、逆だ。

「」の赤毛の男との出会いを、自分の野望のきっかけにしたかった

のだ。

そのために、来たのではないか、と。

部屋の奥の前まで、お互に見つめあつよつた形を続け、そしてついに男の足が止まつた。

「ぐぐり、と喉がなる。

男の一言には。

「ロアアールでは……そんな無作法しか教えていないのか？」

思い切り、呆れた声だつたのだ。

瞬間、ウイニーは自分の髪よりも赤く、頬が燃え上がるのを感じた。

「この男は、自分がロアアールの娘であることなど、既に承知だつたのだ。

その上で、なぜこんな無作法な真似をしているのか　それが何よりも怪訝のだつたに違いない。

あ、あ、あ、だつて、赤毛。

ウイニーは、色とこなの同胞を見つけて舞い上がりてしまつていた。

フランの公爵のよつて、この赤毛を喜んでくれるのではと、心の底

で思っていたのだ。

どうして、そんな浅はかなことを考えたのか。

彼らのとつて赤毛など、ただの見慣れた色に過ぎないといったのに。

「ウイニー・ロアアル・ラットオージョンです！ し、失礼いたしました」

恥ずかしさに死にたくなりながらも、ロアアルの恥と思われたくなく、彼女は必死に自分の失敗を覆い隠そうとした。

「スタファ・フラ・タータイトだ。さつきは、兄上が無作法なことをしたようだが……あれを真似る必要はないぞ」

ウイニーが姉についてきたように、フラも公爵の弟が同伴していたのか。

彼は公爵のように、人の馬車に飛び込んでくる男ではないのだろう。

無作法、無作法と連発され、硬いはずの彼女の心臓は、カナヅチでカンカンたたかれている気分だ。

「公爵のおじ様は、無作法なんかじゃありません！」

しかし、自分を馬鹿にされるのはまだいいが、かの人のことを悪く言われるのは嫌だつた。

今日、初めて出会つたばかりだが、それまで手紙で何度も何度も

話をしたのだ。

優しく心をこめて、遠いロアアールの赤毛の娘のことを、思つてくれた大事な人である。

どれほど、彼の手紙に慰められただろうか。

それを、この人に分かるはずなどなかつた。

「おじ……様」

一瞬、ぽかんとした後　　スタッフはふつと吹き出した。

「あつはつは……あの兄上も、そうか、若い娘の目から見たらおじ様か」

おかしくてたまらなそつだ。

その笑いつぶりに驚いて、逆にウイニーの方がぽかんと彼を見つめてしまった。

しばし笑つた後、視線に気づいたのか、スタッフはよつやく表情を元に戻して咳払いをした。

「悪かった……だが、フランの前以外でこんな真似をすると、お前の姉上が困ることになるぞ」

一瞬。

視線が、開いたままのドアの奥の方へと動いた。

何だらう。

漠然とした『姉上』という表現には、感じなかつた。

姉のことを知つていて、そり言つてこられるよつた。

「姉さんを！」存知なんですか？」

どこかで、会つただらうか。

不思議に問い合わせると、スタッフはふーっと息を吐いた。

その息に乗つて、南国匂いが畳をわたりだ。

「『存知も何も……お前も知つてゐるよ』

やれやれといつ音で、言葉が綴られれる。

何も知らないウイーーー、呆れているのだらう。

「……寒い日だつたな。雪を見たのは、あの時限りだ」
思い出をたどる、声の調べ。

いまは見えない雪を見るよつて、一度視線が上へと上がる。

あー。

ウイーーの微かな記憶が、その音で刺激された。

あれは たいして寒くない日のこと。

スタッフの言葉と食い違うそれが、彼女の中で引きずり出された。

その年の、初雪が降った日。

あれは。

「お祖母さまの……葬儀に……」

フラン人間が雪を見る機会など、滅多にないだろう。

そんな彼が、見たというのならば、それはきっとロアアールで。

あの時、フランの公爵は来られなかつた。

代理で來たのが。

「そう……お前は、ただただ泣き続けてたな」

四年ほど前の記憶。

彼にとつては、ロアアールの何もかもが、珍しいことだったらしい。

しかし、ウイナーにとっては、この世の終わりかと思つた口だつたのだ。

周囲のことなど、気にする余裕なんかなかつた。

まだ、11歳だったのだ。

「姉上は……元気であられるか？」

そんなウイニーの過去への旅路など、知らぬ顔でスタッフはそう聞いてきた。

「はい、さつき王太子殿下のところへ挨拶に行きました」

何気なく、答えたつもりだった。

それは、ただの雑談なのだと。

「そうか、先触れを兼ねて挨拶に来たのだが……それは、残念だったな」

だが、スタッフは本当に、残念な表情を浮かべるではないか。

瞬間。

雷に打たれるほどの衝撃が、ウイニーの中を走り抜けた。

彼の表情に、社交辞令はない。

本当に、姉に会えずに残念そうだったのだ。

あは、そつか。

スタッフの目的は　レイシェス。

彼は、姉に会つために、わざわざいろいろやつて来たのだ。

四年前。

あの葬儀の日。

泣きじやぐるウイニーなど飛び越えて、彼は姉を見ていたのだろう。

白い肌をなおさい白く見せる黒いドレスに身を包んだレイシエスは、いつも通りあの日も美しかつたではないか。

悲しみでいっぱいだったウイニーでさえ、覚えていたほど美しい、ひとつ年上の姉。

彼女は、心の中で「×」をつけた。

スタッフの名前に、である。

彼にとつて自分なり、レイシエスのおまけの無作法な泣きじやくつてる赤毛の娘。

それに、公爵の弟であるならば、彼には姉を手に入れると可能性があつた。

ロアールに婿に入ることが出来るし、身分的にも申し分ないからだ。

「どうした？」

怪訝な問いに、「いいえ、失礼いたしました」とだけ答えて、ウイニーは自室へと戻り扉を閉めた。

いきなり暗礁に乗り上げた計画だが、殿方は彼だけではないのだ。

部屋の、姿見の前に立つ。

自分の顔をじっと見る。

「そんなに……悪くはない、わよね」

心が折れてしまわないように、そう自分に言い聞かせる。

姉が、特別なだけなのだ。

そうよ、姉さんが特別なだけ。

自己暗示をかける。

『ウイニーといふと、まるでフランシスのようだ元気になれるわ』

祖母の言葉を、心の糧に思い出す。

「よしー。」

「なんどいふでめげていたら、最後にはアールへの嫁入りだ。

それだけは、彼女は防がなければならなかつた。

だから、もう一度奮い立つ。

やつぱり、おじ様に相談しよう!

他の見知らぬ人に当たるより先に、フランの公爵ならば良い助言か、良い人を紹介してくれる気がしたのだ。

そう考えて、ようやく少し心が軽くなるワードだった。

姉の戦い

「公爵になつてしまつとは……残念なことだな」

王太子の揃から、よつやく自分の手を離すことに成功したレイシエスであったが、一度近づいた身を、勝手に下げることも出来ず、彼の前にかしづき続けているしか出来ない。

「5公爵の娘なら、側室に上がつてもおかしくないだね」

からかつてゐるのではなことしたが、彼女の姿をひどく氣に入つたといふことだらう。

側室。

王や王太子は、最初から正妃と決めて女性を娶らない。

公爵の子女や王の親族である貴族が嫁ぐことが多く、互いに不平等にならないためである。

誰が嫁いでも、嫡子と認められる子を産み、その子が王となつて初めて正妃として認められるのだ。

だが、ロアアールは、5公爵の中でただひとつ、王に娘を送つたことのない地域。

氣骨あふれる守りの地は、媚を売る」となど良しとしない。

だから、たとえレイシエスが跡継ぎでなかつたとしても、この男

の希望など叶つことなどないのだ。

いや、正直に言えば危なかつただろつ。

王太子が、本気で望めばロアアールに圧力をかけることなど、造作もないはず。

しかし、常識的に考えて、公爵となるべき女を王宮に引き寄せつていくわけにもいかない。

「」の肩書きが、初めてレイショスを守つた瞬間だった。

なのに、王太子はその傲慢な灰緑の瞳を、残酷な色に細めるではないか。

「やつにえは、確か……お前には、妹がいたな？」

ぞくつとした。

一つの意味で、だ。

ひとつは。

「妹は、お前によく似ているのか？」

王太子が、妹に興味を示すこと。

「いいえ、まったく似ておりません……指先ひとつ、爪の先ひとつ、まったく似ておつません」

ウイニーを、この男の慰みものにするわけにはいかない。

あの明るい妹が、この王太子とわずかも含みはずなどないのだ。

まろまろに傷つけられるのが、関の山だらけ。

ウイニーは、もう十分傷ついたではないか。

妹には、幸せな結婚を レイシエスの願いの中に、王太子はとても入れられなかつた。

「似ていなくても、美しいのか？」

「妹の噂は……聞かれておいでではないでしょ、う？」

ウイニーがこの場にいたら、間違いなく傷ついただらけ。

レイシエスは、これほどのことを言われるのだから。

しかし、もし妹が絶世の美女であつたとしても、同じことを言つただろう。

それが、彼女を守るためと信じて。

だが、話はそこで終わりではなかつた。

「では……」

前よりも更に、ぞつとする。

レイシスの考える、もうひとつの恋愛じこじを、この男が考
えているのではないかと思ったのだ。

「では……ロアアールは、妹が継げばいい」

息が、止まるかと思つた。

彼女が一番恐れている言葉を、どうしてこの男は、こともなげに
言い放てるといつのか。

レイシスには、公爵になる以外の道はない。

ウイニーが、それに相応しくないと言つてはいるのではなく、レイ
シスはそつなるべく、それ以外をすべて捨ててこれまで生きて來
た。

今更、別の道など歩けない。

別の道を歩く方法も、歩く靴もないのだから。

自分が、真っ青になつては、分かつていた。

その道を奪われたり否定されたりすることが、これほど意味しへ
田の前が暗くなるようなことだとは思つたこともなかつた。

「わた……」

言葉が、もつれる。

「わた……くしには……公爵以外の生きる道はござりません」

わなわなと震える唇で、それでもレイシエスは言い切った。

「どれほどの不興を買ひかなど、」この時の彼女には考へるにじが出来ず、それでも言葉にしなければ、とても自分が保てそうになかったのだ。

レイシエスとこの女の輪郭がぼやけて、靈になつてしまいそうに思えた。

キシット、すぐ側の椅子がきしむ。

王太子が、身を乗り出したのだ。そのまま、青ざめて震えるレイシエスの顔を眺め回す。

「屈辱に満んだ顔も……美しい。美しいとは、つべづく得だな」

王太子なるものは、かくも残酷に女を辱めるのか。

彼もまた、別の意味で美しい顔をしてくる。

「この世の善の美しさではなく、惡の美しさ。

女の白い肌に爪を立てて、いたぶる畜生でもあるのかと疑わずにいられない酷薄な笑み。

「公爵などといつ、こんなつまらない地位より……次の王の母になる方が、女としての出世だと考へないのか？」

「こんなつまらない。」

その言葉が、痛いほどレイシスに突き刺さる。

本当に、こんなつまらないことはない。

王太子の前に跪かされ、言葉で嬲られ、それでも罵ののしりとも立ち去ることも、許されないのだ。

女に対してこんな人間が、男を相手にしたとしても優しいはずなどない。

父も、どれほど王太子や王に辱められただろう。

しかし、父は耐えた。

耐えた挙句に、身体を壊したのだろうか。

どんなことにも耐え、ロアアールの領民を守るために生きる公爵。必要以上に、イスト（中央）に媚びることなく、じいじまでの歴史を紡いできた北西の地。

媚びないところには、風当たりがきつこいところ。

これもまた、その中のひとつ。

キッヒ、レイシスは上にいる王太子を見上げた。

「私は、どんなにつまらなかつと、必ず公爵になります」

そう。

これが ロアアルの答え。

ギシと、王太子は椅子の背に身を預けた。

不機嫌なため息をひとつ、あらぬ方へと吐き出す。

「もういい……下がれ」

ようやく、レイシエスはその地獄の場所から、立ち去ることを許された。

ここにいる、ほんの短い時間で、どれほど彼女は苦しめられただらうか。

「失礼いたします」

心の根元まで抉り出され、弄ばれたのだ。

初めて肌で知る、男の政治の世界。

一瞬でも気を抜けば、心をへし折られるか、媚びた方がマシだと思われる。

レイシエスは、心をがちがちに凍らせ、その中にさつきの衝撃を閉じ込めよつとした。

今後、あの王太子とずっと付き合つていかなければならぬかと思つと、憂鬱を通り越して、床に伏して閉じこもりたくなる。

そんな、酷い精神状態のレイシェスは。

「姉さん、おかえりなさい！」

ウイニーの明るい笑顔で、わずかながらでも救われた。

祖母がそうだったように、彼女も人を明るくする笑顔を浮かべられるのだ。

「姉さん、顔色が悪いけど大丈夫？」

慌てて駆け寄つて心配してくれる、丸い瞳。

ウイニーは、確かに美人ではない。

だが、自分の周囲の人たちの中で一番 温かい。

「大丈夫よ……ちょっと緊張しそうただけ」

その温かさに、ようやく自分が呼吸をしていることを意識して、レイシェスは大きく息を吐いたのだった。

姉は、とても疲れているように見えた。

初めての公務は、どれほど精神的な負担だったのか。

ウイニーには、それを推し量ることが出来なかつた。

姉が少し落ち着くまで、ふかふかのロア織りのソファで、温かいお茶を飲みながら話をした。

その真っ白だった頬に赤みが戻つてきた頃、ようやくレイシエスは次の行動に出る気になったようだ。

「フランの公爵様のところへ、贈り物を届けましょうか」

明るい話題に、ウイニーもほつとした。

届けると言つても、向こうがそうしたよつて、召使いが持つて行くだけだが。

それでは、とてもつまらない。

「一緒に、いつご挨拶に伺つていいか、手紙を添えない?」

だから、ウイニーはそつ提案してみた。

フランの公爵とは、手紙の方が付き合つが長いのだ。

特にウイニーは、手紙で彼とはとても『ぬれへ』な付き合ひをしていた。

今日の馬車での出来事は、物語のよつととても素敵ではあつたが、それでもやはり彼は『公爵』で。

手紙と比べると、少しだけ遠くなつてしまつ寂しい感じなのだ。

「素敵なドレスのお礼も書けば、喜ばれると想ひの」

特に、ウイニーはその感謝の気持ちを、より速く送りたい気持ちでいっぱいだつた。

王都に来ていなかつたとしても、ちゃんと彼女のこと数に入れてくれた、フランの公爵の思いやりは、本当に嬉しかつたのだから。

「もうね……もう今日は、大きな用事はないし……手紙でも書きましょうか」

姉も、気晴らしになると考えたのか、ウイニーの案にゆるやかに乗つてくれる。

そして、贈り物に添えた二人の手紙は、フランの部屋へと送られて行つたのだった。

一人の手紙は、次の手紙を呼んだ。

公爵からの短いそれは、二人のドレスのお礼に対し、喜んでもらえたことを光栄に思うというお返しの言葉と 30分後に、こちらからロアアルの部屋へ伺いたいといつものだった。

女性に訪問させるのではなく、自分から出向くといつりが、フランの公爵らしいといろか。

あの馬車の出来事だけ取つても、十分に彼が行動派であることが分かる。

「まあ、大変」

姉は、慌てて召使いに来客をもてなす準備をするよう、手配を始めた。

「フランの公爵さまお一人よね……」

「違うわ、二人よ」

レイシェスの独り言のような疑問に、ついウイニーは答えていた。

スタッフの顔が、頭をよぎったからである。

姉に興味を持つている彼が、せつかくの訪問についてこないはずがない。

次の時、わざかながらに沈黙がよぎった。

姉の顔が、ゆっくりとこちらの方を向く。

「……何で、知つてゐるの？」

とがめていはるわけではない、本当に純粹な疑問の声を聞いた時、
ウイニーはハツとした。

彼女が、非常に不作法なことをしてはいた時に出会つたのが、スタ
ファだつたのだ。

彼との出会いを話すには、その事にまで遡らなければならぬ。

「ええと……その」

結局、ウイニーは『ほんのちょっと』部屋を出た時に、たまたま
偶然、フラの公爵の弟に出会つたと説明したのだ。

「お、同じ赤毛だから……ね？」

フラの人間を判断する、一番の材料なのだと主張すべく、彼女は
自分の明るい髪を指した。

多少の怪訝は残つてはいるようだが、姉はとりあえず納得してくれ
たようだ。

「でも、一人で勝手に出てはだめよ……皆がフラの方みたいに優し
い人ではないのだから」

姉の諭す言葉は、妙に力が入つてゐた。

まるで、王宮に危険があるかのようだ。

いや、あるのだろう。

もしも、フーラではなくアール（西）の公爵関係者に不作法を見られたならば、ウイニーの失敗は姉の失敗 ひいては、ロアアールの失敗にされるかもしれないのだ。

「はい、ごめんなさい」

小さくななりながら、姉の言ひことを素直に聞いていた。

そういうひといる内に、30分などあつとこいつ間にたつてしまつ。もうそんな時間と驚く間もなく、静かなノックが部屋に響き渡つたのである。

フーラの公爵たちが、やつて來たのだ。

慌てて出迎えに立つ姉の斜め後ろに、ウイニーも立つた。

恭しくお使いによつて開けられる扉の向こうから、明るい髪が二つ現れる。

公爵とスタファだ。

「やあ、私の可愛いはとこ殿たち……熱烈な手紙に誘われて、早速伺わせていただいたよ」

出合えたことと、ドレスへの喜びは沢山書いたつもりだが、彼にとつてそれは、熱烈なものに感じたのだろうか。

姉に会わせて挨拶をするウイニーは、ちょっと恥ずかしくなつてしまつた。

そんな二人の元へと近づいて来て、公爵はそれぞれに手の甲への挨拶をしてくれた。

馬車ではおでこだつたウイニーは、嬉しくなつてしまつ。

ちゃんと大人の女性のように、扱つてもらえた気がしたからだ。

「弟のスタッフだ」

場所を譲つて、公爵は彼を紹介する。

「スタッフ・フラ・タータイトです……お由にかかるのは一度由です」

兄のようになレイシエスの手を取り口づける様は、さつき廊下で笑つていた男とは別人のよう。

気合い、入つてゐなあ。

ウイニーは、そつちの方に笑つてしまいそうになつた。

「一度由? もしかして……祖母の葬儀にいらしてくださつたのですか?」

ウイニーは、すつかりそのことを話すのを忘れていたといつのこと、元のウイニーは、聰明な姉はすぐにそれがいつであるか理解したようだ。

「ええ……あの時は、ゆつくり話も出来ずに失礼致しました」

「いや、私もまだ12でしたから……。」私が、「挨拶もきちんと出来ず申し訳ありませんでした」

熱くまつすぐなスタッフの瞳に、姉は恥ずかしそうにまつ毛を伏せる。

絵のように美しい紳士と淑女の会話とは、このよのぎなものを言うのだろうか。

本當は、馬車の中で姉と公爵を見た時も、同じじよひつな」と思つた。

大事に扱われるのが何て似合うんだろうと、ウイニーはじつと姉を見つめてしまった。

そんなスタッフの視線が、こっちを向いた。

びくとある。

「さつまぶりだな」

明らかなるウイーー用の顔で、彼は近づいてきた。

「そうですね……先ほどは失礼致しました」

ひきつりそうになる唇を何とか我がものとにして、彼女は聞こえのよい言葉を綴つてみた。

「不作法もほどほどにな」

ヒジメの一言と共に、手を取られて挨拶をされる。

今日の鬼門の言葉を、フランの公爵の前ですぱっと言われたこと、深い衝撃に包まれたウイニーは、彼の挨拶など記憶にも残らず風化していく。

ひどい。

心中でメソメソと泣きながら、彼女はスタッフとの出会いを激しく後悔した。

もし、あの出会いがなければ、きっともつと淑女のように扱ってくれたに違いない。

彼の中では、ウイニーは敬意を表するに値しない人間という値札をつけられてしまったのか。

いいんだ、もうこの人は最初から×だから。

一人のフランの男が、ソファに案内されるのを見ながら、彼女は再び心を強くする。

雑草のような心だと、自分でも思つ。

へこまないわけではないのだ。

ただ、へこんでいたとしても、何にもいじことはないと悟つた結

果、こんな性格になつたのである。

×の人を、気にかけていてもしょうがない。

問題は、いつフランの公爵にお願いするか、だ。

姉のいる前では、とても話しづらいこと。

ウイニーは、そのタイミングをこれから探していかなければならなかつた。

フランの男たちの話は、とても面白かった。

社交的な性格と、女性への献身の気持ちがあるためか、女性を楽しませる話題を数多く持っているのだ。

おかげでレイシエスは、何度も強い笑いを我慢しなければならかつた。

「雪を持って帰つて来いと、スタッフに言つたんだがな……手ぶらで帰つて来るなんて、あの時は失望したぞ」

「兄上は、雪が溶けることじい存知ではなかつたようですから、それを教えて差し上げたのですよ」

弟のスタッフも、兄のようこよへ言葉の回る男だった。

ただし、公爵よりも毒氣のある言葉が得意なようだが。

「フランは、雪は降らないそいつですが……水遊びは、出来るのでしょう?」

季節が逆の地域だけに、お互いないものねだりの憧れのよつな話が交わされる。

これらのことは、手紙でも何度か話に出したことがあるが、こうして言葉でやつとりをすると、また違つた趣があった。

「やつやつ、子どもの頃はよくずぶ濡れになつて叱られたものだ」

「よく、ずぶ濡れに叱られた記憶が、私にはたくさんありますよ、兄上」

仲の良い兄弟だが、少し年は離れているようだ。

スタッフが小さい頃は、きっと兄にいじつまわされたに違いない。

聞けば、公爵は27歳、スタッフは19歳だという。

二人の間には、更に一人の女性。

「母違いを入れれば、10人は越えます」

付け足されたスタッフの言葉に、レイシエスは反応に困つてしまつた。

近年のロアアールでは聞かないが、王族や一部の公爵は側室を持つている。

確實に男の子孫を残すための方法ではあるが、女の身からすると反応に困る話もある。

「え？ じゃあ、フランの公爵のおじ様にも、他に女性の方がいらっしゃるんですか？」

なのに、きょとんとした顔のウイニーが、ずばつと聞いているではないか。

その、余りに素直な疑問に、スタッフが向かいのソファで口元を押さえて笑っている。

何という話をしているのか。

驚きの余り、レイシェスは言葉を挟むことも、妹を制することも忘れてしまったのだ。

「そうだよ。正妃は亡くなってしまったが、一人の女性に仕えてもらつていいの」

だが、公爵は何のわだかまりも見せずにはめた。

レイシェスとスタッフの雑念など、ビニ吹く風だ。

ウイニーは、そんな公爵に嬉しそうに笑みを浮かべている。

「よかつた……それじゃあタータイトの公爵のおじ様は、お寂しくはないのね」

一瞬、妹が何を言つているのか分からなかつた。

「ありがとう……ウイニーは優しいね」

だが、公爵は十分その気持ちを汲んだ瞳で、赤毛の妹を見つめ返す。

「健康的な発想をするものだな」

スタッフは、呆れたような笑つたような微妙な表情で、ウイニー

の言葉に茶々を入れる。

そこまできて、ようやく少しだけ、妹の健康的な発想なるものが
レイシエスにも伝わった気がした。

ウイニーは、公爵が正妃を失った事を、きっと自分が祖母を失つ
た事のように思つていたに違いない。

自分が寂しかつたように、彼も寂しい思いをしているのでは
それが杞憂であつたことが嬉しいのだ。

本当に健康的な発想は、正妃と側室の関係などすとばし、ただ
公爵の幸せだけに重点を置いて考えた結果、出てきたのだろう。

さすがは、ウイニーといづべきか。

レイシエスには、とても追いつくことのできない患者だ。

それは、公爵を前よりもここやかにしたように思えた。

楽しい会話が、ひと段落した頃。

「よければ……」一緒に庭に出ませんか？」

スタッフは、レイシエスを外へと誘つてきた。

少し神妙に、しかし、男らしく黒い瞳を強めて自分を見ている。

「花壇で、春の花が咲き誇っていますよ。男一人で愛でるには、少々恥ずかしく思います」

花を見たいが、付き合つてもうえないかと誘つているのだ。

フランの男は、こんな誘い方をするものだらうか。

楽しいスタッフと花を見に行くのは嫌ではないが、ここには公爵やウイニーもいる。

一人だけで出かけるのは、おかしなことではないかと、公爵の方へ視線を向ける。

「もしよければ、弟のお相手をしてもうえるかな？ 弟より私の方がよければ、私がご一緒するよ」

「兄上……」

からかうような瞳を向けられ、スタッフは軽い睨みを返している。

この申し出は、事前に兄の許可を得ていたことが、そこで分かつた。

公爵に失礼にならないところのならば、レイシエスに断る理由はない。

ただ、ウイニーを残して行くことになるため、今度は妹の方を見た。

大丈夫だろうか、と。

田はロボビにものを語つ ウィーーの田は、きらめりと輝いて
じゅりに向けられているではないか。

「じゅり、じゅり

満面の笑みで送りだしてくれる妹に、腑に落ちない気持ちを抱え
たまま、レイシエスは庭に向かうことにしたのだった。

「まあ……」

王宮の中庭には、柔らかな春の花が咲き乱れていた。

ロアールでは、まだ見られない景色だけに、それはとても贅沢
なものに思えた。

その花に誘われたのは、何も彼らだけではない。

王宮の女性なのか、はたまた既に到着している公爵家の身内な
かは分からぬが、女性が殿方や召使いをともなつて、花を愛でて
いる。

「綺麗でしょうか？ わきまび、少し散歩に出た時に見ていたのです

スタッフの言葉の『わせせんべい』とは、ウイーーと田舎つた時だらうか。

「田舎へは、よくいらっしゃいますの？」

「いえ、これで三回目です」

「あら、それでも私より先輩でいらっしゃるのね」

「四年前に、来たところだらうか。」

「四年前と聞えれば、祖母が亡くなつた年。」

「その年のスタッフは、とても忙しかつたことだらう。」

冬の終わりにはイースト（中央）に、そして次の冬の始まりには、ロアマール（北西）にいたのだらう。

勿論、その冬の始まりとはあくまでもロアマールの感覚であつて、いちりではまだ秋だつたらうが。

「前回までは、まだ姉が一人來ていたのですが……嫁いでしまいましたので、駄ばかりのつまらない旅になりました」

「つまらないではないでしょ、楽しけりですわ」

「彼ら一人のやつとは、先ほど見せてもらつた。」

「あんなに、面白い言葉を交わせるのだ。」

つまらないなんて、とんでもなかつた。

「それは、女性がいる前だからですよ……子どもの頃から顔を突き合わせてくる男一人の会話など、女性に聞かせられたものではありますから」

とても想像できな」「ことを、スタファは苦笑しながら口にする。

「女性同士とは、違うのですね」

明るい色の花から彼に視線を移すと、やはり明るい色の短い髪が視界に飛び込んでくる。

その度に、ウイーー や祖母を思い出してしまひ。

「やつですね……女性同士の旅は、やがて楽しいのでしょうか」

「言外に、『やがて、つむむたこのじょひ』とやわされた気がした。

その言葉の中に、妹が潜んでいるのに気がつく。

既にウイーーと話をしたスタファは、妹の性質を知ったのだろうか。

「そうですね……ウイーーところと退屈はしませんわ」

言外を綺麗にくみ取つて、レイシオスはその柄杓を彼へと返した。

「それは……羨ましい」とです

スタッフの含んだ言葉は、どちらが羨ましいといつ意味だったの
だろうか。

まさか、こんなに早く公爵と一緒にきりになれるとは、思つてもみなかつた。

ウイニーは、それを喜びながらも、だんだんじきじきしてくる自分に気づく。

これから、自分が言おうとする」とを、彼はどんな風に聞くだろうか。

そう考へると、胸が苦しくなつてくるのだ。

「さじもさじも……我が弟は、うまくやれるかな」

出て行つた一人を少し気にしたように、公爵は扉の方を見やつている。

「……」

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせてはいるが、口の方がお留守になつてしまつ。

一人しかいないのだから、自分が答えなければ公爵が不思議に思うではないか。

「どうかしたのかな?」

当然、不思議に思われていた。

頬が熱くなつてきて、唇が渴いてしようがない。

と、とつあえず。

「ちょっとどじ相談があるのですが……」

改まつた口調で、そんな音を出してみる。

家中でも使つたことない、どこからか借りてきたような言葉。

自分の声が、自分のものとは思えなくなつてきた。

「大事な話のようだね」

優しい言葉に、ただこくこくと頷く。

首はまだ、ちゃんと動いてくれた。

その上下に揺れた視界で、ウイニーは部屋にまだいる幾人もの召使いを見つける。

姉についていったのは、一人だけ。

他は、まだいるのだ。

「あ、ネイラだけ残して……さがつていいわ

慌ててウイニーは、祖母から受け継いだ召使い一人を残し、他の部屋へと下げる。

彼女だけは、事情を知っているウイニーの味方だった。

すーはー。

よつやく相談が出来る空間が出来て、ウイニーは田の前に公爵がいるにも関わらず、大きく深呼吸した。

面白そつな田で見られているのは分かつてはいるが、いまの彼女はそれどころではない。

「あ、あの…… フラの公爵のおじ様……」

心臓の音がつるわなくて、自分の声がよく聞こえなくなる。

それでも、きっと公爵には聞こえているだろうから、ウイニーは振り絞った勇気をしつかり握ったまま、身を乗り出した。

「わ……わた……私を妻にもらつて下さるよつな、ご親戚の方はいらっしゃいませんか?」

ウイニー・ロアアル・ラットオージェン、15歳。

決死の覚悟で、ついにそれを言こきつた。

言こきつた反動で、そのつままぐつたりとソファに背を投げ出してしまつたが。

ぐつたりと同時に、公爵の顔を見るのが怖かつたのだ。

こま、彼は一体どんな顔をしていて、そしてどんな風に思つているのか。

公爵の娘が、こんなことをよその公爵に願い出るなんて、普通なら絶対にありえないだらう。

そんなことは何も承知の上で、フロの公爵だからこそ打ち明けたのだ。

「の気持ちを 理解してくれるだらうか。

「……ロアールの公爵は、何とおっしゃつているんだい？」

返された言葉は、じつへじへ常識的なものだった。

当然だらう。

「イーは、ソファの背もたれから何とか身体を話して、さりとて座りなおした。

「父は句も……でも……母は……私をアールにやさうと考へて……ようでや」

父が元気であれば、母の野望も打ち碎かれたかもしれない。

しかし、王都行きをせがんだ時の父は、去年よりももつとやつれていた。

もし、そのまま父が亡くなることがあれば、姉が公爵になれる。

そうなれば、きっとウイーーはアールに嫁にやられてしまつ。

姉は、決して母に逆らえないのだから。

「アールに……それはまた」

各領地の力関係を、よく分かっているだらうフランの公爵は、深く
考えるように呟いた。

「おじ様の親戚のどなたかが、一言妻に欲しいと両親に行つて
いただければ、私はフランに行けるかもしません」

『フランに逃げられるかもしません』

本當は、そう言つたかった。

祖母の故郷であり、この髪の故郷でもあるフランであれば、いまよ
りももっと自分が幸せになれるのではないか。

ウイーーは、若く浅はかながらに、そう呟つたのだ。

「ロアアールの公爵の奥方は、我々を余りお好きではないようだね

遠く離れていても、それは伝わつてしまつのだらう。

ウイーーたちの代で途切れた手紙や、付き合いの端々できつと
うつうものは出でてしまつだらう、謁見会のために都に来た父から、
何か聞いたのかもしない。

「ウイニーは……つらい思いをしただろ? ね

優しく情け深い声でそう語られると、簡単に心が流れてしまいそうになる。

でも、どう答えていいか分からなかつた。

そうどうと叫びてしまつと、姉や父に迷惑がかかる気がした。けれども、大丈夫と言つてしまつたら、一度とそんな優しい言葉を聞くことは出来ないようになつて。

「私……この赤毛は、大好きですよ。美人ではないけど、この色のおかげでいつでも明るい気分になれますから」

結局、変な言葉を並べてしまつた。

毎朝、呑使いを苦労させる髪だが、その分、おそらく人よりも長く鏡の前に座つてきたのだ。

毎朝毎朝、鏡に映る明るい髪を見る度、自分を励ましていた。

「ウイニーは、フラの花のよう不可愛らしく。明るい心と、お祖母様の古いドレスを喜んで着る、慎ましい心を持つ優しい女性だ」

最大の賛辞と言つていいだろ? ね。

公爵にとつては、女性に言い慣れた言葉の一つだろ? が、ウイニーにとつてはこれまでの自分を、全て肯定してもらつた気がしたのだ。

手紙で書いた、祖母のドレスのことがでも、むやんと覚えていてくれた。

「ありがとうございます、心から嬉しいです」

おかげで、涙をこぼすに済んだ。

泣いてしまったのは、余りに勿体なすぎたからだ。

今夜、ベッドの中で何度も何度も言葉を思に出して噛みしめて、幸せだと思つことだらけ。

そして。

「ウイニーの嫁ぎ先のことは、前向きに考えさせてもいいよ……大事な可愛いはとこ殿の人生だからね。真剣に考えなければ、私が一生後悔するだらけ」

フランの公爵は、ウイニーにとって本当に、最高の親戚だと思い知らされた。

こんなにも彼女の行く末を案じて、しかも真剣に考えてくれるというのだ。

光明が、見えた。

ロアールの長い冬のような、ウイニーのつらい時代の終わりが、フランの公爵の向こうに見えた気がしたのだ。

「あつがとついでこまか……お忙しことにひい申し訳あつませんが、
よろしくお願ひ致します」

『だからか借りてきた言葉だつて、いまの彼女はするやうひとつ口に
に出してしまひ。

本当は。

『ありがとう、おじ様!』

そう叫んで、彼の首にかじついて、感謝の抱擁をしたいほどだ
つた。

だが、こまのウイナーの中には『不作法』と鳴く赤い鳥がいたた
め、多くの力が彼女を引き止めたのだ。

そうしたら。

公爵は、少し苦笑して。

「ありがとう、おじ様、でいいよ

ものの見事に、ウイナーの心を読み当てられてしまった。

一字一句違わないのだから、恐ろしこことだ。

それほど、彼女は分かりやすい性格をしているのか。

そのせいで。

「ありがとう……おじ様……」

恥ずかしくなったウイニーは、赤くなりながらはにかむお礼が精いっぱいになってしまったのだった。

フラーとロアール

「フラーの方は、優しいのですね」

レイシエスの動きを、ひとつひとつ助けるようにエスコートしてくれるスタッフに、お礼を含めた称賛を送る。

ロアールでは、屋敷の中にいることの多い彼女は、従者にかしづかれて甲斐甲斐しく世話を焼かれることがあっても、こういうエスコートには慣れていない。

華やかな社交パーティではなく、軍事的な祝祭を主とする地域のため、礼儀作法の練習以外、ほとんど無関係な世界だったのだ。

「ロアール限定ですよ……フラーは、どこにでもいい顔をしているわけではありません」

称賛は、彼を喜ばせたのだろう。

目元と口元にたたえられた笑みは、香辛料の中にわずかに甘みが混ざったような、男性らしいものだ。

その笑みの持つ香りは、レイシエスの胸の中に入り込み、ちりちりと小さくはぜた。

「ひいお祖父様の時代の話かしら？」

ふふふと、思い出したら笑みが浮かんでしまう。

先々代のフーラの公爵は、この方のようだつたのかしら、と。

「ええ……いまもフーラの者は、みな覚えていります。『無謀公爵』の名と共にね」

黒々とした瞳の中に、過去が閃く。

フーラとロアアールが、深い縁で結ばれるきっかけとなつた出来事。

それは、レイシェスの曾祖父とスタファの曾祖父が、公爵だつた時代の話。

当時のフーラの公爵は、破天荒な人だつたといつ。

巨大な船を建造して、遠い異国と貿易を始めたり、異国の文化にかぶれたり。

そんな彼は、ある日思ひたつた。

いや、思ひたつてしまつた。

『そう言えば、雪を見たことがないな。よし、雪を見に行こうぞー。』

そして、手紙一つロアアールに送つたかと思うと、彼はその手紙の到着を追い抜くほど速く、北西の地に雪見をしに行つてしまつたのだ。

ただ、冷たくて白くて綺麗な物。

その程度の考えだつたフーラの公爵は、雪で覆われた道を見誤り

それはもう、見事に遭難した。

フランの馬にフランの護衛、フランの人にしては頑張った程度の厚着、とこう南の国の公爵一行が、雪に抵抗出来るはずもなく、彼らはばたばたと倒れてしまう。

そこへ、たまたま山手の村に、荷を運ぶ一行が通りかかった。

ただの行き倒れかと思ったら、馬車は立派だし、ほとんどの人が赤毛だし、これは何かやん」となき理由に違いないと、村までまだ遠いこともあって、慌ててその場で火を起こし、彼らに常備しているきつい酒を飲ませた。

何とか意識は取り戻したものなの、やはりとても自分で動ける状態ではなく、彼らは荷馬車から大事な荷を下ろし、場所を空けて彼らを村まで連れ帰ったのだ。

亡くなつた人もいたが、フランの公爵は何とか無事で、その後に連絡を受けたロアアールの公爵家に、呆れられながら運ばれて行つたところ。

その時のことを、フランの公爵は忘れられなかつたらしい。

『あれほど寒いところで暮らしているならば、荷は命と同じほどの意味があるう。それを捨ててまで、助けてくれたロアアールへの恩は子子孫孫まで忘れんぞ』

何度も何度も礼の手紙と贈り物を寄こし、ついにはその後、後継ぎだった祖父に、娘まで送つて寄こしたのだ。

それが、彼女らの祖母である。

『側室でも構わん』といつ、恐ろしい手紙をつけて送られたフーラの公爵の娘は、幸いにしてまだ結婚していなかつた祖父の、妻としておさまることが出来た。

そして、『フーラの無謀公爵と、優しきロアアールの民』なる話は、フーラに広く伝わり、物語にまでなつたといつ。

後に、その物語には続きが出来た。

二十年ほど前。

ロアアールの姉妹は、まだ生まれてはいなかつたが、父が公爵を継いですぐの時代。

大陸から、ロアアールへ大がかりな侵攻が行われた。

代替わりの不安定な時期に加え、ようやく遅い春を迎え、ロアアール中が忙しかつたその時を狙われたのだ。

防御戦に強い地域ではあるが、敵はしのぐのが難しいほどの多勢だつた。

父は、ついにロア（北）とイスト（中央）へ使者を送り、援軍を乞つたのである。

かくして、一番最初にロアアールへ増援に駆けつけたのは、フーラの騎馬隊であった。

走りに走ったり、拳の南の果てから北西まで駆けつけたのである。

父は、フラン救援は送つてはいない。

送つたのは 祖母だった。

父が、増援をひつかどうか迷つていた時には、既に手紙は送り出されていたのだ。

祖母が國から連れて來た老いた召使いが、命がけで単身フランまで手紙を抱いて駆け抜けたのである。

『今こそ返さん、かの日の大恩を』

先代のフラン公爵からの手紙は、その一文のみだった。

赤毛の騎馬隊を、敵は知らなかつた。

これまでフランの兵は、国境の戦いに参加したことはなかつたのだ。

イストの拳の王を最後まで苦しめた、魔物のことを強さは昔話ではなく、侵攻する敵をことごとく敵を蹴散らしたのだ。

『赤い槍の群れのようであつた

父の記憶の中の光景は、言葉でレイシエスへと伝えられた。

「おれは、二十年ほど前に、既にしていただいたのに……まだ覚えて下さつてゐるのですね」

その出来事のおかげで、ロアアールの軍の者は、フラーに対する態度大きく変わった。

今日、馬車がかち合つた時も、護衛隊がフラーの馬車だと確認するや、すぐさま攻撃的な態度をやめたのもこのおかげだらう。

残念ながら、ロアアールではフラーの援軍は、物語にはならなかつたが。

軍人と、国境近くの村の間だけで、語り継がれていくくらいだらう。

「ええ……あれはうちの曾祖父を助けて下さったお礼です。あと……うちの曾祖父が迷惑をかけた分のお詫びが終わつてません」

苦笑いしながら、スタッフは『』の曾祖父を荷物のように言い放つた。

「まあ……」

不敬な物言いに思えたが、陽気なフラーの侯爵家で、『冗談の』ように『無謀公爵』の話が語られている様子は、何故か簡単に想像がついた。

さあや、かの人は身内に迷惑をかけまくつたのだろう。

「お詫びなんて……もう十分でしてよ」

想像するとかかしくて、ついくすべくと笑つてしまつ。

そんな彼女を、スタッフはまっすぐに見ていた。

あの王太子の田を見た後だと、彼の田は暗くとも美しい夜空のように想えるほどだ。

「こつでもフリは、ロアアールの味方です、

南の風をはらんだ言葉は、レイシースの心に優しく絡みつく。

「ありがとう」わざこまか……その言葉、髪の先ほども纏つてはおりません」

遠い地の、普通であれば無縁の公爵。

しかし、遠いからこそ利害を超えてつながることもあるのだ。

これほど良好な関係は、大事にしたい。

だが。

「もしよろしければ、今度ロアアールへ遊びに行つてもよろしこですか？」

まっすぐなスタッフの言葉は、レイシースの心を少し重くした。

彼のせいではない 母のせいだ。

「迷惑ですか?」

浮かないレイシェスの表情を見たスタッフは、少し心配そうな眉になつた。

「いえ……そうではないのですが……」

どう、レースにくるんでも話さうか、彼女は迷う。

母は、フラを嫌つてゐる。

勿論、外交上の問題だから、表立つて好き嫌いを言つことはないだろう。

しかし、しわ寄せはすべてレイシェスに來るのだ。

母のしわ寄せの重さは、なかなかに辛いものがある。

「フラは、ロアールに片思いですか?」

更にスタッフに押されて、彼女はすっかり困つてしまつた。

ついに、彼女はひとつ決断をする。

「実は……母と祖母は、余り仲が良くなかったんですね……」

遠回りの話で、彼に分かつてもらえないだろうが、とそこを打ち

明けたのだ。

ロアール全体では、決してフラをないがしろにしているわけではないのだと。

「ああ……」

ふと、声のトーンが落ちた。

彼の心のトーンが落ちていくと、同じもののように思えて、はつと彼を見る。

美しい花を見つめながら、彼は半田になっていた。

「なるほど……分かりました」

明らかな不機嫌が、そこには隠れている。

自分の選んだ言葉が失敗だったと、レイシェスが後悔し始めた時
彼の言葉は、あらぬ方へと飛んだのだ。

「だから……ウイーーだけ違うのですか」

ぞくつと、した。

花に怒りを落とすよつこ、それが呴かれる。

怒りの向いている先が、自分ではないことは分かった。

しかし、優しいフラの人の表情に、怒りが閃く瞬間を見てしまつ

たのだ。

大きな落差に、心臓が止まるかと思った。

「あなたは、完璧な礼儀作法を身につけておいでだ……とても美しい。しかし、ウイニーは、まるでフラの町娘のようだ」

彼がウイニーに言つていた、無作法というもののことだらうか。

それは、あれは 何を言つても、言い訳にしか過ぎないことは、自分が一番よく知つていて。

放つておられた。

放つておかれているのを知つていながら、レイシェスも妹を放つておいた。

一応、最低限の教師はつけられていたが、それが何だというのか。期待もされていなければ、愛のある叱りもない中で、どれほど人は成長できるというのだろう。

そんな思いが、心中を駆け巡ったレイシェスは、知らず酷い表情を浮かべていたようだ。

スタッフは、微かに首を傾けて目を伏せた。

「すみません……同じ赤毛のせいだ、無意識に同族だと思つクセが出ました。ロアアールには、ロアアールのしきたりがありますね」

余計な口を挟みましたと、スタッフは困った眉をする。

曾祖父の時代、あれほどフラが感謝を表した理由が、彼を見ているとよく分かった。

とても、情に厚いところなのだ、かの地域の人は。

祖母にさかのぼる長い手紙のやりとりでも、それが十分に伺えるではないか。

赤い髪というだけで、ロアアールで冷遇されている妹に、すぐに気づいて、そして怒つてあげられる人たちなのだ。

彼らにとつて、ウイニーの冷遇は祖母の冷遇と、さうと同じように感じるのだろう。

「いえ……あなたの思つていることは、本当です。私は、頼りない姉で……妹一人、守れていません」

髪の色こそ違え、同じ両親から生まれた身内も守れない自分が、ひどく恥ずかしく思える。

だが、こんな人なら。

いや、こんな人がいるからこそ、ウイニーに希望があるのではないか。

「もし……あなたが嫌でないのなら……ウイニーをお嫁にもらつてくれませんか?」

これほど、同族に情の厚い彼ならば、妹をきっと幸せにしてくれるのでは、そう思つてしまつたのだ。

不羨な願いだとは、分かつてはいる。

両親に叱られるかもしれない、勝手な話なのは分かつてはいる。

それでも、ロアアールではウイニーは幸せになるのは難しいのだ。

母が生きている限り、それはない。

ならば、それならばいつか、フリに話すといつ手があるのでないか。

レイシエスは、本気でそう思つたのである。

スタッフは、険しい表情に変わつていった。

それほど多くはない、いくつかのことを考え、そして余り良い結論にたどり着かなかつた そんな表情。

「残念ですが……私は、あなたの妹を幸せにすることは出来ません

返事は、表情通りとこうべきか。

本当に残念とは、きっと思つていらないだらう正直な聲音が、ゆるやかにレイシエスの胸を刺す。

既に結婚相手が決まつてはいるか、心に決めた人でもいるのだろう。

「やつですか……忘れてください。あ、ウイニーは、このことね
……」

フランの男性に、結婚の話を断られたと聞いたら、妹の心の傷がひどいものになる気がした。

ウイニーは、自分の姿にコンプレックスを持つて居る。
それくらい、気づいていた。

母の言葉と、自分がいつも近くにいるせいだ。

だから、どれほど彼女が可憐らしいかレイシエスが言つても、決して妹には通じない。

その言葉は、本当に彼女を愛した他の者から伝えられなければ、何の意味もなさないだろう。

「分かっています……ただ、あなたがそれほど妹を心配していらっしゃるのなら……フランでよい嫁ぎ先を探してみましょ」

代わりに出された言葉は、とても魅惑的に思えた。

ウイニーがフランに嫁ぐ。

それだけで、彼女が幸福のように感じたのだ。

だが、顔も知らない、誰かも分からぬ相手に嫁がせることを考えると、まるで自分が厄介払いをしていくように思えてしまつ。

「フラン、ビビでもいいわけではない。

妹のことを深く考えすぎたレイシェスは、一めかみを押さえた。

軽い頭痛を感じたのだ。

すつとスタッフが、身を支えてくれる。

「大丈夫ですか？」

優しくも情熱を秘めている男。

彼が、ウイニーを望まなかつたのは、本当に残念なことだとレイシェスは思つた。

「これほどの扱いをしてくれる男であれば、妹もきっと幸せになれるだろ?」^{アーヴィ}

「はい……」

微かに震える声で、彼女は小さく答えた。

「部屋に、戻りましょう」

スタッフは、彼女の腕を取ると、美しい春の庭を後にしようとした。

後半、ほとんどその景色を愛でる間もなく、彼と妹のことで頭がいっぱいだつたレイシェスは、最後に一度だけ庭を振り返る。

ロアールには、まだ遠い美しい花園。

自分たちの幸せもまた、遠いのだろうか。

彼女は、すっかり気落ちしてしまった。

スタッフの事情

「お前……ウイニーを妻にする気はないか？」

兄 カルダにそう言われた時、スタッフはがっくりと肩を落とした。

今日は何で日だ、と思いながら。

ロアアールの部屋から帰つて来て、すぐの出来事だった。

「今日、私にそう言つてきたのは、兄上で一人目だ」

上着を脱いでソファに身を投げ出しながら、彼は天井を見上げた。

ウイニーが、嫌いなのではない。

彼女のことばは、髪の色のせいか同族のように思えるところがあつて、気にかかつてはいるが、それは恋ではないのだ。

「ああ、レイシェスがそう言つたのか……彼女も心配しているのだ

る（う）

物思いにふけるように、兄は小さく吐息をついた。

「お前は、本氣でロアアールの未来の公爵の婿になる気が？」

カルダは、そんなソファのひじ掛けに腰かけながら、弟を見下ろす。

子どもの頃から、8つも年上の兄と競つて来たが、大人になるまでほとんどの事で勝つことなど出来なかつた。

最近、ようやく乗馬と剣術で越えることは出来たが、スタッフの心には、負けず嫌いの根性が深く深く根付いている。

「可能性はあるだろ?」

彼女は、自分に良い感情を持つてゐるのは、一緒に歩いていく分かつた。

でなければ、自分にウイーーを勧めるはずなどない。

あの時の彼女の目は、本氣だつた。

本氣で、妹を自分に託そつとしていたのだ。

自分に対する信頼が、そこにあるよつと思えた。

「可能性か……公爵の奥方を乗り越えられれば、あるかもしけんな」

カルダの言葉に、自分の顔が歪むのが分かる。

娘たちに、どれほどひどいことをしているのか。

それは、レイシヨスの態度と言葉を見れば、嫌でも伝わつてくる。

趣の違う姉妹 そんな言葉では片づけられない、母親が抉つた だらう一人の間の溝。

その溝を越えてなお、仲良くしようといつ気持ちがあつたことが奇跡で、彼ら姊妹の性質のよさを表している気がした。

スタッフが、心を奪われているのはレイショスだ。

15の時、葬儀の会場で彼女を初めて見た。

12歳とは思えない、すらりとした彼女の立ち姿に、最初に目を奪われた。

白い肌に、黒い喪服の闇が絡みついているように感じて、彼女から目が離せなかつたのだ。

そのまま、闇に飲み込まれてしまつような儂を、そこに感じた。

フランにはない、書き消えるよつた線の細さ。

沈痛な面持ちの彼女が、泣きじゃくる妹を見る時だけは、深い慈愛に満ちた色になる。

彼女が、決して冷たい人ではないことが、そこから伺いしれた。

あの日からスタッフの心には、ロアアルの美しい娘が焼き付いているのだ。

兄が、一人と文通をしていると聞いた時、どれほど羨ましく思つたか。

しかし、カルダは弟には決して、レイショスの手紙を見せようと

はしない。

確かにそれは常識的な行為ではあるのだが、兄を恨めしく思つたこともあった。

『お前も、手紙を出せばいいだろ?』

あつさつと兄にそう言われたが、スタッフは腰が重かつた。

手紙は、ウイニーの名で送られてきていた。

あの、泣いていた赤毛の妹だ。

スタッフは、妹に手紙を出す気はない。

だが、ウイニー宛てに手紙を送りながら、中身はレイシェス宛てだと、余りにあからさますぎる。

それに、レイシェスではなく妹の名で送られる手紙の事情から、何か障害があることを感じていたのだ。

「しかし、お前が駄目となると… フラで相手を探すのは難しいかもしれんな」

「一むと、カルダは唸つた。

4年前から流れて来た記憶を握っていたスタッフは、そこでようやく現実へと足をつける。

個人的な興味はないが、祖母の血を濃く残す赤毛の娘だ。

恩義あるロアアールの娘でもあるヴィニーに、いい嫁ぎ先を考えてやるのは、良い事だと思っていた。

レイシエスに感謝もされるだろう。

「他の弟じゃ駄目か？」

スタッフの頭には、腹違いの弟たちが通り過ぎて行つた。

「曲りなりにも、ロアアールの公爵令嬢の相手だぞ……いくら公爵の息子とは言え、腹違いで納得させられるかどうか」

兄は、ロアアールの公爵夫人の壁を、それほど厚いと読んでいるのか。

娘を嫁がせるということは、今後もフランとの付き合いが深くなるということだ。

フラン嫌いの夫人が、フランからの申し出を喜んで受けけるとは思いたい。

よほど断りづらい相手でなければ、確かに難しいだろう。

5公爵の娘であれば、王太子の側室にもあげられるほど身分なのだから。

側室ではない、正妃から生まれた娘なら、なおのこと。

側室の子どもたちは、明らかに正妃の子とは違う扱いを受ける。

それは、勿論フラでも同じだ。

兄弟ところづけは、陛下との付き合に近くなる。

血筋は間違いため、勉学や軍事の訓練にいそしめば、高い地位もある程度約束されていた。

それを考えると、あの氣楽なウイニーであつても、格の落ちる相手であることは間違いないだらう。

「何も、フランだわらなくともいいと懲り。たとえば、せつかく王都にいるから、王太子に勧めてみるとかどうだらう」

スタッフの言葉は、半分は本気、半分は冗談だつた。

フラン以外の可能性を示唆したかったのが、本気の方。

ウイニーの礼儀作法では、多分難しいだらうといつのが、[冗談の方。

「馬鹿なことを言つたな……王太子殿下の相手なんてさせたら、ウイニーが壊されるだ

[冗談でも許し難いと言わんばかりに、カルダは唸つた。

赤毛の娘が問題というわけではなく、ビツや王太子の方が問題のようだ。

直接話したことも、それどころか会つたこともない相手のため、

どうじつ壞され方をするのか、まったく想像がつかなかつた。

ただ、ウィニーが幸せにはならぬ それだけは、十分に伝わつてくる。

「となると弟殿下か、ニール（東）の公爵の孫か……いや、ニールは年が合わないな」

王太子は問題だが、その弟たちならまともな者もいるよつだ。

兄は、ぶつぶつと赤毛の娘の嫁ぎ先について、口の中で呴いている。

「だが……本当はフーラに嫁がせたい気持ちでいっぱいだよ」

そんな呴きに、ついに終止符を打ちながら、カルダはため息を洩らす。

その気持ち、スタッフでもよく分かつた。

フーラの公爵家だけでなく、領民がウィニーのフーラ入りをどれほど喜ぶか。

想像するのは、簡単だつた。

『無謀公爵』の赤毛の娘は、ロアアールへ嫁いだ。

その孫が、偶然赤毛に生まれて、そしてフーラへ嫁いでくる。

あの物語を、そして二十年前の出来事を知つてゐるフーラの領民は、

まるで自分の恋の成就のように、ウイニーの婚礼を喜び、そして再び運命の物語でも書きあげるに違いない。

ロアアールにいた彼女からは、信じられないほどの歓待が待つているだろう。

しかし、フラにはロアアールの公爵の令嬢を受け入れる席がない。

「スタッフア……」

「くどい、兄上」

弟の心変わりを望む呼びかけの声など、すぐに分かる。

身内への情に厚い分、フラン人間は、身内への甘えもあるのだ。

「大体、私がロアアールに婿に入るのも、おそらく向こうの公爵夫人以外には、歓迎されると思いますよ。勿論、フランの領民にもね」

打倒・ロアアール公爵夫人。

スタッフアの心の中では、自然とそんな文字が踊り始めていた。

レイシェスの表情を、あれほど暗くさせる人。

その女性さえ黙らせてしまえば、ウイニーの心配も格段に減る気がした。

求婚の中から、一番いい嫁ぎ先をゆっくり選べるだろう。

しかし、他家の夫人に心変わりをさせる方法など、いまのところありはしなかつた。

「お前の心配はしていない。いつそ、わざわざレイシエスに求婚して、断られてこい。ウイニーには内緒で」

最後の一言で、よくよく兄の気持ちが分かつた。

そして、ウイニーを嫁にもうえと言っているのだ。

「じつくり時間をかけてもううよ、兄上」

そんなカルダの希望など、スタッフは思い切り蹴飛ばしたのだった。

「姉さん……ちょっと花を見に行つてもいい?」

ウイニーは、そつと姉の寝室に入つてそう聞いた。

長旅の疲れと、公務の精神的な負担が響いたのだろう。

姉は、頭が痛いと今日は早々寝室へと入つてしまつた。

時間は、夕刻。

まだ、太陽は夕暮れの位置で、沈み切つてはいない。

ウイニーはおとなしくしてはいたのだが、一人で寂しい思いをしていた。

フランの公爵との時間が、楽しすぎた反動だろうか。

「場所が……分からぬいでしょ?」

ベッドから半身を起こしながら、青い顔でレイシェスは止める。

「あ、大丈夫。ネイラが、行き方は分かっているみたい」

召使いは、主の遣いで部屋からよく出る人間だ。

そのため、王宮の出入り出来る場所は、ロアアールを出る前から、彼女らには教え込まれていて。

彼女の召使いのネイラも、ぎりぎりで王都に来ることが決まったが、ちゃんと下調べはすませてくれていた。

「そう……大丈夫？ 私も行きましょうか？」

「平気よ、姉さん。ちょっとだけ、花を見てくるだけだからおそらく姉は、ウイニーの身よりも『不作法』を外にさらけだす方を心配しているのだろう。

スタッフの一件で、それは十分懲りたので、今度こそはちゃんと公爵の娘らしくしようとやかにすればいいだけ。

「ネイラも一緒に連れて行くから、姉さんはゆっくり寝てて

「そう？ 気をつけて……早く帰つてらっしゃい」

心配そうな視線は消さなかつたが、最後にはようやくレイシェスは折ってくれた。

おそらく、庭が本当に美しかったのだろう。

そして、気楽に散策できる場所だったに違いない。

姉の許可に、少しほとしながら、ウイニーは召使いのネイラを連れて部屋を出たのだった。

初めて、一人で出歩く王宮で、わくわくする。

そのわくわくで、ウイニーは必死に重じをつけた。

公爵令嬢らしく、公爵令嬢らしく。

自分に呪文をかけながら、彼女はしずしずとネイラの誘導通りに廊下を歩いて行った。

これから少し遅つ夜に変わつていく時間のせいが、お偉い方々は既に部屋に戻つてしまつたようだ。

おかげで、すれ違ひの会釈や挨拶など、ほととぎす無縁で通る」とが出来た。

よつやく、庭に降りられるとじろくたびつづくと、ひよひよひよひよ西側を向く形になり、強い夕日が眩しくウイニーを襲つ。

この季節、ロアアルでは考えられない、光の強さだ。

本当に遠くまで来たのだと、肌で思い知る瞬間もある。

その夕日に照らされ、春の花はオレンジがかつた赤に燃え上がつているようだつた。

本当の色は別にあるだろつて、全てその色に染め上げられているのだ。

まるで、自分の髪の色のような世界。

やつ思ひと、少し上機嫌になつて、ウイニーは庭へと下つた。

自分の色の世界であれば、きっと自分に優しいに違いないと、根拠のない自信を持ちながら。

「わあ……」

黄色もピンクも白も、みな赤く彼女を迎える。

彼女は、花と夕日に包まれて、とても幸せだった。

「夕日の精か?」

そんな 男の声が聞こえてくるまでは。

庭の真ん中ほどにきたウイニーは、驚いて西を見た。

声はそちらから聞こえて来たが、その眩しい夕日のせいでの、誰かよく分からなかつたのだ。

誰、だろう?

ぽかんと、近づいてくる人を見ていたウイニーは、まつと我に返つた。

たとえ誰であれ、ここは王宮で、そして庭を散策できる身分の人であることは間違いない。

姉ならまだしも、ただのオマケでついてきたウイニーより、身分が低いはずがなかつた。

「失礼いたしました……」

慌てて、近づいてくる人に腰をかがめて挨拶をしようとすると。

「ドレスを汚したいか？」

腕を無理矢理取られ、強い力で立たされる。

それほど近くまで寄られたとは思いもせぬ、ウイーーは驚きで心臓が止まりそうになりながら、慌てて田の前の男を見上げた。

ああ。

さすがの太陽であっても、黒は染められない。

自分に影を落とす男の髪は、柔らかくも美しい闇の色。

無表情にも不機嫌にも見える瞳の色は、影のせいによく分からない。

そんな男に。

「本当に赤いな……フランの娘か？」

突然、前髪が 引っ張られた。

「いたつ

びっくりした。

いきなり、初めて出会った女の髪を引っ張るなんて真似をされる

とは、思つてもみなかつたのだ。

「な、何を……不作法だわ」

今日、さんざんウイーーが言われたその言葉が、反射的にぽろつと飛び出してしまつた。

慌てて口を押さえるが、時は既に遅い。

「不作法？ 私が不作法なら、お前は無知で無教養で、そして時代遅れのドレスを来ている田舎者だ」

言葉は、まるで刃物のようだった。

ひとつ田の痛みに気を取られていたら、容赦なく次々傷つけられ、もひどいがどれの痛みやら分からなくなつてしまつてこる。

時代遅れのドレス。

その言葉が、一番悔しかつた。

無知で無教養は、それは十分身にしみている。

これは、ウイーーが勉強を真面目にやらなかつた罪だ。

田舎者も、本当のことだひつ。

だが、ドレスの悪口だけは、彼女の怒りを跳ね上げてしまつた。

「これは、お祖母さまが遺してくれた、大事な大事なドレスよ！」

「このドレスが時代遅れというのなら、私は時代になんか乗らなくてもいいわ！」

カツとなつたウイニーは、この失礼な男の言い様の、その一点に囁みついていたのだ。

悔しくて悔しくて、これ以上切りつけられる言葉を投げられるのに耐えきれず、彼女は踵を返した。

速足で花園を後にする。

召使いのネイラが、慌ててついて来ているのを気にもかけられなまま、ウイニーは自分の部屋へと急いで戻ったのだ。

もう絶対、フランの人以外とは会わない！ フランの公爵の部屋以外行かない！

そう固く心に誓いながら、彼女は夕食も無視して、フテ寝をすることに決めたのだった。

赤い髪の記憶

フランの公爵は、王太子との謁見をよつやく許された。

まさか、夕食も過ぎた後の時間になるとは思つてもみなかつたが、身なりを整えて王太子の謁見室へと向かう。

正直、もう明日になるだらうと思つていた。

王太子はとても氣まぐれで、性質が余りよろしくない。

その上、頭だけは切れるせいで、本当にタチが悪かつた。

だから、こんな常識はずれな時間の呼び出しにも、何か意図があるのではと思つたのだ。

ウイニーと二人で話をしている時、既にレイシエスが挨拶に行つたことは聞いていた。

妹である彼女には言わなかつたが、それを良い事だとカルダには思えない。

どうせ王太子も、レイシエスの噂に釣られたのだろう。

その謁見が、うまくいったかどうかは分からぬが、少なくともフランの公爵と会つことは先延ばしにしたようだ。

「『機嫌いかがですか、王太子殿下』

謁見室の椅子にふんぞり返っている男に、カルダは恭しくも穏やかに挨拶をし、言葉をかけた。

彼が公爵を継いだのは去年だが、父の体調の関係で、2年前にも代理で来ていた。

だから、これが一回田の謁見と「」ことになる。

椅子の上からこちらを見降ろす視線は、カルダの頭に不躊躇に注がれている。

「相変わらず赤いな……妹はいるか？」

「フラの髪が赤いのは、今の始まつたことではないと「」に、今更どうしたというのだろう。

しかも、いきなり身内の話に振られる。

「あります……一人。しかし、どちらも既に嫁ぎました」

赤毛の女にでも、興味が出てきたのだろうか。

側室に寄りせと言われる前に、カルダは先手を打つた。

「」の王太子に、可愛い妹たちをやるものかと思いながら。

田をつけられる前に嫁に出しておいて、本当によかつた。

胸をなでるしていたカルダであったが、王太子が不機嫌な表情に変わっていくのが見える。

「お前は、嫁いだ妹まで連れてきているのか？」

常識外れを、咎め飄るよつて王太子は言葉を投げる。

「おつしやつている意味が、分かりかねます」

カルダは 慎重に答えた。

余り不機嫌になられると、後が面倒だからだ。

アール（西）の公爵が、2年前の謁見会で、酒の入った杯を頭上でひっくり返されるという事件があった。

勿論、彼の頭に酒を飲ませよつとしたのは王太子だ。

晚餐の席での話である。

あのおしゃべりな公爵に、そつしたくなる気持ちも分からぬではないが、人前で大恥をかかされた彼は、カンカンに怒つていた。

勿論、怒つたところで王族に逆らつとも出来ず、王に苦情を陳情するのが精いっぱいだつたよつだ。

そのおかげか、王太子の前でアールの公爵は、無駄に口を開かなくなつたとか。

とにかく、この王太子を不機嫌にすると、口クなことがないのだけはよく分かつていた。

「赤毛の娘を、連れてきているだろ？」「

これ以上、しらばっくれるなどでも言わんばかりに、強い言葉でカルダを串刺しにしようとする。

赤毛の、娘。

一瞬、真っ白になりそうだった意識を、カルダは何とかどめた。思い当たる人物は、たった一人しかいなかつたのだ。

ウイニーである。

一体、どこで会つたのか。

少なくとも、その髪の色だけで王太子がフランに探りを入れるということは、ちゃんと話をしたわけではなさそうだ。

彼女　ウイニーが、自分をフランの人間だと言つはずなどないのだから。

しかし、悪い気配が大挙してカルダの足元に集まつてくるのが分かつた。

もし、ここで彼女がロアアールの娘であることを知つたら、ロアアールの姉妹がとても不幸になる気がしたのだ。

レイシェスは、まだまだ公爵を務めるには、精神的に育ち切っていない。

そんな彼女では、おそらく王太子に妹を取り上げられようとしても、抵抗出来ないだろう。

それどころか、姉妹のお互いの気持ちを利用して、一人とも手に入れかねなかつた。

「いいえ……殿下。私が連れて来ているのは、第一人で『ゼロ』ます……髪の色をお間違えではありますか？」

慎重に、本当に慎重にカルダは言葉を綴つた。

「この男の視界から、ロアアールの姉妹を隠してしまつよ！」

「確かに赤……いや、夕日のせいが……もういいさがれ」

フランの公爵に、じつと見られているのに気づいた王太子は、眉間に皺を深く刻んで彼を追い出した。

ありがたい事に、これで慣例の挨拶は終わりにしてくれるようだ。

謁見室を出て血室へと戻りながら、カルダはゆっくりと安堵の息を吐き出した。

とりあえずの問題は、回避出来た。

だが、まだ安心できた訳ではない。

おそらく、王太子の気まぐれな興味だろうが、今度ウイニーと会えば、どうなるか分からぬ。

参ったな。

「どいで、王太子に見られたのか。

部屋に戻つて、召使いに酒を持つてこさせていると、スタッフがやつてきた。

まだ部屋着にも着替えていないところを見ると、彼の戻りを待つてくれたようだ。

「珍しい、兄上がそんな疲れた顔をしてるなんて」

顔を見るなり、驚かれた。

王太子のあの発言は、よほどカルダを疲れさせていたようだ。

「赤毛の娘について聞かれた」

蒸留酒のグラスを受け取りながら、カルダは弟にさつきの出来事を語つた。

スタッフの反応は、ただの一言。

「あの馬鹿……」

弟らしい、分かりやすい一語に、全てが凝縮されていた。

勿論、それは王太子に向けられたものではなく、彼らの愛すべきはどこへのものなのだが。

「また、ふらふら外に出たのか

弟はそう言つたが、カルダはそこを責める気はない。

まだ15歳なのだ、ウイニーは。

好奇心も旺盛だし、初めての王宮で浮かれているところもあるだろ。

ただ、彼女は女性なのだ。

レイシェスと一緒にいるからこそ、ウイニーは自分の姿を平凡なものだと思っているだろうが、決して悪いわけではない。

年の頃も、そろそろ結婚の話が出てもおかしくない。

迂闊にその姿を人にさりすと、どこから婚姻の話が来るか分からぬのだ。

それが、ウイニーの望むものであれば、カルダも反対はしないが、残念ながら王太子が釣り上がることもある。

「今度会つたら、一度と部屋から出ないよつて言つておけ」

レイシェスびいきのスタッフからすると、ウイニーの行動は姉の評価を落とすものだと判断したようである。

公爵代理で葬儀に出席させたら、ロアアールで恋の風邪にかかつってきた弟だ。

そんな彼にかかるば、ウイニーは自分の妹のよくな扱いになる。

赤毛同士の親近感ゆえだらう。

兄弟の中で一番末の子だけに、自分より下の面倒を見るのは、そ
う嫌いではないうだ。

「そうだな……余り出ない方が、ウイニーのためだらう」

弟にはまだ、王太子がレイシェスだけ特別に、最速で謁見した話
はしていない。

したところで、スタファにはどうすることも出来ないし、王太子
への余計な恨みを蓄積するだけだらう。

それより、まだ弟にウイニーを守らせておく方がいい気がした。

弟が彼女のこと好きになれば万々歳　などと云ふことは、も
はや考えていない。

フランの男は、愛が強い。

一途な愛ならば、どこのまでも貫き通す。

いつぞ、強すぎると云つてもいい。

だからこそ、カルダは正妃を持ちながら、一人の側室も持つたの
だ。

正妃一人にぶつけるには、愛が強すぎて女性を壊してしまいかね

なかつた。

実際、正妃は身体を壊してしまつたではないか。

正妃に最初に子を産んで欲しかつたため、誰よりも多くの愛を注ぎ続けた挙句の結果だとするならば、彼女が亡くなつた大元の原因は、自分にあるのだろう。

それほど愛の深い血筋のため、もはやスタファの心が動かないことは分かつた。

だが、妹のようにウイニーを守れば、それが結果的に彼の愛するレイシエスとロアアールを守ることになる。

「ウイニーが部屋を出てしまつのは、退屈だからだらう……ちよくちよく遊びに行つてやれ」

「私が子守？」

兄の言葉に、少し不満そうではあつたが、それでもウイニーを口実にレイシエスに会う機会が増えるという考えに至つたのは、カルダの目からも非常によく分かつた。

「分かつた……ウイニーの子守をしよう

しばしの後　弟は勿体ぶりながらそつ答えたのだった。

兄さん

翌日　何故かスタッフがやつてきた。

ウイニーの部屋に、だ。

姉は、まだ調子がよくなく、隣室で横になつてゐる。

そんなんまらない午前中、何の前触れもなく現れたのだ。

「人のこと、無作法って言えるんですか」

まつたく淑女に対する扱いをしてくれないスタッフに、彼女は不平をぶつける。

召使に慌ててお茶の用意をさせながら、彼をソファへと案内した。

「昨日、私たちが戻った後……部屋から出たの？」

しかし、切り返された言葉は、彼女をギクリとさせる。

昨日の記憶を最悪の最後で締めくくった男が、目の前を駆け抜けたのだ。

ベッドで散々、その男のことをなじりながら眠ってしまったのだが、朝起きて

みたら怒りよりも違うものが押し寄せてきて責められた。

もしかして、自分はとんでもないことをしたのではないか、と。

彼が誰かは知らないが、姉よりも身分が高かつた時、間違いなく迷惑をかけるだからだ。

公務の重圧にふせつている姉を、朝ちらつと見て、その罪悪感は計り知れない。

いまのレイシエスに、昨日の自分の失態など、とても告白できなかつた。

「ちょ……ちょっと花を見に行つただけです」

昨日の外出を、何故スタッフが知つてゐるかは分からぬが、花を見に行つた
という点では彼も同じではないか。

悪いことをしたわけではないのだと、とりあえず主張してみるとすると。

彼は、はあーっと深い深いため息を落としたのだった。

全身で呆れているかのようだ、ウイニーには見えた。

「だから、私が来たんだ」

自分の連れて來た召使いを、スタッフは呼ぶ。

召使いは、ずっと手に持つていた箱を、二人の間のテーブルの上

に乗せた。

「ウイニーを退屈させると、何をするか分からぬからな」

彼が箱を開けると、そこからはカードだのチエスだのダイスなど
が出てきた。

いかにも、これで遊べと言わんばかりに。

「ひひ、遊びど」の、大抵相手が必要だ。

一人でカードをするような趣味は、ウイニーにはない。

「昔、お祖母さまが教えてくれたカードくらいしか……遊び方はよく分かりません」

箱からそれぞれ取り出していたスタフアの手が、言葉で一度止まつた。

その目に、明らかなる不機嫌が見えて、ウイニーは内心で同じほど不機嫌になる。

「しようがないじゃない、と。

祖母くらいしか遊んでくれる人はいなかつたし、母がうるさかつたせいで、姉とおおっぴらに遊べなかつたのだ。

「ね、姉さんだつて……余り遊び方は知りませんよ」

不機嫌を向けられるのが嫌で、レイシエスを引き合いで出す。

スタッフは、姉にはそんな顔をしないのではないかと思ったのだ。

姉が、遊び方を知らないのは、勉強が忙しくて遊ぶ暇がほとんどなかつたからなのだが。

「心配するな……ちゃんと教えてやるから」

ため息はひとつだけ。

不機嫌は、ゆっくりとその陰に隠れていった。

やはり、レイシェスという免罪符が、一番スタッフには効くようだ。

褐色の長い指でカードを器用に扱う彼を、ウイニーはじーっと見ていた。

姉に会いたいだろ?に、わざわざ自分の相手をしに来てくれたといふことは、おそらく公爵に頼まれたからだろ?。

そう思つと、まるで自分が重いだけの荷物であるかのように思えた。

もう、ここでの目的はある程度達成したのだし、後は本当にこの部屋にこもつて大人しくしている方が、みんなのためになるに違いない。

目的 それは、自分の嫁入り先をフラの公爵に託したこと。

あとはただ、彼を信じて待つていればいいのだから。

それならば。

そう自分が心に決めて、ちゃんとそれを実践するところのならば。
スタファが、わざわざ本命でもない自分に、付き合つ必要はない
のではないか。

これ以上、フーラの人たちに余計な手間をかけさせるのは、さすが
のウイニーであっても心苦しくなる。

「えつと……私、ちゃんと部屋にいます。もつ、部屋から出ないの
で……大丈夫です」

ウイニーは、いつもよつよつと神妙に言葉に出してみた。

しかし、ハハハとすぐさまスタファに、笑い飛ばされたのだ。

「お前は、フーラの血が濃すぎるよつに見える。フーラの人間に、大人
しくしどけなんて……無理な話だ」

事実　　彼は、そのまま話を続ける。

「事実……兄上だって、ロアアルの馬車を開けただらうっ！」

それが証拠と言わんばかりに、スタファは昨日起きた出来事を挙
げた。

自分の兄である公爵を、大人しく出来ない悪い見本にしてしまつ

たのだ。

「ひど……」

「だから、フラン人間はそういう性質なんだよ。大人しくしていられない、ずっと無言でいられない」

ウイニーの反論など、即座に言葉でがぶせて邪魔し、その上、指を一本折つてみせるのだ。

1・大人しくしてられない。

2・ずっと無言でいられない。

心当たりがありすぎて、彼女は恥ずかしくなった。

しかし、その性質は決して自分だけのものではないのだと、スタッフアは言つ。

フラン人間が、大体そうなのだと。

そう言えば、この扱いの難しいスタッフアも、昨日さつそく姉を訪ねてこよつとしていたし、庭に連れ出していた。

言葉に至つては、ウイニーの方が言い負けるほどだ。

「いいんだ……それがフランの普通だからな」

そして。

馬鹿なことを口にしつづける。

それを止められない気持ちを、フランの人間なりば分かると そう、スタッフは言つてくれたのだ。

ロアアールでは、とても厄介なこの性質も、フランにかかれば当たる前。

何で、居心地のよさがついた國なのだろう。

ウイニーは、心の底から感動してしまつた。

いま、じつして来てくれているのも、公爵に言われたのと、姉への行為のオマケではあるだらうが、少しはウイニーのことを心配してくれているのだらう。

「スタッフさん……お兄さんみたい」

子供の頃から憧れていた兄という存在が、いまそこにいる気がした。

兄さえいえば、レイシエスは重圧から解放され、自分ももつと幸せになれるのではないか。

そう思つたこともあつた。

ウイニーの言葉に、ぴくりと彼の指先が反応する。

「兄さん……そう呼んでもいいだわ」

何だか、少し嬉しそうだ。

彼は末っ子だと聞いたので、自分より下がいることが嬉しいのだ
らうか。

「え……」

まさか、そんな切り返しがくるとは思つてもいなかつたので、ウ
ィーーは
ちよつと困惑つてしまつた。

「えつと……スタッフ兄さ……ん？」

これで、呼び方が合つてゐるのかどうか分からないうが、彼女はそ
お一つと言葉を並べてみる。

「悪くない」

つむ、と彼は満足そうに頷く。

えへ、えへへ。

ウィーーは、彼への苦手意識が軽く吹つ飛んだのを感じた。

苦言の数々も、妹に対してもつてゐるのだと思えども、何一つくこ
むことなどない気がしたのだ。

「えへ……スタッフ兄さん、もし私がフリのどこかにお嫁入りする
ことになつても、いつ呼ばせてくださいね」

すっかり浮かれたウイニーは、遠くにある未来まで引き寄せてしま葉にした。

自分の未来が、全部ばら色に見えたのだ。

瞬間

曇ったスタッフの表情を見てしまった。

ウイニーは、素直な娘だった。

無作法で、町娘のように奔放なところはあるが、笑うと可愛いし、『兄さん』なんて呼ばれた日には、本当に自分の妹のようと思えてくる。

正妃の子の中では、末っ子であるスタッフにとつて、その言葉は甘く心をくすぐった。

しぶしぶ子守をする予定が、彼女のためならばそれもいいかと思いつめていた矢先。

「えへ……スタッフ兄さん、フランビーかにお嫁入りすることになつても、じつ呼ばせてくださいね」

見過[レ]せない言葉が、彼に激突した。

話の流れが読めていなかつたスタッフは、反射的に自分の表情を抑えることが出来なかつたのだ。

そうだつた、と。

どれほどウイニーを可愛い妹と思つても、彼女の嫁いでくる席はフランにはなかつたのである。

その上、スタッフの曇つた表情は、過敏に伝わつてしまつ。

「あ、あの……す」い身分の方でなくていいんです。ロアアルは、そんなに贅沢な暮らしませんから、……あの……」

不安に揺れる黒い瞳と、少し呆然とした唇。

足場の少ない中、握っていたはずの綱が、いつの間にか少し遠くに離れて揺れているのに、必死に手を伸ばそうとしているような姿。

「そういうわけにはいかない。フランがロアアルを見下すような婚姻を、持ちかけることも出来ないし、そうしたところで断られるだろ？」

スタッフは、ゆっくりと立ち上がった。

向かいの、彼女のソファへと近づくためだ。

自分の姉たちを見てきたおかげで、フランの女性がどう癪を爆発させめるかまで、よく知っているつもりだった。

「でも……でも……」

現実を見たくない、小刻みに動く目。

スタッフは、そんな彼女の足元に膝をつき、その手を取った。

血の気が引いた手は、とても冷たい。

これが、今のウイニーの心の温度なのか。

「大丈夫だ……フランでなくとも、兄上が一番いい嫁ぎ先を考えてくれ

れでいる。心配しなくていい」

小ちい子に言い聞かせるよつて、スタッフは声を穏やかにしてそう言った。

「こんな言葉や声を出したことは、これまでない。

家族が自分にしてくれた」とを思い出し、真似るしかスタッフには方法がなかつた。

「……」

よほど、フライに嫁ぐところを楽しんでいたのだろう。

ウイニーは、すっかり氣落ちしてしまつたようだ。

赤毛はフライの象徴のよつたものだからこそ、彼女はそこには溶け込みたかったのだろう。

「うん……」

奇妙な音で、彼女は頷いた。

スタッフに向かつて、そういうよつては見えない。

自分の中の言葉に、自分で頷いているのだろうか。

「うん……あ、いいえ、はい……分かりました」

少しずつ、顔が上がつていいく。

手に、温度が戻つてくる。

「他の国でも大丈夫です……元々、ビニでもよかつたんです。心を碎いてくれてありがとうございます、スタファ兄さん」

笑顔に、なる。

荒地から生まれた、小さな双葉を見つめるような瞳だ。

小さな小さな幸せでも、大事に自分の糧として生きている人の瞳。

彼女は、赤毛ではあるが、完全なるフラの人間ではない。

その身には、確かにロアアールの血が入つていて、そしてロアアールの地で生きてきた時間がある。

この我慢強さと、小さな幸せを満足する性質は、彼女をこれまでの地で育ててきたのだ。

胸が、痛んだ。

ウイニーを、フラに迎え入れることが出来ない現実を、今ほど呪つたことはなかった。

許されるならば、無理やりフラに連れ去つて、ターティー家の娘として、晴れやかに血族にでも嫁がせただろう。

それほど、スタファはウイニーのことを思つた。

「Jの気持ちが恋であれば、何の障害もなかつたといつた」。

彼の中に、もうレイシェスが住んでいるのだ。

わづくつと手を離して立ち上がると、スタッフはその赤い頭をぽんぽんと軽くなでる。

兄が、この少女に心を碎きたいと思つ気持ちが、本当によく分かつた。

手紙できつと、Jの性質はよく表れていたに違いない。

Jの環境を呪わず、すれず、姉を妬まずにいるのが、どれほどまでに大変なことか。

こんな、スタッフにとつても身内のようになつた彼女を、幸せに出来るかどうか分からぬところに嫁がせるのは、確かにとても面白いことではなかつた。

何か。

何か、いい方法はないか。

彼女の側に突つ立つたまま、彼は必死に考えたのだ。

親戚中の顔を、一人ずつ頭の中で検分し始めた。

そんな自分を、見上げている目に気づく。

ウイニーは、丸い目が見えなくなるほど細めて笑つていた。

「励まされるのって……嬉しいですね」

ロアールの公爵夫人など、この世から消えてしまえばいい。

彼女の笑顔は、スタファの中の攻撃的な部分を上昇させるに過ぎなかつた。

昨日から、姉妹への仕打ちの数々が垣間見える度に積み重ねてきた感情だが、またもそれに大きく重いものが乗せられたのだ。

フラーの本気の励ましなど、こんなものではない。

もしも、ここにウイーを心から愛するフラーの男がいたならば、公爵夫人を激しく憎み、そして彼女を何日も何日も慰めただろう。

彼女は、その愛を受けてしかるべきだ。

怒りを余り面に出さないよう努めながら、スタファは向かいのソファへと戻つた。

レイシェスも、妹とは違う意味で苦しんでいる。

自分が、彼女の愛を許される男であれば ふと視線を、隣へ続く扉へと向けた。

「あ、姉さんは……ちょっと具合が悪いみたいで。で、でも、お昼過ぎには起きるつて言つてました」

そんな彼の仕草を、ウイーは見逃さなかつた。

廻過ぎにまはスタッフアが会えるように聞いてみる、とまでも言わせてしまったのだ。

何を、やつてんんだ私は。

心配しているはずの少女に、逆に気を遣わせてしまつなんて。

「そんなことはいい……今日は、お前のところに来たんだ」

スタッフアは、腐つてもフリの男だ。

ウイーーを踏み台にするよつな最低な男に、絶対になりたくないなかつた。

そうしたら。

そうしたら、だ。

彼女は、嬉しそうに笑うではないか。

影ひとつない笑いを、心から浮かべるではないか。

こいつは、馬鹿だ。

スタッフアは、思った。

最初から、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、本当に大馬鹿のようだ。たつたこれっぽっち、自分が大事に扱われただけで、この世の全

てが楽園であるかのように笑うのは

馬鹿以外にありえなかつた。

ダイス

レイシェスは、わずかに漏れてくる隣の部屋の笑い声で目を覚ました。

鬱々とした気分が、その明るい声で慰められる。

「この部屋はカーテンを閉め切つて日は入らないが、隣の部屋には太陽があるように思えたのだ。

「どなたかいいらしているの？」

控えてくる召使いに問つと、フランの公爵の弟　　スタッフだといひ。

ウイニーを妻にすることは出来ないと言つていたが、随分と仲良くなつたようだ。

隣室の明るさが気になつて、レイシェスはつこにベッドから離れることにした。

昨夜の夕食も、そして朝食も取つていなかったため、飲み物とクッキーを少し用意をせる。

空っぽの身体に、甘いものが染み渡る感覚を味わい、よひよへー息ついてから支度を始めた。

今日は、深い落ち着いた赤のドレスにする。

顔色が良くないと、思われたくなかったのだ。

母は彼女に青いドレスを着せたがるが、レイシェスは赤い方が温かみがあつて好きだつた。

身支度が整うと、臥せつてゐる間に届いた、いくつかの事務的なことをこなす。

今回の滞在中の予定表が届いていたり、他家からの贈り物が届いていたり、あるいは昨日送つた贈り物の、礼状を早々に送つてきているところもあつた。

見れば、それはロア（北）とニール（東）の公爵である。

ロア・アールとは友好な、穏やかな関係の地域。

それから返事を書き終わり、ひととおりのことを済ませて、ようやく彼女はウイニーの部屋へと向かつたのだ。

寝室から続く扉を、使用人にノックさせる。

そこが、妹の部屋。

「姉さん、もう平氣なの？」

カードで遊んでいた手を止め、慌てて妹は立ち上がつた。

スタッフも同じく立ち上がり、一ぱくと進み出でてくる。

「朝から、お騒がせして申し訳ありません」

今日は手を取られることはなかつたが、わざわざ側まで寄つて深い礼を見せる。

情熱のひるがえる瞳だ。

ロアールの憧れる、温度の高い黒曜石。

「いえ……私が余り相手を出来ないので、ウイーーも退屈でしょう。心遣い、痛み入ります」

レイシェスは、彼とその向ひにいる妹に、順番に視線を移した。

ウイーーは、えへへと笑つている。

心の底から上機嫌のようだ。

「いま、スタファ兄さんにカードを畳つっていたの。お祖母さまの教えて下さったのとは、全然違うの」

姉さんも、一緒にどう?

勧められるテーブルには、カードの他にも遊具の入つた箱がある。

フランの男たちは、オモチャ箱持参で都に来たのだろうか。

それに、『スタファ兄さん』とは。

彼が異論を一切挟まないとこを見ると、その呼び方には同意しているのだろう。

二人の間には、一切色氣などないのだと それを、周囲に知らしめるような呼び方だった。

彼が昨日言つたことは、やはり揺らいでいないのか。

「兄上には、やたらと待ち時間があるので、暇つぶしです。勿論、一度勝負が始まつたら、どつちも本氣ですが」

彼女の視線が、箱に釘付けになつていることに気づいたのか、スタッフアはどうぞと道を開ける。

「どつちが勝つんですか？」

彼の言葉に反応したのは、妹だ。

結末が気になつて気になつて仕方のない、好奇心に溢れる黒い瞳。

それに、つい微笑みが溢れてしまう。

「ふふ……どちらなのでしょうね」

ちらりとスタッフアに視線を投げ、それからウィニーの横に腰かける。

そして、姉妹二人でにこにこと彼を見上げるのだ。

「6：4で兄上が勝ちますよ……これで満足いただけましたか？」

白状させられる真実に、彼は苦そうな表情だ。

嘘をついても、さしたる罪もない質問だったといふのに、彼は偽らなかつた。

「やっぱり公爵のおじ様の方が、お強いのね」

天真爛漫に、妹がスタッフに追い打ちをかける。

もはや、彼も子どもではないのだ。

このような遊戯で、大人に遅れを取ることはほとんどないだろう。

といふことは、あくまでフラの公爵の方が実力は上といふことだ。そんな残酷な現実を、ウイニーはざくざくと刺したのである。

「ダイスだけは、私が強い……運がないわけではない」

さすがに面白くないのか、スタッフは言い返してきた。

運。

言葉に、レイシェスは口元をおさえる。

笑い声が、出そうになつたのだ。

弱い言い訳なのは、彼も分かっているのだろう。

スタッフは、不本意そうに向かいのソファに腰かけながら、箱に手を突っ込んだ。

その手からすると、とても小さく見える白い茶のダイスが一つ取
り出された。

白い方を、ウイーーに渡す。

「同時に投げて、大きい方が勝ち。分かりやすい運の勝負だろ?」

妹に考える暇を取れない速さで、説明が終わるや否や「せーの」と手を振り出す。

「えつ……」

慌てながらも、ウイーーも真似てダイスをテーブルに転がした。

「……いまのナシです」

妹が、悔しそうに唸る。

彼女の出した目は 1。

何がどうあつても、勝てない数字だった。

「勝負は勝負だ、ウイーーの負け」

5を出した男は、1の白いダイスを持ち上げ、今度はレイシェスへと差し出す。

勝負を、とこり」とだらり。

自分の指の白さとは、また違つ白。

軽く、それを指の中で回してみる。

「こきまじょうか……セーの」

性急な掛け声は、レイシロスを慌てさせる。

さつきの妹の気持ちがよく分かる一瞬を駆け抜けながら、彼女はダイスを放つた。

からからと、テーブルの上で転がる六つの顔。

そのダイスが、近くで止まつたスタッフの茶のダイスにぶつかって、ようやく止まつた。

「あー」

ウイニーが、驚きの声をあげる。

出た四は 6。

最高の数字だ。

だが。

「引き分けですね

レイシロスを見つめながら、彼のダイスもまた6の四を上に向けていたのだった。

「動いてきたぞ」

匂になり、一度部屋に戻ったスタッフに、兄が一枚の触れ書きを差し出す。

明日の夜の、晩餐会についてだ。

それが、どうしたのだろうか。

謁見会の晩餐会は、一回行われることになつてゐる。

ひとつは、謁見会の前。

毎回お馴染みの、それではないのか。

「家族も同席されだし、だそうだ」

たつた一文付け足されたその部分を、兄が読み上げる。

スタッフにとって、それは小さな違和感に過ぎなかつた。

しかし、兄にとっては大きな違和感なのだろう。

「前回までは、公爵の妻か後継ぎが同席出来る程度だつた…」

わざわざ、こんな但し書きは書かれていなかつたところなのだ。

「謁見会の前の晩餐会は…王太子殿下主催だったな」

スタッフは、思考を組み立てた。

王は、謁見会まで姿は現さない。

それまでは、挨拶から晩餐会の取り仕切りまで、王太子の管轄だったはず。

といふことは。

「まさかとは思ひけど…赤毛の娘をあぶり出すために、こんなことを？」

カルダは、しきりと首を傾げている。

その様子は、スタッフにとつて少し滑稽に思えた。

兄貴分として、ウイニーの味方につくと決めたら、突然身内の顔
眞目が出たのか、彼女がとても可愛らしく見える。

あの奔放なところでさえ、赤毛をかいぐりかいぐりして可愛がり
たいほどだ。

「失礼だな、兄上は。ウイニーに、一田で恋に落ちたとは考えない
のか？」

だから、はつきり言つてやる。

可愛いあの娘なら、王太子に一田ぼれられる価値はあるのだ、と。

「うう……」

突きつけられた言葉に、一瞬兄は息を呑んだ。

「信じられないな、兄上は。ウイニーが、今の様子を見たらどれほど傷つくだろう……あんなに兄上を信頼しているところの」「

珍しくスタッフは、兄に向けて置みかけた。

普通、なかなかしゃべりで勝つことの出来ない相手だが、ウイニーの事への指摘は相当痛いところを突かれたのだろう。

「ウイニーが可愛いことは、私だって分かっている。ただ、王太子の趣味ではないだろうと……」

言葉は、弟のじつと見つめる眼力にかき消された。

「言い訳は、男らしくないな……」

そして　観念したようだ。

「すまない、ウイニー」

そして、彼女たちの部屋のある方角を向いて、膝をついて懺悔を始めた。

兄もフラの男ならば、女性に蔑まれることなど、とてつもなくつらいことだろう。

「…………」

そんな兄が、えらく長く黙り込んでいたため、怪訝にそっちを見ると、祈りのために組んだ手をそのままに、虚空を見ているではないか。

何があるのかと、スタッフも真似てみたが、その先には天井とうか壁というか、そんなどうでもいいものしか見当たらない。

「そう……か」

だが、兄には何か見えたのではないだろうか。

まるで、神から啓示が降りてきたかのよう、田に強い光が宿つたのだ。

「そうだ……その手があった！」

兄は、すくっと立ちあがり、スタッフの方を振り返る。

「昼食後、ロアアールの部屋へ訪問するぞ。触れを出せ」

のじのじと、兄につっこロアアールの部屋へ来たのはいいが。

スタッフは、いまだに何の説明も受けてはおりず、ただ後ろにくつづいているしか出来なかつた。

「わざわざ、公爵までお越しいただきありがとうございます」

美しいレイシェスが、一人を出迎える。

その斜め後方で、赤毛の妹分も笑顔で立っていた。

おそらく、兄が思いついたのは、そのウイニーのことだらう。

前後の話の流れから、スタッフはそう推測していた。

席を勧められ、向かい合わせで姉妹と兄弟が向かい合つ。

昨日と同じ対面のように見えて、そうではない。

「突然、お邪魔してすまないね……大事な話があつたものだから」

切り出しが、穏やかな公爵笑顔。

兄弟一人の時はざつぐばらんだが、公爵として向かい合つ相手には、一枚皮をかぶるのだ。

時々、鼻につくほどもつたいぶつた言い回しをするところは、スタッフは余り好きではなかつたが。

「大事なお話……ですか」

笑顔の兄に対して、レイシェスは慎重な受け答えだった。

ロアールを代表して来ているだけに、多少心配そうにも感じる。

あんまり、回りくどい言い方はするなよ。

思慮深い彼女を、兄の言葉が惑わすのではないかと思い、軽く睨んでみるが、こちに視線一つ投げてよこさない。

「わつ…… ウィーーの結婚について、なんだが」

言葉は、意外にシンプルだった。

更に、スタッフの予想通りだった。

瞬間、ウィーーの腰が一瞬ソファから浮きかけ慌てて戻る。

反動で、隣のレイシェスも軽く揺らされた。

その揺れが、完全におさまっていない中。

「ウィーーが望むのなら…… フラを結婚相手に選んでもらえないだ
るつか」

兄は、微笑みながら言った。

「……

スタッフは、無言で親戚検索をいちからやりなおし始める。

この場で、自分が言つべき言葉などありはしない。

だが、兄が答えを出してしまつ前に、自分なりの解答にたどりつ

いておきたかったのだ。

なのに。

ちらりと、レイシェスがスタッフの方を見た。

まるで、自分がウイナーの結婚相手なのでは そんな怪訝の瞳で。

そうじゃない！

誤解を即座に解きたい心をぐつと押さえる。

ウイナーは、驚きで目をまんまるに見開いていた。

彼女は、もはやフランの嫁入りはあきらめていだらう。

なのに、再び兄はその根本をひっくり返したのだ。

この場にいる、兄以外の三人の心は、いま大きく揺れている。

もし、くだらない答えを口にしようものなら、この三人を失望させることになるのを肝に銘じて欲しい。

レイシェスの視線に、軽く首を横に振った後、横目で兄を見ると。

優しい微笑みの瞳を。

ウイナーに向けて。

「うへ言つた。

「ウイーー……私の正妃になつてくれないかい？」

部屋の空氣と三人は、兄の言葉に完全に固まつてしまつた。

「……………？」

「……………」

「……………」

突然、彼女の人生は足元からひっくり返っていたのだ。

ウイニーの結婚先として提示されたのは、公爵自身の正妃。

「過去、大伯母がロアールの公爵の正妃として嫁いだことを考えると、フランソワの正妃が、一番ふさわしい場所だと思ったのだよ」

フランソワは、穏やかに言葉を続ける。

「……………」

「……………」

まさか公爵の正妃などという、最上の地位を用意されるなんて想像もしていなかつたウイニーは、すぐに考え始めることが出来なかつた。

「……………」

姉は、ようやく考え込むような表情で、視線をやや下に落としていたし、スタッフは逆に天井の方を見上げていた。

そんな中、最初に口を開いたのは、スタファだった。

「義姉上が亡くなつて四年……喪はとつぐにあけているし、確かに兄上がいつまでも新たな正妃を娶らないでいるのは、時々問題になつていたけど……」

フラの内情をよく分かつてゐる彼は、ゆっくりと自分の言葉を噛みしめるように言葉を吐く。

義姉上。

新たな正妃。

それらの言葉は、ウイニーをドキリとさせた。

そう、フラの公爵は初婚ではない。

昔、愛していた人がいて、その人が亡くなつたのだ。

どんな人か、彼女が知つてゐるはずはない。

15歳の大人になりきつていらない頭では、まだその辺りの複雑なことを上手に消化出来そうになかった。

だが。

公爵の誠実な気持ちは、きちんと伝わってきて、少しずつウイニーを嬉しくさせていく。

「どうか分からぬところに嫁入りさせるへりしなら、公爵自身がもうつてくれると言つてくれたのだから。

だが、自分が公爵夫人に相応しいかと言われると、真反対だとしか答えようがない。

ロアールのおまけがフラン西妃では、かの領民たちの期待にこたえられず、がっかりさせてしまうかもしれない。

喜びと困惑の入り乱れるウイニーは、そつと横の姉を見た。

どう思つてゐるのか、分からなかつたのだ。

そうすると、レイシエスもまた自分の方をちらりと見るではないか。

ウイニーの心を、まるで伺ひつけた。

そして、姉は薄く、寂しげな笑みを浮かべた。

どういう表情であつても、本当に美しい姉は そのまままつすぐと領主の方へと向き直るのだ。

「お心遣い、本当にありがとうございます」

どんな回答であらうとも、切り出しが儀礼的なもの。

レイシエスが、何を言おうとしているのか分からぬまま、ただウイニーはさきどきと鼓動を高鳴らせた。

「もし、このお話を本気でおっしゃつて下さるのでしたら、我が父に出来るだけ速く、そして非常に強い希望の意思を、お送りいただかねばなりません」

姉の答えは。

肯定的なものだつた。

じきつと、ウイーーの小さな胸が跳ねる。

「戯れで、こんな大事なことなど言わなによ。 そうだね……はと」
殿の言つ通り、要請は速く強くなければならないだろ」

言葉の最初は、ウイーーを向いて。

言葉の終わつは、レイシロスの方へ。

赤毛のはねつかえりに、フリの公爵は『本気だよ』と語つてくれ
ているのだ。

その感情は、物語の中のような『恋』ではなくてからこ、ウイ
ーーにも分かる。

でも、『好意』は本当にたつぱりと詰まつていた。

姉を見ていると分かるが、公爵の結婚は恋愛だけでは片付かない
難しさがある。

必ず、どこか不自由さがつまつるものだ。

そんな立場の中、『好意』でウイナーを選んでくれたといつゝことは、本当は物凄いことなのだろう。

姉や公爵の言つ『速く強く』といつのは、父の容体に関係しているに違いない。

父が亡くなつてしまえば、母が侯爵家の実権を握りかねない。

レイシェスは、母には頭が上がらず、押し切られてしまつ可能性があるからだ。

そうなれば、この話を蹴つてしまつ可能性がある。

それを、姉は危惧しているのだ。

父がまだ判断出来る内に、そして既にある不穏な噂が本当になつてしまつ前に話を進めるには、もはや多くの時間は残されていないのだ。

自分が、正妃に相応しい人間でないことは、分かつてゐる。

一番田の正妃であることも、言葉としては分かつてゐる。

だが。

たつたいま。

一瞬だけ現れた、公爵の助け船に飛び乗らなければ、永遠に次の機会などないのかもしれないのだ。

「ウイーーは、君なおじさんでは嫌かもしれないが、……どうだろ
うへ。」

物凄い速度で、自分の人生を賭けた思考を繰り広げていた彼女は、
ふつと微笑みながら、見えた公爵の言葉に、すぐには気づけなか
つた。

「えつ、あつ、や、そんなことは……ありません。公爵のおじ様は
……あつ……」

しぶりもどりくなつて答えていた内に、顔が真つ赤になる。

自分が、これまで彼のことと何と呼んでいたのか、思いだしたの
だ。

『公爵のおじ様』

この言葉は、さつげなく彼を傷つけていたのだろうか。

確かに、まだ三十歳にもなつていない人なのに。

「公爵のお……いえ、フランの公爵様は……とてもお若いです……」

今更、どの口がそんなことをいつのだらうか。

ウイーーは、必死に自分の言葉をフォローしようとした。

「いいんだよ……確かに、十三も離れていたら『おじ様』と呼ばれ
ても仕方がない」

笑われて、ますます顔が熱くなる。

「では……私の妻になつていただけるだらうか？ 私の可愛いはと
」殿……いや、ウイニー嬢」

その笑いを緩やかにおさめながら、公爵は自分の方をはつきりと
見つめてきた。

彼のなでつけた赤い髪が、一筋乱れてその額へ落ちる。

自分と同じ、言ひことを聞きにくい髪。

そんな髪を持った人から、まっすぐに求婚されているのだ。

船が。

来る。

海とは無縁の、船とは無縁のロアアールのウイニーの前に、すう
つと流れてくる一隻の船。

きつと。

もう。

一度と。

来ない。

「よろしく、お願い致します」

船に飛び乗つた。

「ほんことになると……思つてもみませんでした」

レイシエスは、そう切り出した。

側にいるのは、スタッフ。

彼は、まるで昨日と同じよつて、レイシエスを庭へと連れ出してくれたのだ。

ずっと詰めていた息を、その開放的な空間で深く吐き出す。

妹の、人生を決める一瞬だつたのだ。

何一つ簡単な選択など、なかつた。

遠いフラン地の、年の離れた公爵。

更に、前の正妃が亡くなつた後の、新たな正妃として入るのだ。

複雑で、非常に難しい立場である。

苦労しないはずなどない。

遠すぎて、助けの手も差し伸べにくい。

何かあつた時、妹はかの國で孤独な存在になつてしまいはしないか。

それらを全部考えた上で　なお、ロアアールにいるよりは、ウイニーのためではないかと考えたのだ。

だが、同時に。

妹を、手元から失うのである。

ウイニーは、レイシェスの心の支えだ。

彼女の明るさや強さに、どれほど助けられただろう。

そんな大事な妹が、滅多に会えないほど遠くに行ってしまう」とを、手放しで喜べるほど、レイシェスは大人ではなかつた。

そして、憂鬱も付きまとつ。

ウイニーが嫁いだ後は、母と二人暮らしになる。

どれほど、それが息苦しいことか。

妹の結婚にまつわることを考えると、上手に微笑めないので。

「不安ですか？」

スタッフが差しだした腕を、レイシェスはそつと取つた。

「そうですね……私が、もうすこしつきりした大人だったらと、いつも思います」

判断といつものほ、とても難しい。

どんな結末がやってくる可能性があるのか、いくつも想定をしなければならない。

不幸な可能性を出来るだけ回避できるよう、あらゆる対策を打たねばならない。

そして。

どんな結末になろうとも、それを受け入れ、対処し 責任を取らなければならない。

それが。

公爵になる、レイシエスの一番大事な仕事なのだ。

「支えが必要でしたら……いつでも寄りかかって下さい」

スタッフの腕にかけた手に、すっと手が重ねられた。

あつ。

挨拶とは違う体温に、彼女はどきつとじつしまつ。

まさか、ね。

一瞬、自惚れたことを思いかけて、レイシエスは困った笑みになってしまった。

彼は、フランだ。

公爵の手紙でも挨拶でも、これまでの会話でも、かの国の男性が女性に情熱的なのはよく分かる。

優しさや親しみのこもった多くの言葉を並べるのは、じぶ当たり前ではないか。

「困らせてしましたか？」

「いらっしゃるかの春の日差しに、髪は明るく赤い光を放つのに、黒い瞳は憂いを揺らした。

「いいえ……お心遣い、ありがとうございます」

曖昧な笑みに変えて、レイシェスは花を見るように視線を動かした。

本当は、ちゃんと見てはいないのだが。

スタッフは、好ましい男だ。

ウイニーを実の妹のように可愛がり、レイシェスに対して紳士な態度で接してくれる。

だが、さつき胸を掠めた自惚れが、たとえ事実であつたとしても、一人に未来はないだろ？

一つ目は、母がフランを嫌つてること。

ウイニーをそこへ嫁がせる分は、遠くへ追いやれるという理由で許されるかもしれないが、スタファを喜んで迎えることは想像出来ない。

一つ目は、ウイニーとフラの公爵の婚姻が成立した場合、ロアールとフラの政治的結びつきは完了したこととなる。

これは、周囲の目から、という意味だ。

それなのに、更にフラからスタファをレイシエスの夫として迎え入れた場合、他の公爵や王からあらぬ疑いをかけられてしまつかもしれない。

特定の公爵同士の、結びつきが強くなりすぎると。

ただでさえ、王家に側室を送らないロアールだ。

謀反の嫌疑でもかけられては、非常に厄介になる。

それらを考えると、スタファを相手として選ぶのは、非常に難しい。

特に、あの王太子がその内に王となり、レイシエスは長く付き合わねばならないのだ。

迂闊な穴でも見せよつものならば、無慈悲に突き刺されるだらう。

「貴女の考えていることを、当ててみましょつか？」

視線を花に逃がしたレイシエスに、スタファは不思議なことを言

つた。

じきつとする。

自分の婚姻さえも、政治的な駆け引きの材料など知られたら、わざややらしくないと思つだらう。

だが。

こんなことを考へてゐるなんて、知られるはずがないのだ。

なのに、不安は拭いきれず、おそらくそんな目で彼を見上げてしまつた。

「『ウイニー』が、フリに行つてしまつたら寂しい』、ピコッピコ
でしょうか？」

優しいけれども、力強い瞳。

そして、その唇は 少しだけからかうつな響き。

「まあ……当たりです」

少し前に、確かにそれは思つたことだつた。

本心が知られずに済んだ」とて安堵しながら、レイシエスは肩の力を抜いて笑つてしまつた。

なのに。

「美しいも賢きロアアールの姫……」

その強い瞳は。

レイシェスの青い瞳を射ぬいて、止まる。

「ロアアールの冷たい冬から、貴女をお守りする炎として、私を側に置いてはいただけませんか？」

美しい言葉と、情熱的な声。

本当に雪さえ溶けそうな熱い聲音と瞳に、一瞬めまいを覚えた。

ついせつとき、駄目だと思つたばかりなのに、スタッフはその禁断の地へ足を踏み入れてしまつたのだ。

フラン太陽に照らされ、自分の肌が溶けてしまいそうな錯覚の中。

「それは……とても難しいと思われます」

これ以上の障壁を越すには、彼女は若く、それほど強くはないのだ。

憂鬱に視線を伏せるレイシェスに、しかしスタッフはふつと笑つた。

はつと顔を上げると。

前よりも、燃え上がった目で自分を見ている。

「それは……私自身のことは、好みしく思つて下さつてることにつ意味に取つてもよろしいですね」

障害を前に、何一つ怯む気配もない。

それどころか、なおさら情熱の炎を燃やすよつた男だった。

これが、暑い国の血なのね。

想像も出来なかつた反応に。

困りながらも、レイショスの心は 摺れてしまつた。

なりたじじととなりるじと

晩餐会ー

ウイニーは、皿をキラキラ輝かせてその皿葉を歯みしめた。

そんな素晴らしいものにて、自分が参加出来るとは思つてもみなかつたのだ。

王太子主催のそれは、今回はいつもより華やかに行われるといつことで、公爵家の家族の参加も許されたといつのだ。

絵本の中でしか知らない舞踏会が、頭の中に溢れ出す。

しかも。

エスコートつきー

フランの公爵が、ウイニーと踊つてくれるといつのだ。

憧れと幸せな気分で、いまの彼女は本当に胸がいっぱいだった。

公爵のおじさまのお嫁さん。

複雑な事情はあるが、ウイニーの前にそんな可愛らしい道が作られたのだ。

あとは、父がそれに頷きをえしてくれれば、彼女のフランへの嫁入りが決まるのである。

いつもは、祖母のドレスを着るのが好きだが、晩餐会は公爵から贈られたドレスを身につけるつもりだった。

きっと、彼はとても喜んでほめてくれるだろう。

「つきつせと、ウイニーは晩餐会の相談のため、姉の部屋へ訪れた。

「……はあ

だが。

レイシェスは、ソファで物憂げにため息をついている。

そんな表情すら美しい。

「姉さん、どうしたの？」

変な感心をしながらも、ウイニーは問いかけた。

ちらりと視線で妹を見るが、返事は深いため息。

「心配事？」

「いいえ、たいしたことではないわ」

薄く微笑まれて、少し心が痛む。

自分に、明るい道が見えたせいだろつか。

一人、あの母と暮らさなければならぬ姉が、不憫に見えるのだ。

現金な性格だと、自分でも思つ。

人の不幸の心配が、ここにきてようやくウイニーも出来るようになつたのだから。

「姉さんは……何かやりたいことはある?」

だから、つい自分の感覚で姉に聞いてしまつた。

ウイニーは、ただロアアールから離れて幸せになりたかったのだ。

それ以外の夢や希望は、何ひとつ持つていなかつた。

すると、ちらりとレイシエスは自分を見る。

「私は、公爵になるわ」

その言葉は、姉と自分の差を大きく見せつけるだけだつた。

レイシエスは、『夢』や『希望』など口にしない。

公爵に『なる』という、確固たる意志。

『なりたい』ではないのだ。

思考の根元から、姉とは違うのだとほつきつと思い知らされた。

同時に。

「ウイニーには、責任など何もないこと」と云つべ。

それが、どこか寂しくも思えた。

「姉さん……」

しょんぼりと、姉の名を呼ぶ。

すると、美しくも優しいレイシスは、難しい顔を苦笑へと変えながら、穏やかな瞳を向けてくれる。

「心配しなくていいのよ……難しことを考へてはいるけど、苦しことを考えてくるわけではないから」

不思議な、言葉だった。

難しいが、苦しくはない。

つらこではないのだと、姉は言つてゐるのだろうか。

「晩餐会の準備で来たのよね？ アクセサリーを選びましょうか」

ウイニーは、奇妙な顔をしていたのだつ。

姉が、話を変えるよつてソファから立ち上がつた。

「ほとんどアクセサリー類を持ちこんでいない彼女のために、貸してくれるといつ。

わあつと、ウイニーの心は晴れやかになった。

これまでの微妙な気持ちも忘れて、姉の後ろについていく。

宝石箱の中は、本当にキラキラしていて、目の保養だった。

公爵の娘とは言え、華美さを良しとしないロアアールの人間のため、体面を守る程度のアクセサリーしか持っていない。

この宝石箱の中身すら、母から持たされたもので、姉のものでさえないので。

そんな侯爵家の性質は、領民にも好ましく見られているので、姉が公爵を継いだとしても変わらないだろう。

「姉さんは、スタファ兄さんがエスコートしてくれるのよね」

ネックレスや耳飾りに触れさせてもらひながら、浮かれた口調でウイニーは言った。

それはもう、本当に軽な話しおつもりだった。

なのに、姉の指は止まり ため息が落ちる。

自分がこの部屋に来た時と、まったく変わらない表情とため息だつた。

まさか。

「スタファ兄さんに……何か言われたの？」

ウイニーは、彼の望みを知っている。

姉のため息の原因がスタッフだとするのならば、何か姉を悩ませるようなことを言つたのではないか。

そう、素直に考えたのだ。

「少し……ね」

気恥ずかしげな表情は、姉を年相応に見せる。

こんな子供っぽいウイニーと、たつたひとつしか変わらない年なのだ。

本当であれば、もつと感情的であつてもおかしくない年頃。

それを抑えるクセを、あの母の前でずっとしてきたせいだらつ。

姉の感情は、大きくは動かない。

それでも、このわずかな恥ずかしさを、スタッフは引き出したのだ。

結構、健闘しているように思えた。

「スタッフ兄さん……いい人だよ」

ウイニーは、思つてゐることを正直に言つた。

最初は、意地悪な人かと思った。

でも、それはウイニーを貶めようと書いてこるとこいつよつ、出来の悪い妹をしつけるようなもので。

彼の中に、ちゃんと愛情があるのだと分かつてからは、すっかり懐いてしまつたほどだ。

そんな男なら、姉を幸せに出来るのではないだつか。

「知つてゐるわ」

姉の心が、少し動いている。

ウイニーの知らないところで、スタッフの方へとわずかに揺れているのが伝わつてくる。

「スタッフ兄さんは……」

もつと、彼のことを売り込もうと口を開けた。

姉が。

こいつらを見て。

こいつらと微笑んだ。

16歳といひ年を隠してしまつた顔で。

「だから言つてゐでしょつ？ 難しいけど苦しくない」とだから大

丈夫よつて

やんわりとした、拒絶。

ちやんと考へているから、それ以上の口出しは無用。

もう告げられたのだ。

本当かなあ。

ウイニーは、心配だった。

反対するだらうフラン嫌いの母を考えると、レイシェスが逆らえるとは思えなかつたのだ。

何か。

強く突破する力が必要だらうと思つたが。

ウイニーは、姉に拒否されてまで進言する案を持つてはいなかつた。

いくつかの、書状がレイシェスの元に届く。

晩餐会の事情を聞きつけた、他公爵の身内からの、エスコートのお誘いだ。

別途招待されている、王の親族からのそれも来ていて。

彼女は、丁寧に断りの手紙を書く。

最初に誘われた、スタッフとの約束を守るつもりだつたのだ。

ふう。

フランの次男坊のことを思い出して、レイシェスはため息をつく。

今日は、何度も息をついただらう。

まったくあきらめる様子のない、彼の熱い瞳を思い出してしまうのだ。

フランの人間は、思い切りがいい。

妹を見て、それからフランの兄弟を見ると、それがよく分かる。

彼らは、怖くないのだろうか。

人に拒絶されたり、悪く思われたり、壁にぶつかったり足場がな

かつたり。

そんな、ごく当たり前にある障害にあたるのを、どうして恐れな
いで足を踏み出せるのか。

レイシヨスは、それが不思議でならなかつた。

手に入れようとしなければ、難しい問題は起きないところの上、
手を伸ばすのをやめようとしないスタッフ。

その手の先にいる自分。

血筋としては、申し分ない相手だ。

そう考えかけて、彼女は苦笑した。

いへい考え方が、自分の基本なのだと。

公爵になる自分。

この自分の身は、ロアアールという領地に捧げられるものなのだ。

自分の私欲のために、使つてはならない身。

その感覚が、きっと血の中にも流れているに違いない。

ウイニーが、フラの血が濃く出た娘ならば、レイシヨスはロアア
ールの血が濃くでたのだろう。

そんな公的な身である彼女は、自分の中の私心と向かい合つ羽田

になつたのだ。

その結果が ため息。

そんなため息にかぶさるよう、扉がノックされる。

侍女が応対に出た後、レイシェスの方へ書状を持つてきた。

また、晩餐会のエスコートの件だらうか。

受け取つたそれを見たら、胸に微かな疼きが生まれる。

スタッフからだつた。

書きかけの返事の手を止めて、レイシェスは封を切る。

中身は。

まあ、いわゆるひとつ 恋文だつた。

彼女の美しさと聰明さをたたえる美辞麗句のあいさつに始まり、言葉で語られるのとはまた違う思いが文字にしたためてある。

一見、恋愛のみに偏つた軽薄な手紙に感じるが、スタッフはこうも書いていた。

『貴女と手紙を送りあえる関係になりたい』のだと。

手紙。

それは、レイシエスの心を震わせる言葉だ。

フランの公爵と始めたそれは、彼女に外の世界を見せてくれた。

きっとスタッフは、彼なりでは手紙を書いてくれるのではないかと思つたのである。

正直に言えば、美しい言葉の羅列よりも、そちらの手紙の方に興味があつた。

男と女だから、恋を覚えたり惹かれたりするといつ、古代からの感覚を否定したいのではない。

それよりも、その人の性質や考え方や、根元で一番大事にしているもの。

そういうもので、人を尊敬したいのだ。

尊敬と恋が、ふたつ並ぶほどの相手であれば、保守的なレイシエスであつたとしても、重い腰を上げられるのではないか。

自分の性質をよく理解した上で、彼女はそう思つた。

書きかけの、他の人の返事を押しやり、レイシエスは新しい便せんを目の前に置いた。

愛の言葉は、書かない。

「の手紙に、彼がどう答えるのか。

彼女は、わずかな空想を巡らせながら、気がついたら長い手紙をしたためいた。

返事が、来た。

予想以上の速さで。

彼女はまだ、他の方への断りの返事を全て書き終えていなかつた
といつのに、侍女が再びスタッフから手紙を届けて来たのだ。

「まあ……」

人知れず、驚きの声をあげてしまった。

レイシエスからの手紙を読んで、すぐに返事を書き始めたのでな
ければ、これほど速くはないだろう。

封を切ると、また違う美辞麗句の文句から始まつていた。

それはもはや、彼ら一族の基本であるじじく、どんな手紙であつ
ても変わらないのだろう。

だが、そこから先は、速く力強いペンの流れと共に言葉が綴られ
ている。

スタッフは、これまで公爵の補佐の仕事をしてきたようだ。

資料もなしに書き綴られたであつて、秩序正しい仕事の話は、彼が有能であることを垣間見させてくれた。

とどめが。

『私は、公爵の補佐が得意なのです』、といつ文章。

これには、レイシエスもふつと笑いを洩らしてしまつた。

一見、ただの自信のあらわれのよう見えるが、まるでレイシエスに自分を売り込んでいるようと思えたのだ。

ロアールの公爵の補佐も、きつと得意です、と。

言外にある、彼の小気味よい言葉は、心の中に余裕を思われる。

精一杯支えますよ、ではなく、貴女を支えてなお、私にはまだ余裕がありますよ。

だから、何の心配もありませんと、たつた一言の中に込められている気がした。

それが、彼の細めた田と、ゆづくつした声で聞こえてくるようと思えるのが不思議だ。

レイシエスの中に刻まれた言葉。

つい、くすくすと思いつき出し笑いをしてしまつたのは、これまでに

はない自分の中の感情。

彼の余裕の言葉を聞くと。

何だうつ。

レイシェスにも、少しだけ余裕が生まれてくる気がしたのだ。

「不思議な方ね」

レイシェスは、微笑みを消しきれないまま、新しい便せんを手に取つた。

他の方への返事は　もう少し遅れそうだった。

「……！」

出来上がりでござりますと、侍女たちがウイニーの周囲から下がつていいく。

ようやく、姿見で自分の全身を眺めながら、彼女は驚き そして喜んだ。

最新の、しかし派手さより可愛らしさを主とした、ふっくらとしたデザインのドレス。

暖かい緑と、清楚な白の糸が入り混じるそれは、ウイニーの赤く強い髪を鮮やかに印象付けてくれる。

綺麗にアップされた髪は、侍女たちの頑張りの賜物だ。

さわるとパキパキと音がするくらいに固められているのだが、ふんわりと見えるようになつている。

気合の入った化粧をしたのは、これが初めてかもしれない。

これまでウイニーは、ほとんどロアアールの公式の行事に出たことはなかったのだ。

だから、おしゃれで白くなつた肌や、まぶたの上の色や、増えて長くなつたまつ毛や、艶やかに光る朱の口紅で彩られた自分を、食い入るように見つめてしまつた。

「じゅじゅじゅじゅじゅ。」

白い手袋の手で、鏡に触れる。

姉に、美貌で遠く及ばないのは分かつていた。

だが、こつもの自分よりも、一段階くらい可愛くなつていねと思つ。

それくらいの白惚れは、許されるのではないだらうか。

フランの公爵様は、何と言つだらう。

そう考へると、なむすゞ心臓が物凄い音を立てるのだった。

扉が、開く。

赤毛の兄弟が、ロアアルの姉妹を迎えていてくれたのだ。

気高い美しさの姉の、少し後に控えていても、ウイニーの心は躍り回っている。

「ほう……」

公爵の足が止まる。

驚きの由は ウィニーに注がれていた。

えへ。

それが、嬉しかった。

姉が美しいのは、当たり前のことだ。

もう、彼らはそれを由の当たりにして知っている。

だが。

ウイニーが気合を入れたのを見たのは、彼女自身がそうであるよう、初めてなのだ。

目新しさに過ぎなくとも、ウイニーは素直にそれが嬉しかった。

「化けたな……ひつ」

スタッフの驚きの弦は、公爵の肘鉄で閉ざされた。

「余りの美しさに、ほつととなつてしまつた……今晚は、可愛い私はどこ殿」

「本日は、どうぞよろしくお願い致します」

公爵と姉が挨拶を交わす。

そんな決まりごとの後に、彼はウイニーの前に立ってくれるのだ。

「ほ… 本田は……」

じきじきしききて、つまく舌が動かない。

「赤い花束のように美しいよ、ウイニー。エスコート出来る私は、
幸せ者だ」

手を。

取られると思つたのに。

ウイニーに顔が近付いてきたかと思うと、頬に軽い口づけをして
くれた。

カ、カアアアア。

もつと近しい挨拶のように思えて、彼女は茹であがつてしまつ。

これもきっと、ドレスと化粧の魔法なのだ。

赤い花束。

緑のドレスに赤い髪。

そう呼べなくもないが、そんな言葉が即興でスラスラ出でてくるのは、やっぱり大人だからだろうか。

「フランの澄んだ海より美しいですね……」

「本当に小さな青なのでしょうか、そちらの海は、

隣で、スタッフと姉が挨拶を交わしていく。

彼は、手袋の手に挨拶をしていた。

だが、その手は熱い色を帯びて居る。

ウイニーには、『化けたな』扱いだったところの上。

「驚いたな……ちゃんとレディに見えるわ」

続いてスタッフは、彼女の前にやつてくる。

彼の言葉は、歯に衣着せない分、本当のひとなのだ。

本命以外には、極端なところがあるのが、たまにきずだが。

「スタッフ兄さんも、紳士っぽく見えるわ」

お互に、苦笑いを浮かべながらのこ挨拶となつた。

わあ。

こよこよ、晩餐会トビューや。

ウイニーは、公爵にエスコートをしながら、口から飛び出しあつた自分の心臓を、じくんと飲み下したのだった。

光。

ホールは、目も眩まんばかりの光に溢れていた。

夜とは思えない。

数えきれないほどの蠅燭のともされたシャンデリアが、炎の灯りを上から照らしているだけではない。

纖細な飾り硝子の覆いのかけられた燭台が、美しいインテリアとなつて壁やテーブルで光を放っているのだ。

ちかちかとする目を、ウイニーはまばたきをして取り戻した。

華やかな王都に来たのは分かつてはいたが、その華やかさの全てがここに詰まっているように思える。

更に、宝飾品やドレスの飾りが、光に反射してキラキラしている。

目が落ち着かず、どこから何を見たらいいか分からぬ。

そこまで来て、ようやくホールに美しい楽隊の音楽が流れていることに気づいた。

「大丈夫かな？」

手を取つたまま固まつていたウイニーに、公爵が優しく問い合わせ

てくれる。

「ぐいぐいと頷いて、彼女はよつやく足を踏み出した。

今日の招待は、5公爵と王族。

そんなに多くないと思っていたのだが、その家族までとなると結構な人数になるようだ。

「王太子殿下が出てこらっしゃるまでは、ダンスもないからね……おしゃべりでもしていよつか」

公爵の言つ通り、あちこちでは挨拶だの雑談だのが始まっていた。

その視線の多くは、一度は必ず姉のレイシエスに注がれる。

それは、決して短い時間ではない。

隣のスタッフアは、そんな視線をものともせずに、姉と語り合つていた。

あ、笑つた。

公式の場で、姉がくすくすと微笑んでいる。

楽しそうだなあ。

あつ、誰か来た。

そんな二人に、若い男が近づいている。

スタッフの目が、一瞬怖くなつた気がした。

「大丈夫だよ……スタッフは、ああ見えて抜け目がないからね」とする。

全部、公爵に見られていたようだ。

「姉さんとスタッフ兄さんは、うまくいくのかな？」

そうなつたらいいなと、彼女は思った。

しかし、不安もいっぱいある。

「ま、それはあいつの頑張り次第だらう。おつと……王太子殿下のおでましだ」

一度、音楽が完全にやんだ。

まるで、それが合図だと皆が知つてゐるよつに、ホールはシンと静まり返る。

続いて、ファンファーレが鳴り響き、ホールの奥にある大きな扉が開く。

黒いものが、出てきた。

馬だった。

「え？」

間抜けな声が、ウイニーの口から洩れた。

現れたのは、王太子ではなく ただの黒馬だったのだ。

赤毛の扱い

う、馬？

ウイニーは、茫然とその光景を見ていた。

きらびやかな馬具をつけてはいるが、馬は馬である。

王太子が魔法で馬に変えられた、なんてことがない限り、あれは正真正銘の人ではないものだ。

ホールは、一瞬水を打つたかのように静まった直後、一斉にザワつき始めた。

初めての晩餐会出席のウイニーではあるが、この状況が普通ではないといふことだけは、その様子から分かった。

「何を考えてらっしゃるのか……」

隣にいるフリの公爵さんも、畳然とそんな言葉を口にしている。

どうやら安心して驚いていようだと分かったウイニーは、彼に言葉をかけようとした。

『王太子殿下は、どうなさつたのでしょうか』でもいいし、『馬が出てくれるなんてびっくりしました』でもいい。

胸につつかえた驚きを、言葉として吐き出せればそれでよかつたのだ。

なのに、横を向こうとしたウイニーの髪の毛は、ぐこつと引つ張られて、公爵の方を向くことは出来なかつた。

「つ……」

突然の髪の抵抗に別の驚きを抱えたまま、髪に氣をつけてゆつくり後ろを振り返ると、

男がいた。

黒髪の、冷たい目をした男。

その男の手には、ウイニーの赤毛が握られてゐる。

赤毛の毛先が、彼の指の間から跳ね出しているのだ。

それを見た瞬間の彼女の絶望感は、とても言葉に出来ないものだつた。

毛先があるということは、既に結われた部分から引き抜き出されているということだ。

綺麗に上げるのに、どれほど侍女たちが苦労したと思つてゐるのか。

こまの自分の髪は、ひどくみつともない状況にされてゐる」とだらう。

初めての晩餐会だということ。

「な……何するんですか！」

ウイーーは、男に囁みついた。

「の男の顔は、覚えてる。

一度だけ、花咲く庭で会った失礼な男だ。

田舎者だとされ、ドレスを時代遅れだと馬鹿にされたのである。

ウイーーは、思わず言ひ返して逃げた。

あれは、非公式な場だった。

だが、Jリは公式な場所で。

そんなところで、正装した女性の髪を弓つ張りめたりせりへりせりへりするなんて、どんな仕返しなのか。

小さな男の子のようではないか。

せ、せっかくの、せっかくの晩餐会が。

綺麗なドレスと髪で、公爵にも褒めてもらひたウイーーは幸せだった。

その幸せめ、毛先ひとつで急転直下だ。

「……やつぱり赤毛だな

髪を離さないまま、男はウイニーを見ずにフランの公爵を見ていた。

いや、睨んでいたと言つた方がいいだらう。

そうだ。

ここには、公爵がいた。

こんなひどい仕打ちをする男から、きっと自分を助けてくれるに違ひない。

頭をうまく動かせないまま、ウイニーは後方の助けを待つた。

だが。

そこから聞こえて来たのは。

「王太子殿下……」

という、苦しげな呼びかけだった。

おうたいし、でんか？

ウイニーは、瞬間に言葉の意味が理解出来なかつた。

大きすぎて、持て余すほどのそれ。

本当ならば、馬が出てくるところから現れるべきだつた次代の王。

「タータイト公は、嘘をついたな

「あ」

髪が引っ張られ、その痛みでウイーーの身体も引っ張られる。

王太子の方へ。

「嘘などついておりません」

彼女は、王太子に背を抱かれるような形になり、結果的に田の前にフランの公爵を見ることとなつた。

彼は、とても不機嫌な表情でこちらを見ている。

おさらり、怒りを抑えているのだろう。

「赤毛の娘など、いないと言つただろう?」

後ろから、冷たい声が降り注ぐ。

ぞわぞわする。

「フランから連れて来ておりませんと、お答えしたはずです

周囲の人たちが、馬から王太子へと意識を移し始めていた。

ようやく、そこへいることに気づいたようだ。

それは伝染するように、次第に外側へと向かって行く。

「では、この赤毛はどうの誰だ？」

責められた形で、髪が引っ張られる。

「私の妹ですわ」

進み出て来たのは　レイシエスだった。

責められた顔で、姉はウイニーの前に来てくれた。

本来であれば、母よりも身分的には怖い相手である。

なのに、来てくれた。

ウイニーは、それが嬉しかった。

髪を引っ張られた痛みとは別に、泣きたくなるほど。

「ああ……なるほど、確かにまったく似ていなーいな

「王太子殿下……女性の髪は、引っ張るためにあるものではありますせん。お離しいただけますか？」

フランの公爵が、一步足を踏み出す。

「妹の髪を直して、一度下がらせていただきたく思います

姉もまた、一步踏み出してくれた。

一人とも、ウイニーを助けようとしている。

嬉しくて嬉しくて、二人に抱きつきたくなつた。

足を踏み出そうとしたが またも、頭がついてこなく引き戻されることとなる。

「分かった……だが、私が乱した後始末だ。私が責任を持つて直させよつ」

王太子は、冷たい言葉のままウイニーを引っ張つた。

ようやく髪から外された手は、彼女の腰に回つているではないか。

な、何で！？

公爵と姉からひきはがされる。

そして。

ウイニーは、ぽいつとホールから放り出された。

控えていた侍女に向かつて。

「髪を直してやれ」

と言い置くや、王太子はホールへと戻つて行つたのだ。

その理不尽な背中を、ウイニーは茫然と見ていた。

い……。

震える心と頭で、彼女はよつやかに言葉を思い浮かべることが出来た。

目の前で、ホールの扉は開かれた。

一体、何だつていうのよー！－

ウイニーだけ 追い出されてしまった。

問題だらけの王太子

ホールから出たのは、ウイニーだけだった。

王太子が戻ってきた姿を見て、レイシェスは心底ほっとしたのだ。あのまま妹が連れ去られて、この男に無体なことをされるのではないかと恐れていたのだが、少なくともそれはないと分かった。

妹の遭遇について、問いかけようとレイシェスが動き始めた時。ホールにいた男たちの方が、先に王太子の元へと詰めかけ、挨拶を始めるではないか。

すっかり囲まれた王太子を見て、これではとても近づけないと諦める。

だが。

「王太子なら、あそこにはいるだらう?」

王太子本人は、残酷なまでの笑みを浮かべて、顎で馬など指している。

この男の仕組んだだらう、ひどい茶番。

ファンファーレを鳴らして入ってきた馬を自分だと言い、馬に挨拶に行けという戯れを口にするのだ。

鼻白む周囲の人間たちを試すよつて、更に畳みかけている。

フランの公爵は、すっと動いた。

王太子本人の方ではなく　馬の方に。

「立派な馬ですか。王太子殿下の愛馬ですか？」

王太子の戯れに、フランの公爵は乗ることもなく、笑みをえたたえた上で受け流している。

馬は馬だ。

それ以外の何物でもないのだと。

一瞬、馬の方に別の意味で動きかけた他の人間は、そんな彼の堂々とした態度に安堵したように、「いやあ、本当に立派な馬ですね」と迎合し始める。

「フン……」

面白くなさそうに、王太子は鼻を鳴らした。

彼は、瞳と顎の動きで静かなる指示を出す。

さつきまで、皆の注目を集めていた馬はホールからさげられ、楽隊が音楽を奏で始める。

「皆の者……好きなよつて楽しめ」

そんな一言を冷たく言い放つと、彼はレイシスの方へとやってくるではないか。

再び、一人で彼に立ち向かわなければならないのか。

そう思つた時。

すつと、隣に進み出た男がいた。

「ウイニーの様子を見に行きましょう」

王太子に声をかけられるより速く、そう語りかけられる。

スタファだ。

レイシスは、ほつとした。

このまま、急いで彼の助け舟に乗れば そう思つたのだ。

だが、そこまでの時はなかつた。

彼女の腕は、すでに王太子に掴まれていたのである。

「一曲、相手をしろ」

そしてレイシスは、栄えある王太子の一曲目の舞踏相手になってしまったのだった。

「うなつてしまつては、スタファが助けるのは不可能になる。

相手は、次代の王。

公爵でさえ、ここには引かねばならない相手。

「ウイーーをお願いします」

レイシェスは、振り返つてそう伝えるので精一杯だった。
逆を言えば。

一番、このホールの中で動きやすいのはスタッフだらう。
公爵の家族という肩書きの彼は、ここにいる義務はない。
退席したとしても、誰にも咎められはしないのだ。

不機嫌そうに、しかし軽く頷く仕草をすると、スタッフは出入り口の扉に向かつて歩き出した。

それにほつとした直後。

ぐるんと身体は回され、目の前に現れた王太子に、レイシェスは冷ややかな眼差しで見つめられる」ととなるのだ。

「確かに、まったく似ていらないな」

厳しい声。

「嘘など申しません」

その責めを盾で押し返すよつて、彼女は踊りのポジションを取つた。

向こうが踊るといつのを拒めないのだから、やつと終わりせて離れようと思つたのである。

誰もが注目する中、この晩餐会の主催者である王太子が、一曲目の相手に自分を選んだ。

その事実は重いものの、逆にレイシェスは周囲の人間が、こう考えるだらうと想像したのだ。

王太子の戯れ。

彼女が誰なのかなび、一瞬の間に伝わつて行く話。

次期、女公爵。

そんな肩書の人間を、いくら王太子とは言え後宮に入れることが出来ない。

ただ、美しいから選んだだけだらう、と。

後宮の寵を競う相手とならない女など、空氣と同じなのだ。

「さつきの赤毛は、タータイト公の弟だな……隨分と親密ではないか」

腰に回された手に、力がこめられる。

もつと密着するように引き寄せられたが、レイシエスは一曲の辛抱と、抵抗しなかつた。

下手に逆撫でて、長いこと拘束されるのは御免だ。

「親戚ですか？」

ウイニーの髪を見れば、フカの血がロアアールに混じっているのは明らかではないか。

レイシエスは、親戚という隠れ蓑を使つた。

「親戚と言えど、ロアもそうだらう」

「そうですね」

へぬじと回つて位置を変えながら、言葉を軽く流す。

誰とつきあおうが、この男には関係のないことだ。

人目のある環境と云ふのは、レイシエスにとっては非常に助かる。ただ、礼節を守つて下さいれば、周囲の目が自分を守ってくれるのだから。

「私が……何もしないと思つていてるだらう？」

耳元で見透かすように言われ、ぎくじとする心を抑える。

「何の」とじゅうつ？

素知らぬふりに、王太子は性質の悪い微笑みをたたえながら
レイシエスの身を突き放した。

踊っている真っ最中に放り出され、彼女はよろけてしまった。

慌てて彼を見上げると。

「そうだな……お前には、何もしないでいてやるから」

一曲目のダンスの途中で相手を放棄するや、王太子はついていないレイシエスや周囲も全部置き去りにした。

そして、今度こそホールを出て行ってしまったのだ。

『お前には、何もしないでいてやるから』

不吉な言葉が、立ちつくすレイシエスの中でじだます。

では。

誰に。

何をすると。

言つのか。

馬、ではなく

くしゃくしゃの赤い髪。

それを右手でおさえ、もう片方の手でドレスを掴み上げながら、
ウイニーは通ったことのない廊下へと侍女に案内されていた。

茫然の後のみじめさが、いまの彼女を包んでいる。

何で、こんな目にあわなければならぬのか。

次期公爵であるレイシオスの妹として、目立たない程度に初めて
の晩餐会を楽しむ予定だった。

あまりダンスは上手ではないが、公爵とも踊つてもらひつゝもりだ
った。

そんな予定は、あの王太子の出現でボロボロにされてしまったの
である。

文字通り、髪はボロボロにされた。

ホールから放り出され、みつともない姿で歩くウイニーは、王宮
で働く人間たちの目にさらされる。

表情を変えずに会釈して道を開ける警備兵や侍女たちに、どんな
想像をされているのか分からぬが、みじめさに拍車をかけてくれ
るのだけは間違ひなかつた。

く、くやしい。

相手は、王太子だ。

どれほど理不尽な真似をされたとしても、ウイニーでは決して立ち向かえない相手。

ロアアールにいる間は、彼女より上の人間は身内だけだった。

母は論外だが、父や姉にこんな理不尽はされたことがない。

ロアアールから離れてみれば、他人から非道な振る舞いをされるのだと、身を持つて味わってしまった。

何の抵抗も出来ない相手。

その悔しさを、じうじて一人ぼっちで味わわされながらも、自分がロアアールという殻に少なからず守られていたのだと痛感する瞬間でもあった。

「ウイニー」

足取りも重く歩いていた彼女の背後から、駆けてくる音と声。

慌てて振り返ると、スタッフが追いついてきた。

赤毛の髪が、少し乱れている。

強硬なヘアセットにも関わらず、反乱を起こしかけているのだろう。

う。

「スタッフ兄さん……姉さんは？」

心細かつたウイニーは、追つてきてもうえて本当に嬉しく思はしたが、同時にレイシェスを放ってきたのかと心配になつた。

「ああ、余り大丈夫じゃないが……彼女にお前のことを頼まれた

険しい表情を眉間に浮かべながら、彼は低く呟く。

大丈夫じゃない。

それは、あの王太子が姉にちょっかいをかけているということだろうか。

ウイニーの表情も曇つてしまつ。

「わ、私は髪を直してもらうだけだから……姉さんについてあげてあんな理不尽の塊の男が優しく振舞うなんて、彼女にはとても思えなかつた。

いま危ないのは、姉の方ではないのか。

ウイニーは、そう思つたのである。

「心配するな。あの場には兄上もいるし、人目がありすぎて無体な真似も出来ないだろう」

そんなスタッフの意見に、彼女はとても賛同出来なかつた。

「の頭こそ、無体の証拠そのものだったからだ。

だが、それ以上スタッフを追い返す言葉は、ウイナーにはなかつた。

「ひどい田にあつたな」

ぽんと背中を押して、彼が一緒に歩き始めてくれたからだ。

みじめな気分が、少しはましになつた。

スタッフは、こんな理不尽な頭の事情を知つてゐるし、同情もしてくれる。

「の恥ずかしい見た田の、半分の重みを一緒に抱えて歩いてくれるのだ。」

「兄上が来られなくて、済まなかつたな」

そして。

一番、嬉しそう葉を伝えてくれた。

本来、のるべきなのはの公爵だと言われたも同然だつた。

スタッフは、姉についていたい心を抑えてここに来ててくれたように、公爵もまた、自分についていたい心を抑えて、姉についてくれてこるのである。

肩書きや立場で、出来ることが違つ。

そんな中で、いつして出来る限りの助けの手を差し伸べられるのは、心地よかつた。

そんな中、みづやく髪を直せる部屋に到着したのか、侍女は扉を開ける。

「外で待つていろ」

スタッフとは、やうして扉で仕切られた。

ウイニーは、鏡の前に座らされる。

王太子の侍女たちなのだろうか、彼女らは静かに、そして出来るだけ手早く動くことを心がけているように見えた。

お湯が運ばれ、温められた布でパキパキに固められていた髪が解かれてゆく。

ウイニーには、多くの不安があった。

この、非常に性質の悪い髪を、よその侍女がつまみ出来るだらうか、と。

そんな彼女の不安は的中し、無言ながら侍女たちは苦戦しているようだった。

公爵の娘だと知つてゐるのかは分からぬが、とにかく丁寧に丁

寧に仕事をしようとする余り、ほとんど力を入れて髪を引っ張らなければならぬ。そのため、全然言ひ事を聞かないのだ。

周囲の侍女たちの間に、微妙な空気が通り過ぎた後。

救世主が登場した。

貴祿のある50歳くらいの赤毛の女性が、颯爽と登場したのである。

南長様。

そう呼ばれているので、侍女頭の一人ではないだろうか。

少しふつくらじた南長は、侍女たちを挫折させたウイニーの髪を見るや、笑いそうになり慌てて顔を元に戻す。

咳払いをしてしまかしたようだが、ウイニーはしつかりとそれを目撃した。

おそらく、何が起きたか分かった上で、おかしくてしようがなかつたのだろう。

だが、さすがは赤毛の持ち主。

櫛と整髪剤を持つや、ウイニーの髪を多少痛いほどに引っ張つて結い上げていく。

「この髪に生まれた時点で、引っ張られるのには慣れているとはいえない、なかなか豪快なやり方である。

しかし、ピンを多用し、逃げたがる髪を手早くおさめていくのは、見事としか言いようがない。

髪飾りをつけ、新しい髪型として出来上がった時、周囲の侍女たちは心底ほっと安堵のため息をついていた。

そんな、穏やかな空気を。

壊すような騒ぎが、扉の外から聞こえてくる。

「いまはまだ、仕度中です」

スタッフの声。

切羽詰まつた彼の声に、ウイニーが何事かと振り返った時には。

扉は、開け放たれていた。

犯人は。

馬 ではなく、王太子だった。

身分に關係なく、相手を殴り飛ばさるとするならば、スタッフは最初に間違いなく王太子に鉄拳を浴びせただろう。

残念ながら、それは許されないため、ぎりぎりと奥歯を噛みしめるしか出来ないのだが。

前回の謁見会まで、王太子はスタッフにとつて、空氣と大差なかつた。

兄が敬遠している理由も、よく分かっていなかつた。

だが今回、その理由は嫌といつほどよく理解出来た。

「この男に手をつけられると、口クな事にならない。

周囲の田など気にすることなく、王太子自らの速度で動き、そして傍若無人の限りをつくすのだ。

いまここに、この男が来たといつことは、レイシエスを放り投げて来たのだろう。

最初にウイニーを、ホールから放り出したよつこ。

まるで、猫のような興味の移り変わりは、ハタ迷惑以外の何物でもない。

本氣で殴り倒すわけにもいかず、スタッフは怒りを抑え込みながら

ら、赤毛の可愛い娘を守ろうとした。

「どけ」

「いまはまだ、仕度中です」

スタッフは、わざと大きめの声を出した。

中のウイニーに、異変を伝えること。

他の人間に、王太子の方が問題のある行動を起こそうとしていること。

それらを、明白に伝えるためだ。

後で、このことが何か問題になつた時、スタッフが常識的な行動を取つたという証拠を残しておかなければならなかつた。

「それが……どうかしたか？」

だが。

そんな彼の努力など、平氣で踏みつける男がいた。

立ちはだかるスタッフを簡単に脇に押しやり、王太子は扉を開け放つ。

慌てたスタッフも、室内を見た。

髪を直しているだけなのだから、ひどい有様ではあるまいと思い

ながらも心配だったのだ。

幸い。

ウイニーは、無事に髪の直しも終えていた。

周囲に多くの侍女もいるが、王太子の登場を見るなり、すうっと頭を垂れて下がつて行く。

唯一。

赤毛の年配の侍女が、櫛を手に持つたまま表情を曇らせてこちらを見ていた。

「恐れながら、王太子殿下……まだ、全ての仕度が整つておりません」

その女性は、長く王宮に努めているのだろう。

静かに、しかしきつぱりと王太子に物を申している。

「南長、お前の持ち場はここではないはずだ……余計な口を挟まずに下がつていろ」

「王太子殿下……赤毛を知らぬ者に、赤毛を美しく結い上げることは出来ませぬ」

櫛を捧げ持ち、彼女は心底辛いことのようご語るではないか。

スタッフは、怒っていたのも忘れて笑いそうになってしまった。

南長と呼ばれた女性は、何と役者であるかと。

そして。

王太子の方もまた、他の人間にに対する態度と彼女に対する態度は、一線を画しているように思えた。

「もう出来上がっているだの！」

「まだ、でござります！」

「南長。それ以上、私の邪魔をすると……」

「こつも、申し上げておるでござります。せんか。『お好きな時に、首は差し上げます』と」

王太子と女性の間で、物凄い火花が散つた気がした。

冷たい王太子の目と、熱い南長の目。

もしここに、剣の一本でもあれば、刃傷沙汰が起きていたに違いないと思えるような緊張の一瞬。

「フン……」

王太子は、鼻を鳴らしたかと思つた。

「わやああー！」

ウイーーの。

髪を。

引っ張つた。

せつかく、綺麗に結い直されていた赤毛は、再び悲劇の有様となつたのだつた。

結局。

ウイーーの髪が綺麗に整えられるまで、更に多くの時間が必要だつた。

扉が開き、彼女は南長と共に部屋から出てくる。

「最初より、綺麗な髪になつた」

スタッフは、ウイーーの復活を励まし喜んだ。

多少元気がないながらに、彼女も笑みを浮かべる。

王太子がいないことに、何よりほつとしたよつに見えた。

南長に水を差され、彼はさつと出て行ってしまった。ホールにでも戻つてゐるのだつ。

「お見事ですね……南長殿」

スタッフは、ウイニーを救った女性に語りかけてみた。

彼女が何者かは、分からぬ。

その容貌と呼ばれ方からすれば、間違いなくフランの出身なのだろうし、こんなところで「長」という肩書で働いているのだから、いい身分のはずだし、親戚の可能性も高い。

「その肩書で、呼ばれない方がよろしいかと……」

ふふふと、女性は意味深に微笑む。

スタッフが、何のことか分からずにいると。

「南長は、後宮の肩書ですよ。もし、フランから『側室』が上がられることがあれば、私がお世話をすることになるのです」

ああ。

スタッフは、苦笑した。

そういう意味か、と。

何故、肩書に『南^{フラン}』があるのかと分からなかつた。

当然だ。

後宮の事など、本来表に出されることはないため、他の男が知るはずなどないのだから。

「の分だと、東長だの北長だの西長もあるに違いない。

各公爵家から側室をもうつかどうかも分からぬにしつのに、常に準備しているところが憎たらしく。

「いつでも、側室をもひうつしが出来るところへ、自信の表れに思えたからだ。

ふと、スタフアは疑問にぶつかる。

「どうで……北西長はおいでか？」

ロアアール
北西は、これまで一度も王家に側室を出していませんはず。

突然、領地の名前を出されて、ウイニーが驚いたようにスタフアを見上げる。

「肩書きはありますが……どなたもつこひうつしゃこません」

南長は、意味深な笑みを浮かべた。

「の傍若無人な王家でさえ、長い間諦め続けたロアアールの娘。

見た田に赤毛ではあるが、スタフアはウイニーの事が心配でならなかつた。

ドラ猫ヒエサを『えないで下さい

カルダは、放り出されたレイシエスの手を取りに向かった。

まったく、あのドラ息子は。

心の中で王太子を毒づくのは、これが初めてではない。

彼が、傍若無人に振舞えば振舞うほど、声にならない恨みつらみを積み重ねて行くことになるというのに、そんなことはこれっぽっちも気にかけていないのだ。

反乱を、起こされたいのか。

初ダンスの最中で置き去りにされたカルダのはとこは、茫然とホールの中に立ちつくしている。

周囲から寄せられる冷たい視線は、同情半分、嘲笑半分。

王太子の機嫌を損ねた、憐れな女性に向けられる視線など、そんなものなのだ。

レイシエスの手を取り、カルダはダンスの流れの中に彼女を引き戻した。

「公爵様……」

ほつとしたような、しかしまだ顔色の悪い顔で、彼を見上げてくる。

「興味を失われたようで、何よりだ」

放り出されたことはよいことなのだと、レイシエスに伝えようとした。

この一瞬は、恥のように思えるかもしれないが、王太子という厄病神に離れられたことは、今後の彼女のためになるだらう。

腕に添えられた少女の手に、微かに力がこもる。

「でも……ウイニーが……」

視線は、ホールの出入り口の方を向く。

さきほど、王太子が出て行つた先だ。

ああ。

なるほど、とカルダは眉間に寄せた。

ウイニーとレイシエスにちよつかいをかけていた王太子は、結局ウイニーの方に走つたのか。

なまじ、とびきりの美しさをウイニーに求めていない分、厄介な事だった。

「スタッフがついている……手に負えない事態になれば、私を呼びに来るはずだ」

これまでの王太子の動きは、カルダが見る限り、試食の繰り返しだった。

レイシェスをつまみ食い、ウイニーをつまみ食い、そしてまたレイシェスを それが、ある一定以上進んで、ようやくどちらを本当に食べるか決めたような。

女という生き物を、これまで好きにつまみ食つて来たのだろう。

カルダから見れば、食事の作法がなつていなし、まさにドーラ猫だった。

誰も叱れない、王の庇護下の横暴な猫。

その仕打ちに誰かが怒り狂つて、いつそ反逆くらい起きればいい、と思つてゐるに違ひない。

そんな事態に発展する前に、カルダはウイニーをフラーと呼び寄せなければならなかつた。

「都にいる間に、ロアアールの公爵へ書状をお送りしよう

その時間を、少しでも短くするために、彼は動き出すことにしたのだ。

レイシェスが、ほつとしたように表情を緩める。

こうして見ると、彼女も年相応だ。

ウイニーとたつた一つしか変わらない16歳であることを、時折

忘れそうになる。

彼女もまた、カルダの愛すべきはとーの一人で。

幸せになつて欲しいと、願つてしまつ。

その幸せのかたちは、ウイーーとは大きく違つてになるだらうが。

「妹を、よろしくお願ひします」

けなげな彼女のお願いに。

「スタッフをよろしく頼むよ」

そう返すと。

「まあ……」

レイシエスは、とても困つた笑みを浮かべるのだ。

困らせる程度には、彼の弟も頑張つてゐるようだつた。

王太子は、一人で戻つて來た。

ウイーーにふられたのか、随分機嫌の悪い様子で。

彼の性質を知っている人間は、近づくのを避けるところだが、娘を連れて近づく馬鹿がいる。

アール（西）の公爵だ。

家族同伴を許されたという事実を、王太子の新たな側室探しだと勘違いしたのか。

ウイニーの髪を引っ張り、レイシェスとダンスを踊つて放り出しそんな態度を見れば、勘違いしてもおかしくないだろう。

ロアアールの娘一人が無碍にされたのを見て、自分の娘ならばつまくやるとでも思ったのか。

食事の作法の悪いドラ猫の前に、エサを置くな。

前に、水をぶっかけられたことも忘れて、のこのこ王太子に近づくアールの公爵に、カルダはため息を洩らした。

不機嫌な男に、その娘は踊りに連れ出される。

カルダは、ダンスの輪からレイシェスの手を引き、脇に下がった。

面倒に巻き込まれるのは、御免だつたからだ。

だが、それは杞憂だつた。

気がつくと、王太子とアールの娘は、ホールから消えていたからだ。

正直。

カルダは心底、ほつとした。

わずかの時間でも、王太子の興味がそれるなら、願つたりかなつたりだ。

少なくとも、相手の女性もそれを望んでいるのならば、彼が口を出すことでもないし、同情する気もない。

「かわいそうに……」

ただ、レイシェスは小さくそつ笑いた。

彼女の行く末が、幸せなものにはならないだろう そう思ったに違いない。

ダンスのお相手

ようやくウイニーがスタッフと共にホールに戻ると、王太子の姿はなかつた。

ここに、戻つた訳ではないのだろうか。

だが、そんな嫌な相手よりも。

「大丈夫、ウイニー？」

心配そうに語りかけてくる姉と。

「もつと美しくなつたようだね」

優しく手を取つてくれるフラの公爵の一人に、本当にほつとしたのだ。

赤毛の兄弟が一瞬視線を交わし合い、お互にをねぎりつ素振りを見せたのを、ウイニーは見逃さなかつた。

女性を守りきつた、誇らしく男らしいねぎらい方に思えて、嬉しくなつてしまつ。

「遅くなつて申し訳ありません……一曲、お相手いただけますか？」

そんな男同士の無言の会話が終わるや、スタッフは早速レイシッシュにアタックを始めた。

「喜んで」

勿論、断るような姉ではないし、そんな赤毛の男に優しい微笑みさえ浮かべている。

「ウイニーでさえ、見とれてしまう一瞬だ。

じつやつたら、あんな上品で美しい笑みを浮かべられるのだろうか。

自分の顔で実践しようとして、顔の筋肉がつりそうになつて断念した過去を持つウイニーだった。

お似合いの一人が、自然にダンスの輪の中に入つて行くのを、彼女はついついとりと見つめてしまつていた。

「さて、私の可愛いはとこ殿」

自分が、フランの公爵に手を取られていることさえ忘れていたので、声をかけられてはつとする。

「今まで帰りを待つていた、憐れな私と一曲踊つていただけますか？」

レディにダンスを『いつのような言葉に、ウイニーは赤くなつてしまふ。

もしかしたら、髪より顔の方が赤いのではないかと思つほど、彼女の顔の温度は上がつた。

「姉さんと踊らなかつたんですか？」

つい、照れ隠しで姉を引っ張り出してしまつ。

「人が、ただずつと待つてたといつのは、何となく想像出来なかつたのだ。

「勿論踊らせてもらつた……けれど、私はウイニーを待つていたのだよ」

見事な 殺し文句だった。

女性なら誰でもいいわけではなくて、今日のパートナーである彼女を、最大限に引きたててくれる言葉である。

嬉しいやら、舞い上がるやらで、ウイニーの頭の中は大変なことになつていた。

もつとちゃんとダンスの稽古をしておけばよかつたと、心底後悔しながらも、彼女は公爵の手を軽く握つてホールへと進み出る。

端っこでいいと思つていたのに、彼はどんどんウイニーを中央へと引っ張つて行く。

既に踊り始めている、レイシェスとスタファの横を通り過ぎて、踊るスペースを確保する。

「さあ……可愛いはとこ殿……いや、ウイニー嬢。あなたのデビューのダンスだよ。既に、その美しい姿を見せつけてあげよう」

囁かれた行為と言葉が、余りに不慣れなものだつたため、拳動不審になりそつた彼女は、穏やかな温度と大きなかのひらに腰を支えられ、一度ぴたりと動きを止めた。

公爵を見て。

一步田を。

踏み出す。

「……」

出す足を間違えて、思い切り公爵の足を踏んでしまつたが。

しかし、さすがはフリの男である。

顔色一つ変えずに、彼はウイニーに微笑み もう一度仕切り直してくれたのだった。

ケチのついた晩餐会の始まりとは裏腹に、ウイニーはとても楽しい時間を過ごしていた。

そのまま、時が止まってしまえばいいのに、と思つてしまつ。

だが、幸せな時間は、いつか終わつてしまつ。

そして、それはあつといふ間に来てしまつものなのだ。

「タータイト公、そちらの『ご令嬢を』紹介いただけませんでしょうか？」

ダンスの合間に、そう言って若い男が近づいて來たのだ。

ウイニーは、母方の実家であるロア以外の人は、ほとんど知らなかつた。

「ウイニー・ロアアール・ラットオージェン嬢ですよ。ウイニーこちらは、フォルトラ・アール・クレイアルス氏だ」

フラの公爵の丁寧な紹介に、ウイニーは型どおりの挨拶で応える。

だが、^{アール}西の関係者と言われて、複雑な気持ちだった。

まだ若いので、長男ではないようだ。

「ロアアール？ あ、ああ……失礼。タータイト公のお身内かと思つていました」

「血は、しつかりとつながっていますよ。はとじですからね」

そつとウイニーを引き寄せ、公爵は微笑んだ。

常に彼に守られている気がして、彼女は幸せな気持ちになる。

「そうでしたね……ウイニー嬢をダンスに誘つてもよろしいでしょ
うか？」

その幸せな気持ちは、次の瞬間には驚きへと変貌を遂げていた。まさか、ダンスに誘われるとは思つてもみなかつたのだ。

フランの公爵のおかげで、多少はダンスらしい形になつたが、それは彼がリードしてくれたからであつて、他の人と上手に踊れる自信はまったくなかつた。

「さきどき、びくびくしながら公爵を見上げると、彼は優しく微笑んで」

「一曲、踊つたら戻つておいで」

「いは、社交の場だよ。

そう諭された気がした。

みなが、自分の家を背負つてここにいるように、ウイニーもまたロアールの一部を背負つてここにいるのだ。

「う。

フランの公爵に促されてまで、強硬に断ることも出来ない。

足を踏まないようにな、踏まないようにな。

呪文のように、さつきの失態を唇の中で呟きながら、彼女はアルの子息とホールへと進み出るのだった。

さあ、肝心の一歩。

ウイニーが、じきじきしながらダンスの体勢を整えようとしたその時。

身体が 後ろに動いた。

いや。

後ろに、引っ張られていたのだ。

一瞬にして遠くなるアールの子息を茫然と見ていたウイニーは、ぐるぐると反回転させられて、視界を真反対に変えられた。

いたのは。

うわあ。

ウイニーは、いやな悲鳴をあげそつとなつた。

そこにいたのは。

王太子だったのだから。

戻つて、来てる。

ウイニーは、みぞおちの辺りががぎゅーっとなる感じを味わわされた。

アールの子息とのダンスのはずが、いつの間にか王太子と向かい合つていたのだから、驚きとストレスで腫もおかしくなるはずだ。

冷やかな目で見おろされ、ウイニーは反射的に自分の頭をかばつた。

王太子がまた、彼女の髪をめくらめくらにするのではないかと思つたのである。

何しろ、これまでの短い時間に、一回もべつかべつかされたのだから。

彼は、もしかしたらウイニーがこのホールにいるのを、よく思つていないのである。

要するに、邪魔だから追い出したいのではないかと、彼女は考えた。

でなければ、これまでに絡んでくるはずがないのだ。

よほど庭で言つ返されたのが、腹が立つたのだろう。

「」のよつな思考をしたわけだから、ウイニーが自分の髪をかばつたのは当然である。

だが。

手を持ち上げた彼女の、完全に無防備になつた脇に、王太子は手を回すではないか。

あれ？

予想外の行動に、ほけつとなつてしまつたウイニーは、気づけば自分が王太子とダンスを踊るよつな態勢になつてゐるのに気づく。引き寄せられた身体のせいで、彼の匂いが鼻孔をくすぐる。

お酒と香水が、入り混じつたよつな匂いだ。

華やかな甘つたるい、女性のつけるよつな香り。

彼のイメージとは全然違うそれに、本当に王太子であるか、ウイニーが思わず顔を上げた時。

まったく息も合わないま、彼はさつやと踊り始めてしまつ。

ついていけない足を、慌てて踏み出して。

ウイニーは、王太子の足を、ぎゅうつと見事に踏みづけてしまつた。

「……」

ギロリと睨まれて、慌てて足を引っ込める。

また、やつてしまつた。

フランの公爵であれば、さらつと流してくれるだらうが、相手は王太子だ。

足を踏んだ罪で、牢に放り込まれるか、罰でも与えられるのではないかと、ウイニーは背筋が冷たくなつた。

だつて、この人が勝手に。

言い訳だけなら、彼女の中には山ほどある。

心の中では、「この人」呼ばわりだ。

ずっと領地で暮らしていた彼女には、王家とか王太子と言われても、偉い人であるとは分かつてゐるが、その程度だ。

ロアアールという土地柄もあつてか、王家へ忠誠の限りを尽くせといつやうな教育もない。

そんな赤毛の娘に対して、王太子は。

「田舎者め

一言、冷たく言い放つと。

「……！」

その痛みに、ウイニーは飛び上がりそうになつた。

足を。

踏み返されたのだ。

な、な、な、何て人！

大きな目を見開いて、ウイニーは痛みや驚きに混乱した。

公衆の面前で、女の髪をぐしゃぐしゃにする男である。

足を踏み返すなど、造作もないだらう。

見た目は、これほど冷たい気配が溢れ出しているところに、ウイニーにやることとは、余りに子どもじみてはいない。

だから、彼女の頭に血が昇る隙間を与えてしまうのだ。

痛みと怒りと恥ずかしさで真っ赤になつたウイニーは、そのまま自分が放り出されるだらうと思つたし、そうされたいと願つた。

しかし、それは許されなかつた。

王太子は、彼女から手を放さなかつたし、冷たく不機嫌な顔のまま、踊り出してしまつたのだから。

田舎者と罵られながらも、一曲はどつしても相手をしなければならないようだ。

何なのよ、この人。

ウイニーは、何とか足を踏まえずに踊りながらも、自分の理解の遙か外にいるこの男についていけずに困惑っていた。

王族といつのは、みんなこんな風にぶつ飛んでいるのだろうか。

だとしたら、姉が不憫でならない。

姉がロアアールの領主になる多くの時間、こんな男や他の王族と、仕事の上とは言え、付き合わなければならないのだ。

それや、心労も重なることだろう。

早く、公爵のところに戻りたい

ウイニーは、回りながら自分の味方を探した。

姉とスタファは、近くを踊ってくれている。

気にかけてくれているのは、その視線からよく分かった。

一方、公爵は。

他の女性に捕まっているようすで、踊りこなしていないうものの、談笑しているようだ。

う。

ウイニーがピンチだというのに、悲しい現実である。

たつた5人しかいない公爵の中の一人なのだから、放つておかれ
るはずはないのは分かるが、少しは気にかけて欲しいと願つてしま
う。

とにかく、一曲終われば。

彼女は、ただそれだけを望んで、義務と割り切つて踊り続けた。

そろそろ終わりだらうかと、曲を田で追いかけていくと、面白く
ない目に睨みつけられていのに気づく。

怖いので、その田を見ないフリをして、再び周囲を見回す。

あれ。

いつの間にか、ウイニーたちは踊りの輪の端の方に来ていた。

もう、フランの公爵も見えないし、姉たちも少し遠い位置。

その代わり。

最初に馬の出て来た、奥の出入り口にとても近い。

それに気づいた直後。

強い遠心力で、ぶんと一度振り回されてよろけた。

慌てて倒れないよう、王太子にしがみついてしまったウイニー

は、自分の身体が勝手に歩いているのに気がつく。

いや、強引なこの男の力に、引っ張られているのだ。

向かう先にあるのは、扉。

え？ あ？

自分でも意味不明の、疑問符を飛ばしながら、彼女は声ひとつ出せないまま、王太子にホールを連れ出されてしまったのだった。

自由の捕まえ方

「命令だ、私の許可があるまで開けるな

ウイニーの後方で、馬が現れた扉は閉ざされた。

そこは本来、王太子が登場するはずだつた特別な扉なのだから。

他の人間は、公爵であろうともウイニーの使つた出入り口と、同じ扉を使つていたのだから。

そんな特別な扉が、閉ざされたということは。

彼女は、自分の意思でホールに帰れない、ということになるのか。驚きながらも、ウイニーは引っ張られるその力に抵抗した。

このまま、王太子の希望通りになるということは、自分にとつて危険な気がしたのだ。

「離してください！」

か弱い姫に比べたら、少しばかり力がある方だと思っていた。

だが、自分の手を掴む、王太子ひとつ振り払えない。それどころか、なおさら手に力を込められて、痛いほどだった。

その現象は、ウイニーを更に怖がらせた。

どうしたらいいか分からず、冷たい焦燥感が彼女の足元から這い上[が]つてくる。

だが、そこで口がきけなくなるような、氣を失うような弱さは、彼女にはなかつた。

「嫌です、帰ります！　帰して！　離して！…」

パニックを起こしながら引きずる王太子と、抵抗の限りを続ける赤毛のウイニーを、廊下に控える者たちは必死に見ないフリをしていふよ[う]だつた。

誰一人と、王太子を止めるものなどいない。

そう考[え]ると、あの南長といつ女性は、よほど特別だつたに違いない。

他の誰にも、出来ないことを言つてのけたのだから。

「はーなーしーでー！」

ウイニーは、ついに自分の足を折り曲げた。

廊下に座り込み、何が何でもついていかない気持ちをアピールしたのだ。

公爵にもらつた綺麗なドレス。

それを傷つけたくないし、汚したくない。

そんな気持ちで、いまは頭から消し飛んでいた。

王太子は強烈なウイニーの抵抗に、一度足を止め、最大限の機嫌の悪さを表した顔で、彼女を見下ろした。

直後。

「ひともあらう。」

彼は。

ウイニーを床に引きずったまま、歩き始めたのだ。

「 あやあつー 」

それは、なんとみつともない光景だったのか。

ドレス姿の少女を、まるで抵抗する驛びとのように、あるいはと引きずるのだ。

ウイニーの靴が、片方脱げてしまつたところに、そんなこともおかまいなしである。

さすがに、その暴挙にこぎよつとした衛兵とウイニーは顔が合つた。

「助けてーー！」

声の限りに、その衛兵に助けを求めるが、彼はあらぬ方を見てしまつ。

誰も。

「……」では、誰もウイニーを助けてはくれないのだと、思い知らされる瞬間だった。

同時「」。

この感覚には、覚えがあった。

母がウイニーを叱つけていた時の侍女たちが、みなこうだつたではないか、と。

母の癪癩に逆らえる侍女など、誰ひとりとしていなかつた。

姉でさえ無理だった。

ウイニーは、ただ母の気が済むまで言葉の限りを投げつけられ、その後、もう見たくないよう追い出されるのだ。

誰も、助けてくれない。

「……」

そう理解した時、ウイニーは悲鳴をあげるのをやめた。

母こそじてきただよ、相手の気の済むまで黙つてされるがまになつていれば、いつか嵐は過ぎ去り、そのうち放り出されるの

だ。

ロアールにいる時と、同じ感情が胸をかすめる。

するする。

淑女じにわか、人間未満の扱いをされながら、ウイニーは 我慢しようとした。

いつもの、我慢。

いつか、ロアールを逃げ出して、我慢のない幸せを手に入れようと思つていた。

だが、どうだ。

王都に来たとしても、結局自分は我慢する事になるではないか。

母と同じように、理不尽な力に膝を折らされる。

どこに行つたとしても、同じではないのか。

たとえ、フランの公爵の妻になつたとしても、必ず何かがウイニーの頭を押さえつけるだろう。

誰も自分を守ってくれない。

そんな瞬間が、いつかどいかでやつて来る。

フランの公爵の顔が、心の中で浮かんだ。

いま、彼は『じょうがない』と思つて、諦めているだらうか、とか。

姉やスタッフも、そう思つて、いまもなお踊り続けているだらうか。

違つ！

ウイニーは、顔を上げた。

きつと彼らは、王太子の閉ざした扉を開けようと、頑張つてくれているはずだ。

彼女の後を追おつと、手を忽々とつぶれていくはずだ。

確かに、いまこの瞬間で、ウイニーは誰にも守られではない。

だが、彼らが自分を助けようと思つてゐるのは、間違いないはず。

王太子に髪を引つ張られた時、公爵も姉も助けに入つてくれた。

髪を直す時、スタッフは追つてきてくれたし、王太子が部屋に入らないよう抵抗してくれた。

彼らの気持ちのためにも。

何としても、無事に帰るのだ。

ウイニーは、掴まれてゐる手に自ら力を込めた。

自分の身体を、より王太子の腕に近づけるよつ。

その気配に気づいたのか、彼は足を止めて振り返る。

ありがたいことに、引きずられる力が消え、彼女は簡単に王太子の手に寄ることが出来た。

次の瞬間。

ウイニーは、彼女の手を強力に掴んでいる王太子の手に向かって。がぶつと、噛みついたのだった。

「……！」

痛かつたに違いない。

当然だ。

痛いほど勢いで噛んだのだから。

とつさに引かれた王太子の手に、ウイニーはついに己の自由を勝ち得たのだ。

ドレス姿で、自分をほめたくなるほど身軽に立ち上ると、彼に背を向ける。

戻るのだ。

みんなの待つあのホールに。

もう片方、残った靴も蹴り捨てる。

ドレスを持ち上げ、ウイニーは裸足で駆け出したのだった。

絶望的に、思えた。

レイシヨスは、その扉の前で立ちつくす。

主賓専用の扉は、王や王太子専用の扉とこう意味と同じだ。

その先にあるのは彼らの部屋であり、この扉以外から向かおうとしても、許可なく立ち入ることは許されないエリアとなる。

ついでに、踊りの輪の中にいると思つていた妹は、風のようすに素早く、そして計算された位置とタイミングにより、王太子に連れ去られてしまったのだ。

異変に気付き、レイシヨスがダンスを投げ出して追つた時には、もはや遅かった。

『王太子の御命令です』といつ、扉に衛兵の言葉が無情に響き、扉はびくともしない。

王太子は彼女の妹を、何事もなく帰すことはない そういうことだった。

王族のことなど、まったく知らない妹である。

いま、自分がどういう状況に置かれているのか、まるで理解していないまま連れて行かれているに違いない。

どれほど不安で、恐ろしい思いをしているだらうか。

王太子という人間を、表面上とは言え知っているからこそ、レイシェスは己の背筋を冷たくした。

どうにかして、この扉を突破する方法はないのか。

だが、心の中で誰かが言つ。

『そんなことは、無理だ』と。

公爵代理である彼女でさえ、この扉を開けることは出来ない。このままにして妹が戻されるのを、ただ待たねばならないといふのか。

「交代しよう」

そんな彼女の後ろから、フランの公爵が駆けつけてくれた。

スタッフアが、呼んできてくれたのだろう。

「兄上に任せよう……私がいますべきことは、見ていろ」とだ

ギリギリと、スタッフアは声の奥にある怒りを、決して隠してはいなかつた。

だが、レイシェスの肩を後ろから支えるように抱きながら、それでも彼は踏みとどまるのだ。

見てること？

彼女は、それを疑問に思った。

見ていて、何が変わるとこいつのか。

ここまで、レイシスはずつとウイナーのことを見ていた。

ロアールでは、見てることしか出来なかつたからだ。

それで、何が変わつたとこいつのか。

無力な自分を、思い知るだけである。

実際、公爵の問いかけに、衛兵は「王太子命令」とこいつ同じ言葉で拒んでいるではないか。

「……」

一度、フランの公爵は言葉を止めた。

彼は、上着の内側に手を入れ、何かを取り出す仕草をする。

「では、王太子に急ぎお渡しいただきたいものがある……タータイ
ト公爵よりと伝えていただけば分かる。少しだけ、隙間を開けるく
らいなうばよいだろつ」

衛兵は、彼が手に持つてゐるものを見て、ぎょっとした。

それは、大きな赤い石のはまつてゐる指輪だつた。

一衛兵が、決して触れることも出来ない素晴らしいものである。」
「これは、レイシエスの目から見ても分かる。

余りの高価な品に、彼らも動搖したのだらう。

公爵のすぐ側の衛兵は、直接指輪を預かるではなく、向こう側にいる仲間に、責任をなすりつけてしまおうと思つたに違いない。

その扉を、ほんのわずかだけ開けたのだ。

瞬間。

フランの公爵は指輪を放り出すや、その隙間に手を突っ込んだのである。

「何をなさいます！」

慌てたのは、衛兵だ。

いや、慌てすぎたと言つていい。

彼らは、思わず扉を強く閉めてしまった。

レイシエスは、強く身を竦めていた。

何が起きたか、容易に想像出来てしまつたからである。

扉は 無残にも、公爵の指を強く挟んだのだ。

だが。

レイシエスが見た公爵は、扉から決して手を引く事なく、そこに立っている。

青ざめたのは、衛兵だった。

たとえ王太子の命令であつたとしても、彼らは貴族最上位の、公爵の身に怪我をさせたのである。

いくら彼が、その場にしつかりと立つていて、手も引かず叫び声ひとつあげていなかろうと、あの勢いで怪我をしていないはずがないのだ。

「私は指輪を落としたので、慌てて拾おうとしただけだが……何故このような仕打ちをされねばならないのかね」

公爵の背から、赤い炎が上がっているように見えた。

とれほとの言いがかりでおまえども
抱括出来ない強きが
レバ
シェスの田の前にある。

その気に押され、衛兵たちは縮みあがりながら、公爵の手を救うべく扉を開けた。

レイシェスの前で。

開かないはずの。

扉が。

開いたのだ。

その向こうから

- 公職のおじれ事 - - -

駆けてくる赤毛の少女がいた。

髪を乱し、ドレスを抱え上げ、靴もはいていないウイニーが、顔を真っ赤にして、こちらに向かってくる。

妹もまた。

諦めていた。

あの王太子から逃げるのは、どれほど大変だつただろう。

唖然とする衛兵を横目に、公爵は怪我を負つたはずの手で、扉をもつ少し余計に開く。

妹が通るのに、問題のないほどに。

両手を伸ばして、
公爵は彼女を抱き止めた。

レイシェスは、『見ていた』。

その意味が、ようやくいま分かったのだ。

スタファは、ただ『傍観しろ』と言つたのではない。

公爵である、彼の兄のやり方を見ると言つたのだ。

知恵を使い、己の身体を厭わず、威厳ある言葉で圧倒する。

これがまさに 公爵といつもの。

ここまでする覚悟があれば、動かないはずの君さえも動かすこと
が出来るのだ。

衝撃、だつた。

動けないでいるレイシェスの後で、スタファは動いていた。

足元に落ちた公爵の指輪を拾つて、ウイニーを抱きしめている兄
に差し出したのだ。

公爵は、軽く顎で扉の向こうを指す。

それを受けたスタファは。

指輪を、扉の向こうへと放り投げた。

まるで、それがウイニーの身代わりであるかのよう。

「出よつか」

ウェニーを支えながら、公爵は一言告げた。

誰ひとり、反論を唱えるものなどいるはずもない。

精神的な衝撃の大きさに、震えそうになるレイシェスを
ファは、支えるように腕を取ってくれたのだった。

スタ

湿布と包帯でぐるぐる巻き。

スタッフの兄であるカルダの右手は、現在そういう有様だった。

幸い、骨は折れていないようだが、効き手に広がる赤と青の痛ましい腫れの色は、閉ざされた扉の強さを見せつけていた。

ウイニーは、包帯の糸を痛々しく思つかもしれないが、中の色具合よつよせビミシである。

同時に、兄の覚悟を決めた時のすさまじさは、見事だと痛感せざるをえなかつた。

王太子を直接ブン殴れない分、カルダは己の身体を持つてして、理不尽を訴えるのだ。

公爵の怪我とつものは、簡単に一言で済ませること出来ない。あの衛兵たち全員の首をすつ飛ばしてなお、到底足りることはないだらう。

王や王太子へ圧力をかけることは出来なくとも、大臣や執政官たちにほやり方があるのだ。

とはいつもの。

「王太子の手に噛みついて逃げるとは……」

スタッフは、つい笑いがこみ上げてしまった。

そんな王宮内での駆け引きなどと、無縁の娘が一人いる。

ウイニーだ。

彼女は、女性として正しいことをした。

何をしても、自分の身を守る。

それを、言葉通り実践したのだ。

あの王太子が、彼女に噛みつかれてどれほど驚いたかと思つと、留飲が下がる思いだつた。

とはいつもの、無罪放免というわけにはいかないだらう。

次期王に、怪我をさせたのだ。

公爵に怪我をさせることよりも、更に罪が重くなる。

無理難題を言わぬかねないのは、火を見るより明らかだつた。

だから、兄はスタッフに書状を書かせた。

効き手を怪我しているために、重要な書類は彼が代筆することになるのだ。

宛名は、王太子 ではなく、王。

王太子が無茶をやらかす前に、先に王に話を通しておく方法を、兄は選んだのだ。

これは、レイシエスでは思いつけないこと。

彼女はまだ、正式な公爵ではないし、公爵という地位の使い方をよく分かつていらない。

本来であれば、レイシエスは公爵である父親について学ぶのが一番いい。

机の上だけでは、決して分からない『公爵道』が、そこには必ず存在するのだから。

だが、彼女はその道は選べなかつた。

母の圧力が強すぎたことと、現在、父親が身体を壊してしまつているからだ。

兄の姿を見せたことが、少しでもよい刺激になつていればいい。スタッフはそんな風に思ひながらも、兄を妬ましい目で見つめたのである。

「何だ、その目は？」

兄の元に、ひつきりなしにロアアールの姉妹から手紙が届くからだ。

おぞらぐ、お礼や怪我に対する見舞いなのだろうが、それが正直羨ましかった。

手の怪我の関係で、返事の代筆は勿論スタファアになる。

ウイニーに対する返事はいいとしても、レイシェスに対する返事には、複雑なところがあるのだ。

悔しかつたスタファアは、自分も彼女に送る手紙を書き、一緒に届けさせたが。

兄の返事には、不穏な文章はなかつたので、向こうの姉妹に王太子からの直接の咎めはいっていないうだ。

その代わりといつうわけではないのだろうが、こちらの方に王太子からの封書が届けられた。

封書と言つても、手紙が入つてゐるわけではない。

封筒の中から転がり出てきたのは。

指輪、だつた。

兄が、ウイニーの身代わりであるかのように差し出したそれは、ものの見事にひんまがり指輪の様相をなしていな上に、赤い石はなくなつていた。

「まだ、ウイニーのこと諦めてはいなうだな」

険しい表情で、その指輪を見つめる兄。

スタッフも、非常に不快な気分を味わった。

邪魔をしたフラを、この指輪のようひねりつぶしたいという意図と、赤い石（赤い髪のウイニー）は奪うという意図の、両方が込められている気がしたからだ。

ロアアールは、王太子に側室を送らない。

王太子は、そんな慣習など関係ないと思っているか、もしかしたら側室にしたいわけではないかも知れない。

ただ、抵抗されるから捕まえて斬りたい。

スタッフから見れば、そう思えるところもある。

だが。

レイシエスに向けるものとは、明らかに違つものをウイニーに向けている気はした。

それは、一度でも食らえば満足すると言われても、はいそうですがとは彼には判別出来ない。

たとえ、一度食らえば満足すると言われても、はいそうですかと差し出すわけにもいかないのだが。

「兄上、ウイニーだけ、先にロアアールに帰したらどうだろ？」

この場所は、彼女にとつてもはや危険だった。

滞在の残り日数が、それほどないとは言え、また今回ののような事件が起きては非常に厄介だ。

王宮にいたところで、部屋に閉じこもつて居るしか出来ないだろう。

それでは、あまりにウイニーが憐れではないか。

兄は、彼の言葉に考え込んでいた。

「ロアールに、一人だけ帰することは難しいだらう。馬車や警備の関係もある」

だが、結論は否定的なものだった。

「だけど……」

すぐさま、スタッフアが説得しようと身を乗り出しだが、兄に包帯のない左手で制される。

「まあ、待て。策がない訳じゃない……この馬鹿げた会が終わるまで、ウイニーはランスカ伯のところに預けよう」

左手の向こうから語られた言葉は、彼を安堵させた。

そういう方法があつたか、と。

タータイト家は、非常に革新的な人間が多い。

簡単に言えば、思い切りがよいし、反対されたつて言つことを聞かない。

女性は恋愛結婚が多く、惚れた相手と見たら、ビリの誰だらうが突撃していつてしまつ。

フランシスカ伯としても、ロアアルのよつて王太子に娘を差し出すなんてしたくないのだが、過去に何人か側室としてあがつてているのは、單純にフランシスカ伯の娘たちの恋愛病が発動して、その対象が王太子だつたと云うだけである。

それと同じ要領で、都の貴族に嫁いだ者もいる。

一番、血が近いのが、さつき兄が口にしたフランスカ伯。その妻は、ウイニーたちと同じく、彼らのはとじである。

フランスカ伯は、王宮勤めではないので更に都合がいい。

そこにならば、うつかり王太子とはち合わせる」ともないだらう。

何か聞かれたら、「故郷に帰しました」と言つておけばいいのだ。

とにかく引き離しさえすれば、そのうち興味を失うだらう。

かくしてフランシスカ伯の兄弟は、ウイニーを親戚宅へと預けることを決定したのだった。

ウイニーは、保護された。

レイシェスは、一人になってしまったロアアールの部屋で、寂しい気分を覚えながらも、本当にほつとしていたのだ。

これから、彼女には謁見会という重大な仕事が待っている。
そんな時に、王太子から妹を守り続けるのは、本当に大変なことだと思っていた。

フランの公爵の手際は、見事なもので。

ウイニーを置いておける屋敷と、そこへ行くまでの移動手段の全ての手配をあつという間に終えてくれたのだ。

妹が、王太子の手を噛んだという点については、既に王へ直接書状を送ったということも聞いている。

公爵という地位の使い方のひとつを、またしても見せてもらつた。

ウイニーが、安全なところに移動した後、スタッフがやつてきたので、レイシェスは彼に食い下がつた。

どんな手紙を書いたのか、知りたかったのだ。

本来であれば、公爵の手紙の内容をスタッフが知ることはない。

しかし、いまの公爵は効き手を怪我している。

スタッフが代筆したのでは、と読んだのだが、当たりだったようだ。

余り細かい話は出来ないと前置きした上で、彼は要点だけ語つてくれた。

「外交上のじつになる可能性を、兄上は示唆したんですよ」

王太子の、ありえない行動はウイニーから聞いていた。

廊下を、引きずられたことまで。

それらを薄縄にぐるみながら、公爵は王に報告し、フリはそれに不快な感情を覚えたことを伝えたというのだ。

妹のことは、ロアアールだけの問題ではないのだと語ってくれたのだ。

心強い味方に、本当に嬉しかった。

「けれど、何故フランアールに肩入れするのか、陛下は陥しく思わないかしら」

「の後の、謁見会のことを考へると、そういう理論武装の薄いところを責められるのではないかと不安になる。

「『近々、正妃として求婚する予定の女性』、だそうですよ」

難しい顔になりかけたレイシェスに、スタッフの言葉はすっと転がり込んでくる。

「あー……」

余りの不意打ちの言葉に、レイシェスは驚いた顔を見せてしまった。

確かに、言葉の通りではあるのだが、まるで随分前から考えられ、当たり前のことであるかのように書かれていることにびっくりしてしまったのだ。

ほんのつい先日、この場の口約束で決まったことだったところに。

「王太子に不快感を覚えるには、十分な理由でしょう？」

そんな彼女の顔に、少しおかしそうに微笑みながら、スタッフが付け足した。

確かに。

もし、ここにウィニーがいたならば、きっと恥ずかしそうに喜んだことだわ。

「いくら王でも、フラーとロアアールの両方を敵に回すのは、得策ではないと判断すると思こま」

「公爵様は、素晴らしい手腕をお持ちですね」

自分が頭でっかちであることを思い知られるが、いい勉強をさせてもらつたと、いまは考えよつ。

レイシエスはさう考へ、自分の中の血肉として、それらを取りこもつとした。

こつか必ず、この知識が役に立つことが来るに信じじ。

「お役にたてるにことがあれば、いつでも私を呼んで下さー」

肩書き公爵ではないが、その男を一番側から見て来たスタッフは、彼女に対して手を広げてくれる。

これは、本当にありがたいことだった。

「あつがとうござります」

許されるものならば、いま彼の頭の中にある全ての知識を得たいほどだ。

賢明な兄弟がいて、きちんと側に置いて育てるとこつことは、こんなにまでも財産になるのだと痛感する。

彼女らの母が、もう少し賢明であれば、きっとレイシエスと同じようにウイニーにも学ばせたことだらう。

さうするべきだったのだ。

もし自分に不慮の事故が起きて、突然公爵を継げなくなつてしまつた時、ロアアールはどうなつてしまふのか。

それを考へると、フリの兄弟はどちらが公爵の地位についてもおかしくない教育をされているし、もし公爵が後継ぎがいなまくなるようなことがあつたとしても、スタッフアはそこにしっかりと立つだつ。

母は、本当の意味でロアアールのことなど考へてはいなかつたのだ。

ロアから嫁いできて、一人の娘を産みはしたが、あの領地の未来のことなど、本当に何ひとつ考へてなどいなかつたのである。

外に出たおかげで、レイシエスにはそれがはつきりと見えた。

そして、故郷に帰つた時、自分は母と対峙せねばならないといふことも、はつきりと理解したのだ。

ロアアールのために。

そして。

父に会わなければ。

どんな家庭教師よりも、父の身体の許す限り、語り合わなければ。

スタッフアを前にしながら、彼女は心の中でそつ決意した。

「何でも手伝いますよ……いえ、貴女が望むのであれば、全てを捧げますよ」

そんなレイシェスの決意など、決して知ることのないはずの男は、彼女の心を揺さぶる言葉を吐くのだ。

彼は 助けになる。

スタファという人間に、貴重な本以上の価値を見出してしまったのだ。

それは、何と抗いがたい感情だったか。

その貴重な人間が、自分からレイシェスに全てを捧げてくれると言っているのだから。

ロアアールのためにも、思わず掴みたくなる衝動を、彼女はこらえた。

この衝動の根源に、『弱さ』があるのだと分かったからだ。

彼のことを『助け』と思っている時点で、それは明らかだった。

少なくとも、母に対峙するための助けにしてはならない。

でなければ、『フラ』の影響を受けたロアアールの公爵と、吹聴されるかもしだいからだ。

あの母だけは。

どうしても、レイシェス自身が越えなければならない相手だった。

彼女は、心を落ち着けてからスタファをまっすぐに見た。

「もし、そんな機会があれば、その時はよろしくお願ひ致しまさ」

遠まわしに抱む言葉。

すると、スタッフは一瞬笑みを消した後、より真っ直ぐに彼女を見つめ返して、こう言ったのだ。

「機会は『ある』ものじゃあません……『作る』ものですよ

何一つ揺りぐるみのない彼の黒い瞳は、本当に眩しく熱いものだ
つた。

「あたくしと、はといなつますわあね」

フランスカ伯の奥方である赤毛の女性は、氣だるやうひじつだった。

名は、ラーレ。

ウイニーの祖母の、妹の孫氣づひじとなる。

「お手数をおかけします、ウイニーと申します」

同じ赤毛ではあるが、自分とはまったく異なるタイプの女性だ。

色香が全身から溢れ出しているし、大きく胸元の開いた真っ赤な衣装に、毛皮のストールといつセンスは、とても彼女には真似出来そうになかった。

動きや言葉も、非常にやがだ。

応接室のふかふかソファに深く背を沈めたラーレは、向かいに座る自分を踏みするよう上から下に見つめる。

女としての価値に数字をつかられていたので、ウイニーは無意識に背筋をぴしっと伸ばしてしまった。

同じ赤毛であっても、生まれた国は違う。

ウイニーの恥が、ロアアルの恥としてフラーの人間に伝わってしまったかもしれない。

ただでさえ、随分姉には王宮で迷惑をかけてしまったのだ。これ以上、ロアアルの面倒をつぶすようなことは、彼女には出来なかつた。

ウイニーをひととおり眺めまわした後、ラーレは怪訝そうに首を傾げる。

「ちょっとフラーにいない間に、公も随分趣味がお変わりになられたわねえ」

その言葉は、何と言えばいいか、本当に素直に口から出た音に感じた。

不快感をあらわされるわけでもなく、歓迎するわけでもなく、ただただ不思議に思えて仕方がないという響き。

ウイニーが、フラーの正妃候補だと聞かされたのだろう。

そういう日で、彼女を值踏みしていたのか。

う。

すっかり、ウイニーは恥ずかしくなってしまった。

フラーの公爵は、ただ彼女の願いを聞き入れる方法を考えてくれただけで、自分が彼の好みであるなんて思つてもいい。

そういうことを考えたことがなかった、というのが正直なところだ。

そうだよね、女性として気に入られたわけはないんだよね。

今更ながらに、ウイニーはちょっとへこんでしまつ。

「チチエックは、本当に儲しことをしたわねえ。本当に花のよう美しかったのに」

寂しげにラーレが、窓を見ながら呟く。

「」にウイニーがいるところに、すっかり自分の世界を構築してしまつたようで、彼女はカヤの外だ。

ウイニーを見ているだけで見ていないうまでは、社交的な意味で言えば失礼なのだろう。

しかし、彼女にはわざと悪気もなく、ただ自分流の時間や思考の流れを持っている人なのだろうといつのは伝わってきた。

それに、いまはとても怒る気にはなれない。

ラーレが口に出した『チチエック』という名は、きっとあの人の名前だらう。

公爵の正妃でありながらも、この世にいられなかつた人の。

彼女が口に出すところと、きっとタータイト家の親戚の女性だつたのだろう。

ただ、ちょっとと思つた。

自分がフラン嫁いだら、今と同じ悪いを、時々味わうのだひつじ。
誰かが、チエックという女性のことを惜しむ度に、その色を隠せない瞳でウイニーを見るのだ。

「あたくしね……チエックだったからこそ、最後は身をひいたん
でしてよ」

髪の毛を掴み合つて、ケンカをしたこともありましたわ。

突然、彼女は自分世界から、とんでもない言葉と共に戻ってきた。

髪の毛を掴み合つて！？

どういう状況だったのかと、ウイニーは驚きを隠せず「ワーレを見
てしまつた。

「側室にはなれたかもしれないでしようけど、私は側室なんてまつ
ぱらじめんでしたわ。チエックも同じだったから、ケンカするし
かなかつたでしょ？」

「はあ……」

彼女に、どんな相槌を求めているのか。

いや、きっと相槌などどうでもいいのだひつじ。

要するに、昔フランの公爵の正妃の地位を、掴み合いでしてまで争つたことがあるのだとラーレは言つてゐるよつだ。

「このやかなかな女性が、どうしたら掴み合いで出来るのかは、やはりやっぱり想像がつかなかつた。」

チチエックとこつ女性も、同じよひやかだつたのだからつか。

「二人の幸せな結婚なんて、見たくはないでしょ? だから、あたくし都に旅に出ましたの」

神殿巡りの旅にかこつけた、観光旅行だと彼女は言つ。

実際は、傷心旅行だつたのだろう。

「神殿で今の夫と出会つて、あたくし三秒で恋に落ちました。青銅の彫像かと間違えそうになりました。神殿の管理をさせておくには、惜しいほどですわ」

「ひとつひとつ、ラーレはその時のことを思つて出す箇で、ため息を洩らす。

三秒。

ちよつと、公爵が不憫になる瞬間だつた。

人の心が大きく動くのは、ほんの数秒でもりえるのか。

ウイニーには、それはよく分からなかつたが、いまのラーレは幸せそうで何よりだと思う。

同時に、フリの女性としても自分に正直なのだと分かった。

南長は、王太子にやえ逆らいみせたし、じんなゆるやかなラーニドやえ髪の掴み合こまである。

そこにはいたくないと黙つたら、どんな奴だあれども、やつをと故郷を離れてしまつ。

いつしドラーेを見ていると、他の方法もあつたのではないかと思えてくるのだ。

『誰か私を助けて』ではなく、自分の意思で母から離れる方法が。

ウイーーは、母と髪の掴み合にもしていい。

母親に面と向かつて逆らつてもいい。

フリの女性と比べると、物分かりのいいフリをした、弱い子どものあることを感じる。

ただ。

彼女は、王太子の手を噛んだ。

生まれて初めて、強いものに逆らつた瞬間だった。

あの時の、がむしゃらな気持ちは、ウイーーの中になかったもの。それは、間違いなく都に来て初めてわきあがつた感情だ。

戦えるかもしれない。

夫ののろけ話を語り続けるラーेを前に、彼女はふとそう思った。

今なら、母と戦えるかもしれない、と。

ちゃんと戦つて。

そして。

行きたいところ。

行けばいいのだ。

レイシエスは、初めて王に会つた。

王太子の謁見室よりも、10倍は大きく、そして厳めしい石作りの部屋だった。

彼女の予想よりも、もつと暗く重苦しかつた。

王の栄光の華々しさを表すには、不似合いと言つた方がいいかもんで、だだつぴりい牢獄を彷彿とさせる。

王は、ひとりひとりの公爵と、まずは謁見する。

一番最後のレイシエスに、よつやくその順番が回つて来たのだ。

5公爵の地位に優秀はないが、順はある。

公爵の在任期間の長さだ。

父の代理ではあるが、父自身が来ていないため、ロアアールは最後となる。

「のまま、自分が公爵になつたとしても、しばらくはこの順序で安定だわつ。

王は、石段の上の古く美しい、しかし飾り気の少ない木製の椅子に腰かけて、レイシエスを見下ろしていた。

初めて見る彼女を、油断なく見つめているように思えた。

「拳の地の全てを統べるマイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）陛下。初めてお目にかかります。ラットオージョンの一の娘、レイシエス・ロアール・ラットオージョンと申します」

挨拶の口上は、これまでのどんな声よりも美しく朗々と発したつもりだ。

反響する自分の声に惑わされず、レイシエスはこの大きな仕事の一言田を、無事に乗り切ったのだ。

だが、緊張感や威圧感が緩んだ訳ではない。

肌がぴりぴりとするほど、王の視線が自分に注がれるのが伝わってくる。

「ロアールは、これまで通り未來永劫、拳の全てに忠誠を誓うか？」

強く低く、声で人の頭を地べたに抑え込むような声。

反発せずにいられないような頭ごなしの言葉を、レイシエスはじぐりと飲み込んだ。

何を言われるかは、一応前知識として理解していたつもりだが、王自身の口から出て来た厳しさは、どんな勉強でも理解できないもの。

そして。

「この謁見室が、どうしてこれほど晴れやかでないのか、その理由がいま肌で分かつた気がした。

「こでもしもレイシエスが、ほんのわずかでも従わない気配を見せたならば、この場できつと首を落とされるに違いない。

牢獄ではなく、処刑場のよつに感じたのである。

レイシエスは、ひとつ息を呑んで、しかし王を見つめ返した。

「これまでのロアアール同様の、忠義をお約束致します」

震えてはならない。

脅えは、一瞬にして氣取られる。

ロアアールは、この拳の國の一部ではあるが、未來永劫ラットオージョン公爵のロアアールなのだ。

たつた16歳のレイシエスは。

魂を賭けて、王と対峙してきたのだった。

ふりふりする。

ほんの短い謁見だったところに、彼女は既に精根尽き果てた状態で、部屋のベッドにひつぶせに倒れた。

こんなみつともない真似をするとせ、自分でも思つてもいなくて、侍女が周囲でオロオロしている。

「大丈夫よ……ウイニーを呼ん……」

腕で、何とか自分の上半身を持ち上げながら、レイシエスは無意識に妹を呼ぼうとして、はたと気づいた。

そうだった、と。

妹は、フラの公爵の計らいで、王宮から離れてしまったのだ。

元気な妹を見ることが出来ず、彼女は寂しい思いをした。

ウイニーを見れば、少しは気分が良くなるかと思つた。

ようやくベッドの端に腰かけるまで身を起こすと、レイシエスはため息をついた。

部屋は静かで、そしてとても広い。

妹と再会するまで、味気ない時間が多くなりそうだ。

そんな彼女の元に、侍女が近づいてくる。

その手に抱えているのは、花がいっぱい詰まつた籠と手紙だった。

「お戻りになられたらお渡しするよ」と……」

差出人は　スタフア。

つべづべ、女心の分かっている男である。

花も嬉しいが、いまは手紙の方が嬉しい。

レイシエスは、封を切った。

愛情の詰まった、バリエーション豊かな書き出しが、今日の謁見会をねぎらひ言葉が並ぶ。

「まあ」

彼女が、つい声をあげてしまつたのは、次のぐだりだつた。

『よくさえずる赤い鳥がいなくてお寂しいでしょう。別の赤い鳥でよろしければ、いつでも側に参ります』

赤い鳥とは、ウイニーのことか。

妹の不在を寂しがつていると、スタフアも思つたのだろう。

その隙間に、自分が入り込もうと思つてゐるのか。

くすくす笑いながら、レイシエスは彼が丁寧に手順を踏んでくれてゐることに気づいた。

ひとつひとつ、彼はノックをしてくれているのだ。

レイシエスの心の扉の前で、じつくりと。

だからと書いて、彼がただの大人しい男だなんて、彼女は思つてもいなかつた。

スタッフの妹に対する言葉や態度を考えれば、彼は公爵よりも、もつと野趣溢れる男に見えるのだ。

それを押しとじめながらも、ノックをするような手紙は、レイシエスを微笑ませる。

彼女が許せば、あつという間に扉の中に飛び込んでくるだらつ。

ノックの紳士ぶりが、まるで嘘のよう。

微笑みを、最後には苦笑に変えてしまつた。

心の中で、公爵になる自分と女の自分が向き合つてゐる。

全ての利害の一致しないその一人が、自分に向かつて甘言や苦言を投げようとするのだ。

公爵になる自分が、つい少し前まで確實に強かつたというのに、今日は少し疲れたせいか、女の自分の声をうるさく感じた。

それもこれも。

多分。

スタッフアのせいだ。

御前会合

都は、明るく美しい春の日に包まれていた。

王と5公爵の御前会合は、晴れやかに進んで行くはずだった。

カルダは、一番末席のレイシェスを見た。

彼女は、無事に個別の謁見を乗り越え、ここにいる。

落ちついた様子に、彼は安心していたのだ。

アールの小うるさい詰ぶりを、ニールの老公が一言で諫めた様子を見て、他の皆がわずかに笑みを浮かべる。

そんな、決まりごとのような流れを断ち切ったのは、王の側に大臣が寄ってきたからだ。

何か、急ぎの連絡が入つたらしい。

王は。

この御前会合を邪魔してまで近づく大臣を、冷たく見つめる。

会合と情報の重みを計りにかけ、もしくだらない内容であれば、大臣であつとも命をもつて購わせるという瞳。

王は、心が狭い。

その分、周囲は何が何でも優秀であらねばならなかつた。

大臣の決死の耳打ちに、王の眉が動く。

怒りではない。

どうやら、大臣の情報はとても重要だつたようだ。

公爵たちは、みな緊張した。

御前会合よりも、重大なことと理解したからだ。

レイシェスは、この状況をよく分かつていないうつで、ただ表情を変えずに座している。

王の視線が、こちらに戻る。

いや。

視線は レイシェスに向かつた。

「ロアアールの娘よ」

王は、重々しく唇を開く。

嫌な、予感がした。

まさか、と。

そして。

予感は、的中する。

「ラットオージェン公が……死んだぞ」

静まり返る議場。

全員が、レイシェスを見ていた。

ロアアールの鉄壁の盾が、死んだ。

レイシェスとウイニーの父が。

どうしてもう少し、生きておいででなかつたのか。

弔意よりも先に、カルダは亡き彼を叱咤した。

レイシェスは16歳の女性で、公爵となるには未熟だ。

あの、異国との玄関口であるロアアールの守護を引き継ぐには、
まだまだ時間が必要である。

そして、ウイニー。

彼女は、必死に救いの手を伸ばしてきた。

母の呪縛から、逃れるために。

その手を、カルダは掴もうと決めたのだ。

きっと、ラットオージョン公であれば、カルダの希望を通してくれるだろ？

その書状を、この都にいのちに送るつもつだつた。

だが、その受け取り先は、もはやこの世にいないのである。

どちらの娘にも時間が足りないまま、彼は死んだのだ。

「さて、何をするかな？」

凍りついた会合の空気を破つたのは、王。

5公爵の一人が死んだ事を、事務処理のよう扱い、レイシェスを見る。

いや、試しているのだ。

次の公爵である彼女に、たつたいま父親が死んだことを聞かされた彼女に、ロアアールを全て背負わせ、その上で答えをせようとしている。

カルダは、一息ついて目を閉じた。

事前に分かっていたのならば、話のひとつもしておけただろ？が、いまや彼が出来ることは何もない。

ただ、レイシェスの聰明さを信じる以外になかった。

「か……緘口令を……お願いしたく思います」

かんじゅれい

噛み合わぬ奥歯を、無理矢理一度噛み合わせた一音田。

奥歯が、がちっと強く音を立てたことに、さつと彼女自身驚いていふことだらう。

死を、隠せと。

レイシェスは、最初にそう願い出た。

「いつまでだ？」

「私が領に戻り、改めて死の報告をお送りするまでお願い致します」
5公爵とひとくくりしたところで、各領地の役割はそれぞれ違う。

特に、ロアアールは別格だ。

他国に接するかの地は、力が弱まった時には必ず隣国の攻撃を受けている。

公爵の代替わりをした時などは、必ずと言つていいだらう。

彼女はすぐに領地に戻り、防衛の強化をせねばならない。

そのためには、父親が死んだという情報が他国に漏れるのを、いは一秒でも遅くしたいと考えているのだ。

「こますぐ帰る気か？」

ふーむと、王はひとつ鼻を鳴らした後、多くの思考を巡らせるである「レイシェスに問いかけるのだ。

謁見会の真っ最中。

まだ、王主催の晩餐会も終わっていな「この時に、である。

答えなど、分かりきつていてる。

「ロアアールの一大事は……この国的一大でござります」

言った。

レイシェスは、言いきつた。

カルダは、これから大変であろう彼女のことを探しながらも、少しの安堵を覚えていた。

ロアアールの魂を、しっかりと受け継いでいることは、王だけではなく他の公爵にも伝わったはずだ。

「この国的一大事であるのならば、上手くおめでませよ」

王は。

追い払つよつて、軽く手を振つた。

「また2年後に、御前に参ります……」

レイシェスは
去った。

姉妹の決意

ウイニーさんは、二つの衝撃が襲いかかっていた。

ただただ退屈な日々は、その瞬間に一転する。

ひとつは、父が亡くなつたという事。

それは、他の誰でもなく、わざわざ正面を出て訪ねてきてくれた姉が、内々に伝えてくれた。

決して口外しないよ、と。

すぐには、葬儀はあげられないと言つのだ。

「姉さん……」

目を真つ赤にしながら、ウイニーは姉を呼ぶ。

いまにも涙が溢れてきそうなのだが、いまのレイシエスを見ると、それを我慢しなければならないのだと痛感したのだ。

もうひとつ衝撃。

それは、レイシエス自身の姿だった。

美しいドレスに身を包んでいた姉は、いまは見る影もない。

男の恰好をしているだけでも、驚きだとう。

とろけるようなミルクティ色の髪は、ぱつぱつと短く落とされた。いたのだ。

化粧もしていないその姿は、精緻に整った顔の少年のよつこも見えた。

妹の驚きと悲しみの視線を避けるように、レイシエスは帽子を田深にかぶり直した。

「私は、一刻も速くロアアールに戻らなければならぬわ。けれど、謁見会の最中に帰つたと周囲に知られる訳にはいかないの」

誰にもレイシエスだと、ロアアールの公爵の娘であると悟られないように、変装をして帰るのだといつ。

たつた一人、護衛隊の隊長のみを変装させて伴うだけで。

「わ、私も！ 姉さん、私も帰るわ！」

髪を切れと言うのなら切る。

男の恰好をしろと言つのならする。

故郷の一大事なのだ。

父が死んだ悲しさは、重く深くウイニーの胸にのしかかってはくるが、姉のこんな姿を見て、どうして一人で嘆いていられようか。

姉は、白くほつそりした指で、ウイニーの手を取ってくれた。

そして、ぎゅっと握りしめてくれる。

「ウイニーさんは、王宮に戻つて欲しいの」

返答は、意外なものだった。

「あなたは王宮でスケジュール通りの日程を終えて、それから皆と一緒に帰つて来てちょうだい」

反論しようとするとウイニーを、すぐ口にレイシスは制した。

「この国には、他国の間者が入り込んでいるだらうと。」

その目をかわすために、レイシスはこんな恰好をしたが、王宮からロアアールの影を消せば、疑われる可能性がある。

だから、姉の代わりにいて欲しいと言われたのだ。

誰かに聞かれたら、姉は部屋で伏せつていると答えればいいこと。

他の公爵も、それで口裏を合わせてくれるところ。

「ウイニーにしか……私の妹であるあなたにしか出来ない、重要な仕事よ」

ぎゅうっと、手に力がこもる。

痛いほどだ。

でも、でも。

ウイニーは、往生際悪く姉に追いすがるひつとした。

「大丈夫。困ったことがあつたら、フランの公爵様に相談なさい」

「姉さん！」

踵を返す姉に、手を伸ばす。

違うのだ。

自分が一人で残るのが、怖いのではない。

一人で行かせるのが、怖いのだ。

ロアアールの隣には敵がいて、ロアアールの屋敷には母という重しがあって。

そんなところに、姉を一人で行かせてしまつのが嫌だつた。

ここに、もう一つの手があるのに。

もう一つの身体があるのに。

姉の重圧を分かち合えない自身の足りなさが、こうして自分たちを引き裂くのだと知つた。

それ以前に、自分から重圧から逃れ、引き裂こうとしていたではないか。

混乱する意識の整理もつかないまま、ウイニーは粗末な荷馬車に乗り込む姉を見た。

都に来た時とは、比べ物にならないほどその寂しい様子は、彼女をひとつしゃくりあげさせる。

馬車は、あつさりと門を曲がって見えなくなり ウイニーは、都にひとりきりのロアアールの娘となつた。

姉の言いつけに、ウイニーは背かなかつた。

速やかに王宮に戻つたのだ。

姉は、全てきちんと後始末を終えていた。

侍女たちは、みな強張った面持ちで、しかし唇は真一文字に引き結んでいる。

何も申しません。

そう、彼女らは決意を見せてくれているのだ。ひつ。

侍女たちの、出自はみなロアアールだ。

彼女らは、どんな領地の娘たちよりも、隣国の恐ろしさを知つて

いる。

自分たちが漏らす、ほんのひとつの一言葉が、己の故郷と家族を危機に陥らすかもしない。

それだけは決してしないのだと、心をひとつにしてくれているのだ。

いま、ウイニーが出来ることとは、最後までこなすこと。

一人分の食事が来たら、それぞれ半分ずつ食べる。

たった、それだけのことでも、姉の助けになるのだ。

あと、時々王宮をウロつく。

自分を目立たせるためだ。

ロアールには、赤毛の娘がいる。

先日の王太子の晩餐会で、十分顔を売つてしまつたようだ、すれ違う人の誰もが『ああ』という表情で自分を見るのを感じた。

ロアールの人間は、まだ王宮にいるアピールするためだったが、効果はきめんのよつだ。

寂しいのは。

フランの公爵から一度手紙は来たものの、忙しいのかまだ顔を見られていない。

スタッフなら、気楽に来られるはずなのに、顔も出さなかつた。

そんな、物寂しいウイニーの王宮散歩中。

向こうから、一人で歩いてくる男がいた。

ウイニーは、足を止めた。

気づかれる前に、回れ右を。

と、思つた時には、目が合つていた。

身を固くする。

じゅうじ向かつてゐるのは 王太子だつた。

王太子は赤毛がお好き？

逃げかけた己の身を、ウイニーは自身で強く引き止めた。

いま、彼女と共にいるのは、侍女のネイラ一人。

助けてくれる者は、いない。

いや、いる。

いるのだ。

だが、彼らはみなそれぞれの仕事で、ここにいられなかつたり、多忙を極めていたりしていた。

そんな大事な人たちの、助けになりたいから。

だからこそ、ウイニーはここを自分一人で、きちんと乗り越えなければならないと思ったのだ。

脇へ一步よけ、王太子が歩く道を開ける。

彼とのまま、うまくすれ違えればいい。

だが、そんなことは、自分の希望による淡い空想であることくらい、もうちゃんと分かっていた。

だから、ウイニーはちゃんと心構えはしていたのだ。

何が起きたても、驚いてしまわなこよひ。

王太子の通過に合わせ、深く辞儀を表していた彼女の田の前で、やはり彼は足を止める。

視線を下げて、田の前で、田の前の男がどんな表情をしているのかは分からなかった。

ただ、おそらく彼女の記憶にある、不機嫌な表情であろうと思つていた。

そんな彼女の田に、王太子の表情は映らなくとも、身体の反対側からずいと差し出された手は見ることが出来る。

手を取るといつ意味で差し出されたのではなこと、よく分かつていた。

何故ならば、ウイニーの視界にある右手には、いまだはつきりと歯型の形に内出血した痕が、ありありと残つていたからだ。

最後に会ったフランの公爵は、右手に包帯をしていたが、この男は隠すことよりも晒す方を選択したのか。

まるで、責めるように突きつけられるその歯型の手。

「……で、男性慣れした女性であれば」と言えばラーレであったとするならば『おしゃつございましたわ』などと、ジョークでつまくかわせるのかもしない。

しかし、U-101の田はウイニーで。

これまでの少ない経験では、そんな言葉は思いつきもしない。

それよつも。

ウイニーは　自分の右手を差し出した。

短いながらに付き合つて来た王太子には、いとうの方がしつづつ来るような気がしたのだ。

そして、じつにいた。

「どうぞ、お歯み下せ。」

田じは田を、踏んだ足には足を。

では、歯んだ手には、同じだけの対価を。

フランの公爵も、彼女のために痛い思いをしたのだ。

こんなもの、ただ痛いだけではないか。

命に別条がある訳でもなし、ロアアルの現在の危険に比べれば、わざやかな犠牲だ。

手が。

歯み痕のある手が、ウイニーの手首を掴む。

あつと握った時には、上に引き上げられていた。

見上げる形になつた彼女は、そこでようやく王太子を視界に映すこととなつたのだ。

黒い黒い髪の向こうに、灰色がかつた縁の瞳が見える。

その中に、赤い髪が映つっていた。

しかし、彼の表情は、ウイニーが予想した通りの不機嫌顔。

この男には、笑みといつもの浮かばないのだろうか。

見ていると、掴まれた手はそのまま引き上げられていく。

王太子の口元へと。

踏ん張れ、私。

息がかかるほど、近くに自分の手がある。

彼の唇が開くのを、ウイニーは見ていた。

穏やかな開き方ではなく、獰猛な肉食獣のように歯がむかれていく動きを。

こんなこと。

なんでもな がりつ。

やつぱ、痛い――つ――！

かくしてウイニーは、王太子、フランの公爵に続き、三人目の右手を怪我した者となつた。

彼への対応を、ウイニーは間違わなかつたようだ。

王太子は 最低でも同じだけの犠牲を相手にも強いるよつて見える。

人から『えられる害には、必ず同等以上が返されるのだ。

だからと書いて、自分が人に与えた害についてはそのまま。

くつきりと残る王太子の歯型と、見るだけで痛い赤と青が広がり始める手の甲。

痛みを我慢しながら、ウイニーは声ひとつ出すものかと奥歯を食いしばつた。

口は離したものの、王太子はその手を離さなかつた。

それどころか。

さつき噛んだばかりの手の部分を、わざわざぎゅうつと強く握り直したのだ。

「………」

頭の真ん中に金属の棒を突き立てられるような、鈍く冷たい痛みが駆け抜けた。

それでも。

それでも、ウイニーは声は出さなかった。

だが、目だけは涙目になってしまった。

どうしても、それだけは止められなかつたのだ。

「屈した方が、楽ではないか？」

冷やかな言葉だ。

だが、おかしな言葉にも思えた。

何の力も持たない、こんな小娘一人屈させたところで、一体何になるというのか。

ウイニーの姉なら、分かる。

彼女は公爵になる人間なのだから、屈服させれば王となる者としてはやりやすいだろう。

痛みで頭の中が混乱しそうになりながら、そんな思考をウイニーは形にしてみた。

「何で私を……？」

息があがつているのは、痛みのせい。

だから、最後まで思つてこむことは形にならなかつた。

おちりぐく、通じたはずだ。

彼は、手を離した。

代わりに、またしてもウイーーの髪を掴んでいる。

「赤い髪の女は……田代わりだ」

王太子は。

赤毛がお嫌いらしい。

彼は 王太子である。

現在の拳の王の、一番田の男子。

一番田の男子は、この世にない。

尊通りであれば、彼の母が他の女性から生まれたその子を、この世から消したということになる。

それが事実かどうかは、どうでもよかつた。

個人の名はあるが、いずれ消える。

父が死ねば、彼はマイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）と呼ばれるようになるのだから。

だから、名前など何の意味もない。

彼が物心ついた時にはもう、自分が王太子になるべき立場だったため、ぼんやりとそんなことを思っていた。

それでも、まだ今よりは子どもらしげ子だった。

「 様！ 悪いことをしてはなりません！」

幼少を後宮で過ごしていた彼を、名で呼ぶ数少ない侍女がいた。

若いがじゅうぶんと太つていて、美しくはないが明るい女性である。

母は、嗜みと企みに忙しい女性だったため、羨と愛情を彼女に受けたといつても過言ではない。

嗜みにも企みにも興味のない彼女は、後宮の中で許される限り、彼をまっすぐに育てようとしてくれた。

彼女の結婚の噂が立つた時、子どもながらに焦つたほどだ。

『大丈夫ですよ、私は、貴方様が立派に成長なさるまで、お側にありますから』

その言葉を信じた。

彼女だけは、疑う余地のない相手だと思っていた。

ある夕刻。

部屋に来るはずの彼女が来ず、彼は心配になつて探しに出た。

後宮内にある図書室辺りにいるのではないかと思つて、そこへ近づいた時。

『おやめ……下さこ……』

苦しげな、彼女の声を聞いた。

ひどい目にあつてゐるのではないかと、驚いて彼は図書室へと飛び込んだのだ。

抑えつけられた手。

乱れたドレス。

そんな彼女にのしかかっていたのは。

『後学のために見て行くか?』

冷たい目で自分を見ながらそう言った 父だった。

ヒコは、後宮。

王のための場所だ。

後宮に出入り出来る男は、王と王の子のみ。

そして。

後宮の女性は、全て王が好きに出来るのだ。

残酷な力による屈服の光景を、彼は茫然としながら見ていた。

自分に明るく優しく語りかけていたその口が、悲鳴をあげながらも決して自分に助けを乞わない様子を見ていた。

その日から。

王太子の中にある何かが、大きくねじれたのだ。

いまにして思えば。

彼は、その侍女のことが好きだつた。

都に降る初雪のように、淡い淡い初めての思い。

周囲の誰とも似つかない、爛漫さを愛していたのだ。

だが、それが壊される瞬間を見た。

力で、屈させられる瞬間を見た。

彼女は 王太子の侍女を辞めた。

後宮から、下りたわけではない。

ただ、働く場所が変わつただけ。

王太子は、その女を一度と見たいとは思えなかつた。

見る度に、心の中のねじれが大きくなつていくからだ。

しかし、彼女は特徴的だつた。

こりこりと太つた身体のせいだけではなく、彼女は後宮に余りい
ない 赤毛だつたのである。

だから、視界の端にほんの少しでもあの色が閃く度に、彼の心は
ねじくれていつた。

後宮を出る10歳になった時、彼はせいぜいしたのだ。

もう一度と、彼女を見ることはないだつと。

何故ならば、彼女は『王の後宮』の侍女だったのだから。

これから、王太子のために作られる『王太子の後宮』と、まつたく違う場所。

なのに。

15歳になつて、初めて作られた彼の後宮に 彼女はいた。

『南長』などとこつ肩書きを背負つて。

王太子のねじれた心は、その瞬間、更にねじきれんばかりにひねり上げられたのだ。

まるで、父の声が聞こえた気がした。

『好きだつたんだう? おさがりで良ければくれてやる』

彼は誰も寄せ付けない『』の部屋で、臓腑を抉られるかのように吠え、のたうつた。

父に対する憎悪が炎の柱のごとく吹き上がり、彼は『』の室内で何もかもを破壊したのだ。

それから。

彼は、いまの王太子と同じ物となつたのだ。

治世になど、何の興味もなくなつた。

こんな世界など、荒れて乱れて殺し合えばいい。

反乱を增長させ、そつなるべく敵を積み重ねて行く。

女に対する考えは、乱れただれ、力でねじ伏せられる者は全てねじ伏せた。

侍女だろうが掃除女だろうが、目に付いた女は片端から弄んで捨てる。

ただし、その中に赤毛はいなかつた。

南長以外の赤毛は、彼の後宮にはいなかつたのだ。

だが、彼女にだけは決して触れもしない。

憎んでいる男のおさがりになど、絶対に手を出さない。

それが、彼の歪んだ自尊心だった。

そんな男が。

皮肉にも、赤毛の女と出会ってしまった。

まだ幼さが残り、古い型のドレスを着ている彼女は
この世のものには見えなかつた。

少なくとも、そこだけ古い時代であるかのように思えたのだ。

夕日に燃え上がる髪はなお赤く、慎ましやかな形のドレスも染め
上げていた。

「夕日の精か？」

王太子は、ロマンティストではない。

もはや彼は、自分は何の夢も見る気もないと思つていた。

蔑むべき感情だとさえも。

そんな男が、その古めかしい光景を、ほんの一瞬だけとは言え、
夢幻のように思つたのだ。

だが。

彼女は、夢幻ではなかつた。

人間だつたのだ。

しかも。

「これは、お祖母さまが遺してくれた、大事な大事なドレスよ！」

このドレスが時代遅れというのなら、私は時代になんか乗らなくてもいいわ！」

王太子である彼に、噛みついてくる女だった。

彼は、思ったのだ。

この誰の手垢にもまみれていない赤毛の女を、抱いて滅茶苦茶にすれば、自分のねじれた心の根元にある、あの暗い記憶を踏みつけられるようになるのではないかと。

赤毛の女など、この程度のものだったのだ、と。

それは、容易なことだと思っていた。

だが、彼に『今』残されているものと言えば。

その赤毛の女が脱ぎ捨てていった一揃いの靴と、フリの公爵の恐々しい指輪の石と　右手の噛み痕だけだった。

かわいいはとじ殿

「来るのが遅くなつて、本当にすまなかつたね

カルダは、よつやくロア・アールの部屋を訪れることが出来た。

これまで、何度も機会を作ろうとしていたのだが、『氣づいたら真夜中といつ生活が続いていたのだ。

レイシェスを抜いた御前会合は、今後のロア・アールの協議で紛糾した。

2対2で、公爵たちの意見が、真つ二つになつたのだ。

ロア（北）とアール（西）は、16歳の彼女には荷が重い。すぐさま、都から補佐官を派遣すべきだと主張し、ニール（東）とフラン（南）のカルダは、これまで通り不干渉の立場を取つたのだ。

『そちら側は、異国の脅威から遠いからそんな悠長なことを言つのだ！』

アールの公爵は、唾を飛ばしてそう主張した。

だが、カルダにとつて、不穏なのはアールではなくロアだと思っている。

姉妹の母は、ロアの侯爵家の娘だ。

つながりが深い分、過干渉される可能性があつた。

それらは、レイシースの動きを縛る鎖になりかねない。

結局、会合ではそれぞれの意思をぶつけ合つだけの不毛なこととなつた。

王が、一言結論を出せば、ここまで紛糾することはなかつたといふのに。

逆に言えば、まだ王も干涉する段階ではないと思っているのだろう。

まずは、レイシースの手腕を拝見 そう言つたところか。

カルダは、フワの意思を伝え、それに対する了承は得た。

それらの手配を済ませ、ようやく彼はウイニーの元に向かひしとが出来たのだった。

気落ちしているのはよく分かつた。

ソファに座るウイニーは、前のような明るい笑顔は向けてくれなかつたのだ。

「手を……どうしたんだい？」

不思議なことに、膝に置かれた彼女の右手には包帯が巻かれていた。

カルダの右手と、同じよつて。

「あ……ちよっと……」

ウイニーは、もつと方の手で包帯を纏すよつた仕草で言つて淀む。とても、聞こにくことのよつだ。

右手。

そのキーワードに、カルダは嫌な予測が思い浮かんでしまつた。

王太子だ。

カルダも王太子自身も、同じ場所に怪我をしている。

それに、更にウイニーが加わつたとなると 犯人は、容易に想像がついてしまつたのだ。

「王太子殿下に会つたのかい？」

「あの、廊下で鉢合わせになつて……わ、私が差し出したんです。でも……こんなの何でもないですから」

「包帯」と握り締めるように、彼女は拳を作る。

その手は、脅えてこるよつては見えなかつた。

それよりも、悔しさがこじんでいるよつた気がする。

何に悔しさを覚えているのか。

正直、この時のカルダは、見誤っていた。

いや。

見くびっていた、と言つた方がいいか。

王太子に傷つけられた理不尽さを、彼女が悔しがつているのだと思つてしまつたのだ。

だから、次の言葉はカルダにとつては意外なものだつた。

「私……姉さんの……ロアアールの助けになりたいんです」

必死な顔が、ぱつとこちらに向けられる。

その目には 王太子の『お』の字もなかつた。

手の怪我なんて、本当に彼女にとつては何でもないことだつたのだと、この瞬間に思い知らされることとなる。

ウイニーが王宮に戻つたのも、こうして右手を王太子に差し出したのも。

全て、姉や故郷のためなのだと信じている目。

赤い髪の少女は、明るくてフラの娘のように見える。

だが、彼女はロアアールの娘。

寒く厳しい雪の中で、この国を守護する血を引く者だ。

それを、よつやく「」で自覚したのである。

彼女は、自分をロアアールの厄介者だと思っている節があつた。

おそらく、ウイニーの母の態度がそう思わせていたのだろう。

救いを外に向けた手を、カルダは取ろうとした。

それが、彼女のためだと思つたのだ。

「私じゃ、大した助けにはならないかもしだれなきけど……は、早くロアアールに戻りたいです」

「じりえきれないよつこ」、ウイニーはソファの上で小刻みに揺れる。

その仕草は、走りだしたくてたまらない子犬に見えた。

そう、子犬。

これから、どんな犬に成長するのか、まるで分からぬその姿。

その気配に気づいて、カルダは彼女をじっと見つめた。

正妃にしようと、心に決めたのは冗談ではない。

彼女が望み、フラにその骨を埋める所であるのならば、男として、公爵としてそうするつもりだった。

だから、カルダは慎重に聞くことにしたのだ。

「おやじく…… ウィニーの母上は、いい顔をしないだろ？」

次の瞬間の彼女の表情は、痛々しいものだった。

決意の表情が強張り、少しの間だけ時間を止めてしまったのである。

どれほど、彼女の母が娘に傷を与えていたか。

それが、伺うまでもなく知れる。

だが、ウィニーはキッと目に力を戻した。

前よりも、もっともっと強い力の瞳で、彼を見つめ返したのだ。

「でも……怖くないです。王太子殿下より！　怖くないです！」

この時のカルダは、あの歪んだ王太子に対して複雑な気持ちを抱いていた。

感謝すべきか、恨み言を言つべきか。

それが、問題だったのだ。

彼女にとつて、一番怖いものの最上位は、王宮に来て変わってしまった。

最悪を見てしまったウィニーには、もはや母はそれ未満の存在に

なつたのである。

「ウイニー……私の正妃の話は、一度白紙に屎そう。思つ存分、口アールに呟くすといい」

結局、カルダは心の中で、王太子に恨み言を囁ひこじした。

彼女を変えたのは、自分ではなかつたのだ。

その事実だけ取つても、男として面白いものではなかつた。

言葉に、ウイニーはまつとした。

そして、一瞬赤くなつたかと思つと、その直後、急転直下で真つ青になつていつたのである。

「おじ様……公爵のおじさま……わ、私

よひやく、自分が向かおうとしている方向が、フランの正妃と同じところにはないのだと気づいた顔だつた。

違うのだと。

必死な顔に涙をためて、ウイニーはその身を一人の間のテーブルの上まで乗り出していく。

彼女が、よその国に嫁いだと思つた気持ちが嘘ではなかつたことくらい、カルダにだつて分かつていた。

ただ、いまの彼女に、それよりも重要なことが芽生えてしまった

のだ。

初めて故郷を離れたことで、よりやく外から客観的に見る事が出来たのだろう。

「ウイニー、故郷のために戦いたいと思つ気持ちは、とても素晴らしいものだ。私のかわいいはとこ殿……私は貴女を誇りしく思つよ」

「『めんなさこ』、『めんなさこ』……おじ様。せつかくおじ様が……」

ひつゝとしゃべつあげる彼女の鼻の頭は、顔色とは正反対に真つ赤になつていく。

「私の正妃となる未来が、なくなつたわけではない。ウイニーなら、いつでも歓迎だよ」

手の中に入れようと思つていた小鳥が、飛び立つていく感覚を、カルダは少し寂しいものとして受け入れたのだった。

二つの派閥

レイシェスがロアアールに駆け戻った時 そこは既に、最悪の状況が出来上がっていた。

二つの派閥が出来上がつて、睨みあいを続けていたのだ。

ひとつは、軍派。

これまで、彼らは父の従順かつ忠誠心厚い集団だった。

この領地を、今まで守りぬいて来た誇りもあり、彼らは今回の難問もまた、守護の姿勢は変わらない。

問題なのは、二つ目。

母派だ。

彼女には、政治的知識はない。

だから、軍を扱えるはずなどなかつた。

そこで、母は最もやつてはならないことをやつてしまつていた。

己の故郷であるロアから、勝手に弟を呼び寄せていたのだ。

しかもレイシェスの叔父である彼は、自分一人ではなく、幾人かの政治に携わるものも同行させていた。

ロアの政治を、ロアアールでやりつけていたのである。

これに、軍派は激怒したのだ。

当然である。

ロアアールの血が一滴も入らない者に、誰の許可もなく勝手に政治をさせようとしていたのだから。

更に、ロアに早馬を出し弟を呼ぶという、普通ならばあり得ない行為をしてしまったことが大問題だった。

どんな間者が見ても、公爵家に何かあつたと教えるようなものではないか。

みつつ田は、これはレイシェスが想定していた派閥だった。

それは、公爵家の血を引く親戚たちである。

父が死に残された直系は、娘一人だけ。

しかも、母がひっかきまわしている事態を見て、とても安心して任せではおけないと思ったのだろう。

結局、母はロアアールを危険に陥れながら、軍と親戚の2面と、ぶつかる真似をしていたのだ。

そんな紛糾する会議のど真ん中へ、レイシェスは帰りついたのである。

「ただいま戻りました」

バタンと広間の扉を開けると、皆が一斉にこちらを向く。

半分は驚き、半分は顔を顰めているのが分かつた。

「レ、レイシェス！ そ、その頭はどうしたの！？」

やつれた姿の母は、立ち上がりながら金切り声をあげる。

艶のなくなつた栗色の髪に、やせた身体。

額に横皺をいく筋も刻みながら、大きな緑の瞳を見開いている。

その瞳には、今すぐにレイシェスを責めたてたいという心が、覗きこむ迄もなく浮かんでいた。

「人目を忍ぶために切りました」

脱ぐ暇もなかつたマントを侍女に預け、男服のままで彼女は議場に進み出る。

母、ロアの叔父、見知らぬ男数人、軍の将軍が三人、そしてロアアールの親戚たち。

見まわして、面子をまず目に焼き付けた。

途中で立ち寄つた軍の詰所で、このことは耳に入っていたが、本当にひどい状況だと噛みしめる。

せつかく人目を忍んだ事を、母が無碍にしたことに怒りを覚えていた。

「何という愚かなことを… 伸ばすのに、またどれほどかかると思つていいのですか！」

金切り声をあげる母に、レイシスは「ああ」と胸が詰まる思いを抱く。

ロアールの危機ともいえるこの状況で、そしてこの場で、母が言えるのはこの程度なのだ。

自分を産んでくれた人である。

愛を注いでくれたことは、間違いはない。

だが。

それとこれとは 別だ。

「母上とロアの叔父上様。あとロアからこいつしゃつた方々……全員御退出お願い致します」

レイシスは、言つた。

男の恰好をしたといひで、男になれるとは思つてもいない。

声も高いし、身体つきも隠せない。

けれど。

「……」は、レイシエスが踏ん張るべきところだった。

ロア・アールの公爵になるためには、『……』で自分の足で立たねばならないところだったのだ。

もしかしたら、自分が第4の派閥となってしまうかも知れない。
けれど。

ロア・アールの未来を賭けたこの場に、ロアの政治は必要ない。
それだけは、間違いないと確信していた。

「は、母に向かつて、な、なんてことを……」

母は、卒倒せんばかりの大声をあげる。

大きく振られた頭のせいで、栗色の髪が幾筋も落ちるほどだ。

「レイシエス・ロア・アール・ラットオージェンの名において、『……』退
出をお願い致します」

ロア・アールの公爵に、なるのだ。

そのための勉強はしてきた。

そして、勉強だけでは公爵などには、到底なれないことも都でよく思い知った。

「次期公爵がおっしゃっているのだ……従つべしであらうな

重々しく、老将軍が口を開く。

「それが当たり前の事だ」

ロアールの親戚筋も、好機とばかりに同意する。

「私は、ここを一步も離れませんわ！」

母は。

椅子にしがみつゝにして怒鳴り散らし始める。

この場の誰の目から見ても、それは愚かな行為だった。

ただでさえ強情な気性が、父とこうじてを失つて、精神的に疲弊したせいだろう。

そんな自分の行動を、まったく冷静に見ることなど出来ないでいるのだ。

「母上は、疲れておいでです……部屋までお連れしてあげて」

扉の前に控えている侍従たちに、レイシエスは一言を投げかけた。

「レイシエス！」

間髪入れず、厳しい叱責の声で名が呼ばれる。

心の根に染みついて来た、母の存在の大きさとこれまでの記憶が、いまにもレイシェスの足元を崩してしまいそうだった。

女物の靴でなかつたのが、よかつたのだろうか。

レイシェスは、ブーツの踵で床をしつかりと踏みしめていた。

都を出る時の決意が、今も自分を後押ししてくれている。

髪に、未練がなかつたわけではない。

美しいドレスに、未練がなかつたわけではない。

だが、レイシェスは王都で、『現実』に触れてきたのだ。

王や王太子、フランの公爵に他の公爵たち。

優しさなんて、ほんの一握り。

これから、茨の嵐が吹きすさむ、砕けた硝子の道を歩むこともあらう。

そんな現実の、ほんの入り口を目の当たりにしてきたのだ。

侍従たちが、遠慮気味に母に近づき、容赦なく扱われているのを見つめながら、レイシェスは微動だにせずにいられた。

「姉上……出来じょう」

ロアの叔父も、さすがに分も理もない自分たちが、このまま議場

にいられるとは思っていなかつたのだろう。

弟に諭され、つよい母は悔し泣きで泣き崩れた。

そんな身体を、侍従たちに抱えられるよう連れ出されたいく。

少しづつ遠くなる、母の涙混じりの恨み言が、よつやく聞こえた
くなり、レイシエスはほつと吐息をついた。

「お嬢がせして申し訳ありません、臣わせ……では、始めましょう
か」

いつもの癖で。

肩あたりの髪を払いかけた自分に気が付いたレイシエスは、一度そ
の指先を見詰めた後　　一番奥の席に向かったのだった。

何だつていの

ウイニーは、帰郷の途についていた。

謁見会の日程は、滞りこそあつたものの全て終了したのだ。

往路と違つてゐるのは、馬車の中にいるのが彼女一人だ、ということ。

都にいた時間は、とても短かつたはずなのに、とても長かつたよう

に思える。

フラの公爵やスタッフとの出会いは、とても素晴らしいものだつた。

公爵からは、姉宛ての手紙を預かつてゐる。

スタッフとは、最後まで顔を合わせることはなかつた。

大事な仕事を頼んだと公爵が言つていたので、忙しくなつてしまつたのだろう。

あの二人と一緒にいる時が、一番幸福だつた。

思い出すだけでも、胸の温くなる時間。

だが、これからウイニーは不幸の場所に戻るわけではない。

そして、彼らとも永遠の別れではないのだ。

謁見会は、2年おき。

手紙だけではなく、また2年後に会えるかもしれない。

その時に。今年のようなただの小娘ではなく、もつといい自分になつて、二人と再会したいと思つたのだった。

だが、王宮に行くといつことば。

ウイニーは、右手を見た。

白い包帯に覆われたそこは、王太子に噛まれたところ。

また、彼と会つところである。

2年後には、ウイニーのことなど忘れてくれていればいい。

そう、ため息をつきながら、痛みを残す手を見つめるのだった。

ウイニーが、ロアアールの屋敷に帰りついた時、想像していたこととしていなかつたことの一つが起きていた。

想像していたことは、姉が陣頭指揮を取つて、ロアアールを守るために東奔西走していたこと。

まだ寒いこの地で、黒いマフラーを閃かせ、あの姉が本当に走っていた。

動きやすさを重視した、ズボンにブーツとこづ出で立ちだ。

「おかえりなわご、ウイニー」

いまから出かけると言わんばかりの動きで、一声だけかけて姉が玄関から従者と共に飛び出して行こうとする。

「あ、姉さん……私に手伝えることあるーー?」

慣れない姉の姿を、ぽけーっと見送りつつしてこの自分に気づいて、慌てて呼び止めた。

ブーツの踵が、一瞬止まる。

「ありがとう。帰つてから話をしましょー」

一度振り返り、姉は嬉しそうに微笑んだ。

短い髪で少年のような出で立ちをしてはいるが、その笑顔は今までと変わらない女性のものだった。

それだけ言い残すと、姉は身を翻す。

ウイニーは、わが身を振り返つてみた。

旅路だつたため、シンプルな祖母のドレス姿だ。

わ、私もズボンにしようかな。

「これでは、とても走りまわれそうにならないからだ。

確かにクローゼットに、ほとんど着ないまま押し込まれている乗馬用の衣装があつたはず。

そう記憶を呼び起こし、ウイニーは急いで部屋に戻りうつとした。

「レイシエス！ お待ちなさい…」

だが。

そんな彼女の平和な希望は、軽く打ち砕かれる。

母が一階から、姉を追つて出てきたからだ。

レイシエスは、とっくに玄関を飛び出した後だとこいつのこと。

そんな母と、ウイニーはモロモロ泣かせることになる。

うわあ。

心の準備は、してきたつもりだった。

だが、こぞりひして母と向かい合ひ、心が縮みあがりそうだ。

都へ行く前より瘦せて顔色の悪い母は、ウイニーを見つけて驚いたように足を止めている。

そして、だんだんと表情を険しいものへと変化させていく。

よくある光景だった。

「きなり会うと、まず必ず母は驚くのだ。

赤毛が、何故この地にいるのか　どうして毎回それに驚けるのか、ウイニーには逆に不思議なほど。

そして、その赤毛を産んだのは自分であるのだと思へ出し、険しい表情になるのだろう。

落ちついで。

ウイニーは、自分にそう告げた。

田の前にいるのは、王太子だと思えばいいのだ、と。

彼にいま、自分は睨まれているのだ。

「ただいま都より戻りました……」

王太子に、儀礼的な挨拶をすると同じこと。

ウイニーの脳内では、王宮の廊下が流れていった。

この後、彼は不作法なことを言つたりしたりするかも知れない。

「お……お前など、戻つてこなければよかつたものを

金切り声は、廊下をつんざいて飛んでいく。

ぶるぶると言葉も身体も震わせ、変な汗さえ浮かべた王太子いや母は、明らかなる心の病が見てとれた。

その病的な剣幕に、侍女たちも近づけないでいる。

ウイニーは

ひとつ深呼吸をした。

「戻つてまいりますよ」

前で組んだ両手に、ぎゅっと力を込める。

胸が、どきんどきんと跳ねるのを抑えるには、とにかく力を入れていないといけない気がしたのだ。

「だつて、私はロアアールの人間ですもの」

髪の色が 何だつていうの。

乗馬服を着て、上から長いコードを羽織る。

ブーツに足を押し込んで、おたまじの悪い赤毛は後ろでしばりつける。

そんな格好で鏡を見たウイニーは ちよつとがっかりした。

そこにいたのは、きつととした貴族の少年とこつよつ、馬の世話をする坊や程度の子がいたからだ。

やはり、姉のよつにはいかないのだと、鏡の中の自分を見ているとよく分かる。

姉妹揃つてこんな恰好をしているを見られたら、あの母が興奮の余り卒倒しそうだ。

こまの母なら、本当にやうなつうで冗談にならないが。

そんな母への心配も、彼女はやめるこじとした。

何かしじよつとするも、母がじつ思つた。

それをセットで考へてしまつ癖が、すっかりついてしまつていてる」とが、いい」とは思えなかつたのだ。

これからは、自分で判断しなきや。

そうしてウイニーは、ロアールの危機を越えるために、頑張ることを始めたのだった。

『想像していなかつたこと』が、つこだそこまで来てこることも気づかずだ。

ウイニーが姉から『えられた仕事は、軍とのやりとりの手伝いだつた。

侯爵家とは別に軍舎があり、レイシス自身が頻繁に行き来するのが難しいため、その代行をウイニーが行い、話を聞いたり書類を預かつたりするのだ。

まさか、いきなり軍に関わることになると思つていなかつたが、姉の説明で納得もしたところがある。

姉は、これまで軍と関わりがほとんどなかつた。

知識としても偏つてゐるといつ。

内政の引き継ぎと軍の掌握の両方を、姉はやらねばならないのだが、寝る間を惜しんでも両方同時に全てを行つのは難しいため、ウイニーに補佐をお願いしたいというのだ。

特に苦手とする、軍方面を。

そつ姉に頼まれたら、やつたことのなことだからと黙つて嫌とは言えない。

大体、どんな仕事を頼まれたといひで、だつせやつたことはないのだ。

それなら、姉が苦手な分野を頑張るのもいいのかもしれない、それを請け負つたのである。

ウイニーは、その手始めとして、馬術を思い出すことにした。

軍舎との行き来に、いちいち馬車で乗り付けるわけにもいかないし、徒步だと無駄な時間がかかる。

最低限の護衛だけで行き来するには、馬が一番都合がよかつた。

ズボンをはいた甲斐も、あるといつものだ。

「お嬢様……乗り頃に育つてますよ」

厩舎から連れ出されてきたのは、鹿毛の毛並みのいい牝馬だつた。

額に流れ星を持ち、前足だけ靴下をはいたように曰つた。

3年前に生まれた馬を、ウイニー用として父親から授かっていたが、自由に出かけられない環境だつたため、ほとんど乗る機会がなかつた。

「久しぶり、『靴下』」

小さく震えた声を出す自分の馬の鼻を、彼女は優しく撫でた。

彼のことなど覚えてもないようすで、ふいと顔をそむけられる。

本当は、馬の名前は『流星』とつけたかった。

けれど、余りに優しく消えてしまいそうで、ウイーーは彼女に『靴下』と名付けたのだ。

冷たい雪の日でも、自分を助けてくれるよう、と。

「よい……しよう

助けも借りて、ウイーーは『靴下』の背に乗る。

久しづりの馬上は、何もかもを高い位置から見せてくれる。

より冷たい風が顔を撫でる洗礼を、首を竦めて受けたが、ウイーーは馬術のおさらいをし、カンを取り戻した。

もともと、家の中で行儀作法の勉強をしていくよつけ、こちらの方が性格的には合っている。

いままでは、好きなことをする自由がなかつただけ。

いや。

なかつたと思いこんでいただけ。

ウイーーは、自分を縛っていた鎖を振りきるよつけ、一人の護衛

と共に、馬を駆つて軍舎へと向かつたのだった。

「これは、ウイニーお嬢様」

三人の将軍は、みな年齢が高くがつしりした男たちだ。

一番若いアーネル将軍が、55歳。

見事に毛のない頭に、毛先が跳ね上がった鼻髭が特徴で、分厚い筋肉の上に一番背が高いため、迫力にかけては将軍随一だろう。鉱山夫の息子で、一兵卒からの叩き上げで将軍になつた男で、非常に熱い男だと言われている。

一番長い将軍位についているのが、60歳のハフグレン将軍。

白い髭はもみあげから頸、鼻までつながる豊かなもの。その身には、随分と遠くはなつたが公爵家の血も入つてゐる、由緒正しい家柄だ。智謀にすぐれ、他の二人の将軍に自然に筆頭として扱われている。

一番しづとい将軍と言つてゐるが、61歳のレーフ将軍。大怪我を負い、三度瀕死をさまよいながらも生還した経歴を持つ。左腕はないが、両足のみで馬を操りながら大斧を振るう猛者だ。

強固な防衛を以とするロアアールらしい、どつしりと腰の据わつた将軍たちだ。

その三人と参謀職の人間が集まる部屋に、ウイニーは初めて入った。

皆が、一斉に立ち上がりて敬礼する。

視界も部屋も、むせくるしく大きな男たちのせいで、いっぱいになってしまった気がする。

「ロアールの危機に、帰りが遅くなつて申し訳ありません。軍議の内容を持ち帰るよう姉に申しつかっていますので、終わりまでここで待たせていただきます。みなさんば、どうぞ気になさらずに軍議をお続け下さい」

彼らの目からすれば、自分はどれほど小さく頼りない人間に見えるだろう。

覚えて来た言葉さえ、たどたどしく弱いものに思えてしまい、ウイニーは言葉の後半から頑張つて声を張つた。

再び軍議は再会されたが、基礎のない彼女に分かるのは単語の断片だけだ。

静かに、しかし重々しく言葉を交わし合つた将たちの中で、自分ひとり浮いている気がした。

軍議の内容は、書記によつて記録が取られている。

最後に、内容に相違がないか、その場の最高位の者（大抵は将軍）がサインをし、公爵家に届けられることになる。

届けるだけなのだから、軍の人間でも本当は構わない。

実際、これまでそうだったのだ。

しかし、今は平時ではない。

ウイニーに託されたのは、ただの配達員としての仕事ではなく、詳細を正確に素早く知ろうとしている心のあらわれであり、なおかつ、常に公爵家が軍人たちと心をひとつにしていこうという意思を示すものでもあつた。

母が政治に口出しをして、内部分裂を引き起こしていたためにできた亀裂を、修復する意味もあつたのだ。

軍議の1時間。

これほど静かに、ただ座っていたのは、ウイニーにとつては初めてだつた。

あくび一つ出来ない緊張感だけが、彼女をずっと取り巻いていたのだ。

「では、お願ひ申し上げます」

三将軍のサインの入った軍議の記録は、ハフグレン将軍自らの手で、皮袋に入れられウイニーに渡される。

「はい、確かに受け取りました。必ず届けます」

その袋を抱えて軍舎を出た時。

ウイニーは、自分の喉がカラカラになつていて、それを、よひやく氣づけたのだった。

想像していなかつたこと

レイシェスが妹につけていた護衛の一人は、軍の下つ端ではない。

彼女と軍とをつなぐ、軍の補佐官の一人である。

ウイニーと共に軍議に同席し、持ち帰つてきた書類の補足説明をしてもらつたのだ。

妹からは、軍議全体の雰囲気を聞ければいい。

公爵家の人物として、どう感じたか。

それは、軍の人物には決して語れることなのだから。

「みんな厳しい顔で話をしてたけど、落ちついていて心配ないに感じたよ」

妹は、一生懸命その場の空気を伝えてくれた。

既に、レイシェスが帰つてくる前に、本格防衛の初期配置はある程度終えられていた。

さすがは、老将たちだ。

公爵の采配なしで出来うる限りのことは、何の指示を出すまでもない。

レイシェスは、妹の労をねぎらい、代わりに補佐官を入れて詳細

を聞いたとした。

「姉さん……」

しかし、妹は出て行こうとましまなかつた。

少し戸惑いがちではあるが、その瞳をまつすぐにレイシエスに向け、彼女はこう言ったのだ。

「私、端っこで邪魔をしないから、聞いていてもいい？」

決意のまなざしだ。

少し前。

ほんのちょっとの隙間に、妹は言った。

『フラにお嫁に行くのは、やめにしたから』

刹那の彼女の気持ちを、きっとウイニーは知ることはないだろ？

温かい水が、自分の身の内を満たして行く感覚。

レイシエスは、独りで戦うつもりだった。

この寒い地を精一杯、守り抜く。

そんなレイシエスの冷たい手を　妹は取ってくれたのだ。

これまで、二人は姉妹であった。

だが、考えはまるで違つし、ロアアールの未来についても、違う方向を向いていた。

そんな妹の目が、こちらを向いたのだ。

大変な『いま』という時間だけでなく、この地のために尽くしたいという気持ちが、レイシエスに届いたのである。

初めて、姉妹で同じ方向を見たのだと、彼女は深く感じた。

独りではない。

同じ血を持ち、同じ未来を見る一番近い同胞を、レイシエスは初めて得たのだ。

そんな決意を持った妹を、どうして執務の場から追い出すことが出来ようか。

学ぼうと、しているのだ。

自分がしている仕事が、一体どんな形をしているのか。

それを、己の血肉にしたいとウイーーは思っている。

レイシエスは、それを心の底から嬉しいと思つた。

姉妹で手に手を取つて、これからロアアールを支えることが出来る。

そんな明るい希望が、彼女の心の中に芽生えた　ところの」。

新たな問題は、その翌日には発生してしまったのだ。

「何と……こま、おっしゃったのですか？」

レイシエスは、震えそうになる唇に力を入れて押しとどめた。

彼女の執務の部屋にやつてきたのは　母だった。

忙しいという理由で、出来るだけ早く出て行つてもいいおつと思つていた矢先、彼女は恐ろしい話をしたのだ。

「ですから、ウイニーを王太子の側室としてあげます、と言つていいのです」

何故、レイシエスが茫然としているのか、その理由さえ理解できないという風に、母はわずかに首を傾けながら、もつ一度同じ言葉を繰り返した。

田元はすっかり落ちくぼみ、そこには妖しい生氣とは違つ光をたたえながら、母はにこりともせずに言つ。

「突然、どうしてそんな話になつたのですか？」

反射的に、声を荒げていた。

今までの自分からは、信じられないほどの強い語調を母にぶつけ
る。

「の場にいるのは、母と自分とそれぞれの侍女のみ。

そんな閉鎖された内輪の空間で、レイシエスは即座に席を立ち、
入口にいる母の元へと詰め寄つたのだ。

「まあ、何とはしたない言い方をするのでしょうか。レイシエス、あ
なたにはまだ作法の先生が必要なようですね」

「お母様、わたくしたちはラットオージェン公爵家のの人間です。先
祖代々の公爵の子女は、ただの一人も王族へ嫁いだ事はありません。
この誇り高き風習を破るおつもりですか？」

次元の違つ、まったく噛み合わない言葉を、お互にぶつけ合つ。
いくらかの不毛なやりとりの後、ようやくにして母は次のように
白状したのだ。

「先日、王都からその皿の書状が届いたのです。お前は忙しそうだ
つたので、私が了承の返事をお送りしておきました」

「の言葉を聞いた時。

レイシエスの頭の中で、幾本もの細い何かがちぎれる音がした。

ブチブチブチ、と。

ヒステリックに絶叫しなかつた自分を、この時ばかりはほめてや
りたかつた。

「なんて……」と、「

代わりに襲つてきたのは、めまいを伴う激しい頭痛。

「何を困ることがあるの？ どうせあの子がロアアールにいても、
何の役にも立たないでしょう？ アールに嫁入りさせようかと思つ
ていましたけれど、この際、王族でもいいでしょう」

「何の罪悪感も含まされていない母の言葉を、レイショスはゆっくり
と追いかけた。

その先に、母がいる。

父を含めた先祖代々のロアアールの伝統に、何の価値も見出して
いない女性。

しかも、公爵の地位を受け継ぐレイショスに、一言の相談もなく、
だ。

想像だにしていない出来事を前に、彼女はいつまでも茫然とほし
ていなかつた。

側に駆け寄る侍女に、こう言った。

「侍従らを呼びなさい。母を自室に戻し、そこから決して出さない
よつこー。」

レイシエスは、ついにそう決断したのだ。

重要な会議の席に入れなければ、その内おとなしくなるだらう。

そう思っていた自分が、いかに愚かだつたかを。

「レイシエス！？ 何を言つてこらのーー？」

「お母様がなさつたのは、ラットオージョン家に対する背任行為です。沙汰があるまで、決してお出にならぬようーー。」

入ることを許された数人の侍従らは、おうおおと母とレイシエスを見比べる。

「連れてお行きなさい」

そんな侍従らに、レイシエスはピシャリと言つつけた。

鞭を振るわれたかのように、彼らは抵抗する母を執務室から引きずり出したのだ。

遠くなる自分への恨みじとの声を聞きながら、彼女は頭を抱えた。

想像もしていなかつた、最悪の事態だ。

「の忙しい時に、何でこ�をしてくれたのか。

よろめく足を叱咤しながら執務席まで戻ると、レイシエスは力尽きてそのままどすんと座り込んでしまつた。

「召集?」

ウイニーは、格闘していた本から視線を上げた。

「はい、緊急の会議だそうです」

彼女についてくれている軍の補佐官は、静かにそう復唱した。

緊急の会議。

いい響きではない。

何か大きく事態が動いて、姉だけでは判断できなくなってしまつたのだと、その言葉は語つているのだ。

そして。

その会議に、自分が呼ばれていることに、身が引き締まる。

姉が、期待をかけてくれている そう感じた。

だが。

それは、少し意味合いが違つたのだった。

親族と、筆頭のハフグレン将軍のみが侯爵家に召集されていた。

この時期、防衛に奔走している将軍全員を、ここに集めるのは大変なのだろう。

議題は、『公爵夫人の処遇』だつた。

公爵夫人、それは母のことだ。

会議で大暴れした件だろうかと、ウイニーは前に聞いた話を思い出していたが、そんな悠長な話ではなかつた。

「母が、妹を王太子の側室に欲する書状に、相談なく了承の返事を送つていました」

目の前が真っ暗になるとは、のことだ。

上から下まで大変なロアアールに、そんな悠長な書状を送つくる王族も王族だが、勝手に答えた母も母である。

しかも、あの王太子の側室に、だ。

これぞまさしく、『想像もしていなかつた』事である。

頭を軽く振つて意識を取り戻すと、ウイニーははつと周囲の様子を見た。

親族もハフグレン将軍も、苦々しい表情を浮かべている。信じら

れないと、頭を左右に振つている者さえいる。

だが、同時にウイニーはホツとしたのだ。

姉の出した議題が『公爵夫人の処遇』だと、最初に知らされたいたおかげである。

母のこの身勝手な所業を称える意味合いは、そこにはない。

むしろ、逆。

すなわち、姉はこの事態により、母を処断しようと考えているのである。

あの母を。

議場に召集されている者たちの表情を見ても、それは明らかだ。誰ひとりとして、ウイニーが王太子の側室に上がることを望んでいる者はいなかった。

「母にはこの屋敷を出て頂き、南の静養地にて隠居させよ」と考えていました

言外に、公爵夫人としての全ての権利を剥奪すると含んでいる。

これまでの母の行動は、目に余るものがあったのだろうが、これがどどめとなつたのだろう。

誰ひとりとして、姉の言葉に異論をはさむ者はいなかつたからだ。

「の家から、母が出て行く。

それは、ウイニーにとつて驚天動地に等しいことだつた。

母は、永遠にここに住むだつと彼女は思つていたし、普通ならばそれが揺らぐことはなかつただらう。

しかし、あの冷静な姉がこんな決断をしてしまつほど、ひどい状態になつてゐるのだ。

正直に言おひ。

ウイニーは、姉の決断が 嬉しかつた。

実の母を追い出すと言われて喜ぶ娘など、親不孝者以外の何物でもない。

しかし、姉が初めて自分を守つてくれたのだ。

これまで、二人は母の支配下にあつた。

その支配の鎖が、ついに断ち切られたのである。

それを、どうして喜ばずにいられよつか。

そんな姉の愛に応えるには 姉とロアアールに頼すべししかない。

ウイニーは、さつ心に強く決めたのだ。

「都には、私から母の書状の取り消しを、懇意に送ることとしたまゝ

満場一致で母の処遇が決まった後、姉はウイニーの方を一度見えてから、しつかりとした声音でそう言った。

『あなたを、王太子の側室に送つたりしません』

そんな頼もしい声が、聞こえてきそうだ。

それで、全てが丸く収まつたかに、見えた。

親族でりながら、軍属でもある者が手を上げて、発言を求めるまでは。

「しかし、我々は初期防衛体制の完了後、公爵閣下の死を都に正式に知らせると同時に、イスト（中央）に援軍を要請する予定のはずです」

「これまでの話は、ウイニーも把握している。

ほんの少し前に、軍の補佐官から説明を受けていたのだ。

援軍を要請したところを内外に示すによつて、異国に対する牽制をするのだと。

「その事も考へると妹君の件の返事は、すぐに断られたのも、しばし濁して延ばされたらいががかと」

要することをひとつと断つてしまつと王が不快に思い、援軍をしぶられる可能性があるので、ロアアールが落ち着いてから正式に断る方

がよいと進言しているのだ。

もつともな話をしているよつて、ウイニーにはいこ策には思えなかつた。

何故ならば。

王太子という人間を、間近で見たからだ。

向こうは、こちらの内情を知っている。

なのに、父が死に、地域の安定に奔走しているこんな大変な中、側室などといふ抜けた書状を送りつけてきたのだ。

絶対、わざとだとウイニーは確信していた。

自分がそう思つたから、聰明な姉ならもつと強くそれを感じているに違ひない。

ぱつと姉の方を見ると、彼女はゆっくりと机の上でその細く長い指を組んだ。

「それとこれとは、別です」

凛と、声が議場に響き渡る。

「妹が側室に上がるうが上がるまいが、この国にとつてロアアールが防衛の要であることにには搖らざりません。ロアアールが崩れば、この国の安寧など決して訪れないのですから」

幼稚な嫌がらせで、國を滅ぼす馬鹿などいない。

誰もが異を唱える」とのない論理に、室内は水を打つたように静まり返る。

そんな中。

ウイニーの脳裏に、あの王太子がよぎった。

幼稚な嫌がらせで國を滅ぼす馬鹿。

ウイニーの中では、彼がその形容詞に一番ふさわしい男だった。

因果

「隣国からの侵攻が、始まりました」

母についての処理が終わるや、レイシスの元に軍部からそう伝令が入った。

都に、四つの書状を送つたばかりだ。

一つは、母の返事の訂正。

二つは、父の死の正式報告。

三つは、援軍の要請。

最後は、レイシスの公爵就任の認可を求めるもの、だ。

「分かりました。皆に喪章をつけるように通達して下さい

もはや、領民にも父の死を隠す必要はない。

民も軍人も、みな喪章をつけて、父の死を存分に悼むのだ。

ただし、軍人はその手に剣と盾を持ったまま。

黒い腕章をしたロアアールの兵士たちは、その出で立ちのままで敵と戦うのである。

正午には、全ての町で悲しい鐘を打ち鳴らす手はずは整っていた。

その鐘が鳴つた後、やつと父を埋葬することが出来る。

山の雪を集め、その中で凍つたまま眠る父を。

本来、公爵であれば壮大な葬儀が行われて然るべきだ。

他の地ならば、おそらくそうだろう。

しかし、ロアアールの公爵の死は、外交的駆け引きの重大な材料でもある。

悠長に葬儀に時間をかけられないのは、この地の公爵になつた日から、先祖全てが理解していることである。

父も、そんなことで恨み言など言つことはないだろう。

そして、いつかレイシエスもそうなるのだ。

母は既に、この屋敷にはいないため、ウイニー一人で見送ることとなる。

初めての戦い。

まだ、軍を掌握するという意味では、レイシエスもウイニーも知識・人徳の両方が足りていない。

そんな中、不安にならずにいるのは難しいだろう。

だが、妹はいま懸命に勉強をしてくれている。

軍事方面の家庭教師を、つけて欲しいとまで頼まれたのだ。

幸い、護衛の補佐官が、その任を買って出てくれた。

いま、常に妹に随行しているだけに、最適任者だろう。

苦手なものひとつを、妹が請け負ってくれたことは、レイシエスの不安をほんの少し軽減してくれる。

これをきっと、『心強い』というのだらう。

足りないものを、姉妹で必死に埋める。

問題は、時間の神がそれを許してくれるかどうか、だ。

いま現在、侵攻が始まつたのは事実。

前の侵攻を知る將軍たちが揃つているとは言え、この世に絶対はない。

こちらが必死なように、向こうもまたロアアールを突き崩して、鉱脈豊かなこの地を手に入れようと命を賭けて侵攻してくるのだ。

カーン、カーンと領地に鐘が鳴り響く。

正午だ。

父の死を告げる鐘の音だ。

レイシェスが、音を見ようと窓の方を向きかけた時。

せわしないノックに意識を取られる。

「火急の書状を、お届けに上がりました！」

鐘が鳴り終わらぬ中、それは届けられた。

これは、何の因果だらうか。

レイシェスは、書状を握りしめたまま、もはや鐘の音もしない静かな空を見上げた。

過去、ロアアールを作つてきた人たちも多く関係しているだらうし、彼女が都へ行つたことも関係があるだらう。

勿論、ウイニーも関係しているし、そう考へれば、あの母や父、祖母もその因果に入つている。

書状の差出人は、カルダ・フラ・タータイト。

フラの公爵だ。

王の認可も入つてゐるその書状には、フラからの援軍三千が、すでにロアアールとロアの境界にて、待機中である旨が書かれていた。

援軍を率いているのは　スタファ・フラ・タータイト。

「の書状に書かれている事務的な文字は、レイシェスに實に多くの事を考えさせた。

これほど早く、フラから援軍をロアまで移動させるには、相当な時間がかかる。

王の裁可も、本来であればこんなに早く取ることは出来ないだろう。

ということは、フラの公爵はまだ王都にいる内から、この手はずを整えたに違いない。

レイシェスが、ロアアールに帰った後すぐに、御前会合で進言したとしか思えなかつた。

そしてスタファ。

彼もまた兄の命によつて、すぐに動いたのだらう。

過去のロアアール遠征の時のよつて、騎馬隊のみで編成したに違いない。

ああ、ああ。

人の顔が、レイシェスの脳裏を巡る。

フラの公爵、スタファ、祖母、ウイニー。

そして、頼もしいロアールの将軍たち。

戦いに、絶対はないとレイシェスは分かっている。

なのに、どうしてか。

心強い味方のおかげか、ないはずの『絶対』がそこにあるように思えてしまうのだ。

レイシェスは、入り口に控える伝令に向かって、ゆっくりと振り返った。

「フランの援軍の、入領を許可します」

喪章の数を　増やすなければ。

赤い援軍

炎が走る。

小高い丘の上から、ウイニーはその光景を見降ろしていた。

赤い鎧と兜の騎兵たちが、整然と、そして力強く馬を駆つていて。街道を長く流れてゆく姿は、火を噴く山から流れ出る溶岩のよう見えた。

白と灰色の多い地であるロアアールには、余りに眩しそうな色だ。あの赤い軍隊を率いているのが、スタッフだという。

姉に聞いたその言葉は、最初は信じられなかつた。

だが、同時に理解もしたのだ。

どうして、都で彼と会う機会がなくなつたのか。

あれほど構つてくれた人だつただけに、挨拶もせずに別れるのは寂しい気持ちがあつた。

しかし、彼はそんなウイニーの感傷のはるか上を走つていたのである。

ロアアールを、助けるための援軍を準備する。

勿論、それはフラーの公爵による指図なのだろう。

そして ウィニーは姉より先に、彼と再会したのだった。

「スタッフア兄さん！」

「おつと、ウイニーか。随分勇ましい恰好だな」

ウイニーは笑顔、スタッフアはニヤッと笑った顔で向かい合ひ。

軍舎の入口で、彼女は隻腕のレーフ将軍と彼を出迎えた。

嬉しさを隠さず近づくウイニーを、一度見直すように顔の向きを整えて、彼は大げさに驚いたような声をあげた。

勇ましい。

乗馬服だったウイニーは、ズボンの替えも少なかつたこともあり、灰色の軍服を着ていたのだ。

厚めの生地に、重めのブーツ。

本来は、この上に軍の青いコートを羽織るのだが、ウイニーは自分でも信じられないほど青が似合わないため、コートはなしだった。

ただ、これでは従者と勘違われるおそれもあり、はつきりと区

別するために、深い緑のスカーフを首に巻いていた。

後ろから見たらスカーフは分からぬはずだが、これまでウイー
ーはただの一度も従者と勘違いされたことはない。

おそらくそれは　この髪の色のおかげだろう。

ロアアールには、ほとんど見ることのないオレンジがかつた赤い
髪。

公爵家には、赤毛の娘がいる。

その話が、有名だったのかどうかは知らないが、その髪を見るや、
皆が道を開けてくれるのだ。

そんなウイニーの前に、赤毛の男が立つ。

彼だけではない。数多くの赤毛の兵が、ロアアールに入ったのだ。

今後、どちらの軍の者も、彼女のこととは赤毛と軍服の色の一種類
で見分けなければならないだろう。

「タータイト公爵名代閣下、遠方よりの援軍、痛み入ります」

二人の会話がひととおり終わると、レーフ将軍が恭しく挨拶に進
み出た。

「レーフ将軍ですね……噂はかねがね。先の防衛では、ご活躍だつ
たそうですね」

「負け戦が得意な将とこつものは、活躍してはならぬものですよ」

スタッフの言葉は、重々しく返される。

先の防衛。

ロアールで、前回大きな防衛線が起きたのは、父の代替わりの時 20年ほど前の話だろ。

そんな昔の戦いを、スタッフは資料ででも学んできたのか。

その時も今回と同じように、フランも援軍で参戦したのだから、かの南の地にも遠征時の資料はしつかり揃っているだろ。

レーフ将軍の腕が、いつからないのかはウイーは知らない。

安寧を勝ち取るために落とした腕。

将たちは、命とを張つてこの地を守りぬいてくれているが、ウイーがそのひとりひとつのことまで知っているわけではない。

軍の服を着ているのが、突然恥ずかしくなった。

こんな恰好をしていても、彼女が前線で命を賭けることなどないのだ。

ロアールと命運を共にする」としか、いまのウイーに出来ることはない。

「今回は、あなたの得意な仕事をさせないために、我々が来たので

す

スタッフは笑みを消し、表情を引き締めた。

その精悍な顔つきは、一瞬にして五つほど年を増やした気がする。

「フランの軍がつけば百人力ですな……ですが、そちらと共に戦うのはアーネル将軍になる予定です」

ロアアールの防衛の中でも、一番の攻撃力を誇る将が挙げられる。特に、勝ち戦の追撃戦にかけては、鬼神の才を發揮するといつ。攻撃にすぐれると噂のフランの軍は、そちらと共に戦うのが効果的だろう。

「統率のハフグレン将軍、盾のレーフ将軍、矛のアーネル将軍、ですね」

「本人は、残念ながら盾は持てませんがね」

スタッフの褒め言葉に、レーフ将軍はにやりと口の端だけで笑みながら、腕を広げて見せた。

彼にあるのは、右腕だけ。

そちらで戦斧を振るうために、盾は持てないのだ。

そんな黒い冗談で、男一人は笑みを交わし合つ。

ウイーには、言葉を挟みづらじ空氣だった。

「では、もしかしてレーフ将軍が預かる部隊は……」

笑みの最後に、スタッフの言葉が懸念めいた色に変わる。

将軍もまた、苦々しく頷いた。

「まあ、そうなるでしょうな」

男一人、一度見つめ合つて、小さく息を吐いている。

「残り一本の大重要な腕は、お渡しにならないよ」

「そなつたら、さすがに引退でしょ」

彼らの会話は、やはりウイーにはよく理解出来なかつた。

頭痛の種

レイシェスは、執務室で頭の痛い書状とこらめっこしていった。

次から次へと、どうしていい面倒」とが数珠つなぎでやつてくるのか。

いや、これはある程度予想はしていたことだ。

ただ、早過ぎると 悪すぎるのと、両方の要素が想像より遙かに上回っていたのである。

おかげで、スタッフの出迎えをウマイに任せることとなってしまった。

正式な会見は、公爵邸で行うことになっていたので、予定通りならじりじりへ向かっている頃だらう。

そんな苦悩のレイシェスの元へ、スタッフの到着の報が届けられる。

執務室の席を立ち、玄関まで出迎えにいくべく歩き出す。

何もかも変わった自分を見て、彼は何と叫んだらう。

喪中のため、黒い上着に黒いズボン、さらには胸元には黒いリボンと、黒黒ずくめな上に、ぱつぱつと切った髪。

ロアールの女性として、一番華美な自分を見せていた人に、今

度はこんな黒狐のような姿を見せることとなるのだ。

玄関の扉の内側に立ち、レイシェスはそれが開くのを静かに待つた。

心が、騒ぐ。

忙殺の日々に、自分の心や身を振り返る暇もなく、全力で走ってきた自分がいま、足を止めて待っているのが分かる。

侍従らによつて開けられる扉から 男は現れた。

濃いオリーブ色の軍服姿の彼は、一瞬レイシェスを見て、ぴたりと足を止めた。

しかし、表情は変えないまま、すぐに軍靴を鳴らして近づいてくる。

「ラットオージェン公爵代理閣下……再びお目にかかれたこと、光栄に存じます」

女性に向ける優しげな柔らかさを、いまのスタッフは隠していた。

もし、これが初対面であつたならば、レイシェスは彼という人間を誤解していたかもしれない。

ただ、その瞳だけは。

前と変わらぬ温度と色で、自分を見つめていた。

彼女の姿が変わることなど、何の意味もないのだと言わんばかりに。

「タータイト公爵名代閣下、遠路はるばるの増援、心より御礼申し上げます」

それぞれの家名を背負つた、堅苦しい挨拶の物陰から、ウイニーが顔を出す。

少年のような姿の妹がスタッフの側にいると、まるで兄弟のようだった。

しかし、ウイニーは妹 女性なのだ。

女性だからこそ、起きた事件もあった。

レイシエスは、一度瞳を伏せ、そして改めてもう一度、一人の味方を見つめる。

「執務室で、一人に聞いて欲しいことがあります

彼らには、面倒事の話をしておかなければならなかつた。

「都からの増援が、ロアアルへの入領確認を申し出ています」

レイシエスの言葉を、妹はぽかんとした顔で聞いていた。

スタッフは わざかに眉を険しくさせている。

「早過ぎますね」

一番分かりやすい不審点を突かれ、彼女はそれに頷く。

そう、早過ぎるのだ。

援軍依頼もしていないのに駆けつけてくれたフラとは違つて、都では準備こそしていにせよ、レイシヨスの送つた書状が届いてから出撃するはずである。

おややく、まとめて送つた書状は、今頃都に届いているだらう。

なのに、援軍はすでにロアアールに向かつてゐるところなのだ。

それもそのはず。

「入領を申し出しているのは……王太子殿下率いる近衛軍です」

瞬間。

執務室の空気は、見事に温度を下げた。

ウイニーの表情は固まり、スタッフの表情は一瞬にして不機嫌なものへと変わる。

そんな彼の唇が、悪態でもつきたいかのよつこ、一度開いて閉じる。

舌打ちひとつこぼさなかつたのは、彼の自制のたまものか。

「役に立たない兵を送つてきましたな」

代わりに、現実的で辛辣な返答が溢れ出す。

「ええ、本当に」

レイシェスの書状が届くより先に、王太子が動いてしまった。

しかも、連れてくるのはそう数の多くない近衛軍である。

王家の直属の軍だが、前線を知らない王家の守護軍だ。

ほとんど、王太子のおもつのよくなものだろ？

「おそらく、私の書状が届いたら、改めて都の正規兵が援軍として送られてくるでしょうが……」

「書状が届いていないのに……来たの？」

ウイニーは、驚いた顔でレイシェスの言葉に割り込んできた。

「ええ……そ、う。あなたを側室にあげないといつ書状も、届く前に出撃しているでしょうね」

姉妹で、視線をぶつけ合つ。

妹の目にあるのは、困惑と不安。

それらを何とか押さえているようで、その顔はまきゅっと引き結ばれている。

「側室……？」

スタッフの目が、微妙な色合いでウイーーに向いた。

何というか。

それは、何とも理解しがたいものを見る瞳の色だった。

「……！」

妹は、彼の視線に失礼な意図を汲んだのか、唇をとがらし気味に睨み返した。

そんな光景に、ふつとレイシエスは肩の力が抜けて笑みを浮かべていた。

こんな厄介な事態だというのに、二人の仲の良さが、こうして彼女をなごませてくれるのだ。

「ともあれ、断ることは出来ないでしょう。王太子殿下自らが、ロアールの援軍の長となるのですから」

役に立たない先行軍の、接待をしている暇はレイシエスにはない。

かと言つて、王太子を前線に出すわけにもいかない。

更に言えば、王太子はスタッフ同様に、この公爵家に部屋を用意して泊めなければならないだろう。

ウイニーも住む、この屋敷へ。

厄介な要件が揃い踏みであるが、偶然ではない。

あの男が、わざわざ血を回しにきたとしか思えなかつた。

「ハフグレン将軍に、預けられるのがいいでしょう」

スタッフは、建設的な意見を出してくれた。

筆頭将軍は、一番前線には出ない軍を率いている。

王太子を危険から遠ざけ、ある程度制御するには、かの将軍くらいでなければ難しいだろう。

「そうですね。後から国軍が来た場合は、レーフ将軍に預ける予定ですから、そうするのがバランスがいいでしょう」

防御上手の将軍の名を挙げると、スタッフは苦笑を浮かべた。

「まあ、都の軍の方も……近衛軍よりマシ、程度でしょうがね。レーフ将軍に同情しますよ」

父が公爵を継いだころの防衛戦時、一番勇猛果敢に戦つたのがフランの軍隊であるならば、一番弱かつたのが国軍だったのだ。

前線を知る者が少なく、撤退戦さえともに出来ず、防御地域を

深く抉られそうになつたのだ。

レーフ将軍は、その当時は国軍と行動を共にしていた防御部隊の士官で、撤退のしんがりを務めた時に片腕を失つたという。

隻腕の将軍への同情に、レイシェスはまつげだけで答える。

そして、妹へと向き直つた。

「ウイニー……また困難がやってきますが、一緒に乗り越えていきましょ!」

言葉に、妹はびりっと表情を引き締め、背筋を伸ばす。

「姉さん、私、ちゃんと立ち向かえるから……大丈夫だからー。」

ウイニーは力の溢れている自分を見せるように、両の手を握つて見せる。

都に行つて、妹は強くなつた。

レイシェスは、それを実感する。

可愛かつただけの妹の殻が、いい意味で頑丈になつていく。

まるで、たなぎになるかのよ!」。

最後には、どんな女性になるのか レイシェスは、自分のこと

以上に妹の未来の姿が想像できなかつた。

勿体ないこと

ロアーラルの姉妹は、都とは違う意味で容貌を遂げていた。

ウィニーは軍服を着て、スタッフの前に現れた。

格好こじは勇ましいが、中身が男性的になつたというわけではない。

それどころか、相変わらずの彼女らしさは残っていて、スタッフをほつとさせたのだ。

変わらうとしているのは、はつきりと見て取れるが、何もかもが短期間で変化出来るわけではない。

見るからに『一生懸命』なウィニーの様子は、若々しく、そしてとても明るい印象を振りまいている。

とても、『よく最近に父を亡べしたとは思えないほど。

そんな彼女が、出入りするせいだろうか。

隣国の侵攻が始まり、本来であれば重苦しいはずの軍部には、そこまで重苦しい空気はないよつて思えた。

防衛慣れしている軍なので、敵国の扱いも心得ているだろうが、スタッフにはそれだけには見えなかつた。

ウィニーは、多くの将兵に挨拶を向けられる度に、溌剌と返答す

るのだ。

彼女の取り柄である明るさは、わずかではあるが着実に軍の人間たちに伝わっているようだと思える。

尊敬の対象というよりも、親愛の対象。

公爵となるレイシエスよりも、むしろ側まで近づくことの出来る親しみやすさ。

スタッフは、それをウイーーと車の間に見た。

そんな彼女に案内され、到着した侯爵家。

頑丈さを最優先した石を多く使われたその建物は、ずっとじりと重い灰色を纏っている。

とにかく、重厚を旨とした領土なのが伝わってきた。

そんな灰色の世界から　　レイシエスは現れた。

驚くなという方が、無理だつたひつ。

美しい彼女の髪は、ぱっさりと切り落とされていて、あらわになつた白い首を見るだけで北西の冷たい春風を感じるようで、背筋を震わせたくなる。

更に、黒づくめのズボン姿は、彼女の印象を随分と違つものこっていた。

都で会ったレイシェスと、本当に同一人物であるか、一瞬分からなくなつてしまいそうなほど。

しかし、そんなスタッフの戸惑いは、青く澄んだ彼女の瞳を見つめただけで、すうっと潮のように引いて行つた。

どれほど髪型や装束が変わつとも、その瞳は変わることはない。彼の心を奪つたレイシェス、その人のままだつた。

王太子と近衛兵が来るという報せは、スタッフの心情を大きく曇らせた。

次代の王となる者が、人間的に非常に問題があるのは、兄やロアールの姉妹と共通の認識である。

主を失つたばかりのロアールに、ウイニーを側室にあげるよう書状を送りつけ、それに彼女らの母が承諾の返事を送つてしまい、とんだ騒ぎになつたという事情は聞いた。

その事態の訂正の返事も受け取る前に、王太子は役に立たない連中を引き連れて援軍にやつってきたのだ。

これは、どう見ても援軍が目的とは思えなかつた。

かといって、ウイニーへの執着のみでの行動とは やはり思え

なかつた。

何を考えているんだ。

スタファは、レイシェスの執務室を出ながら、すぐ後ろからついてくるウイニーを軽く振り返つた。

「領内がごたついているから、『氣をつけろよ

』王太子に」という言葉は省略して、注意を呼び掛ける。

誰よりも、彼の暴挙の被害を被つているウイニーだからこそ、油断しているとは思わないが、心配しないですむわけでもない。

「スタッフア兄さんは、どう思つ? あの御方が、私を本当に欲しがつているなんて、とても思えないの」

王太子の意図を、彼女は知りたがつていた。

「まあ……分からぬ。けれど、お前もそう捨てたものじゃないぞ

考え込むウイニーに、スタッフアは素直に言葉を綴つてみた。

確かに、彼女には足りないものが多い。

都で見た礼儀作法は、本当に公爵の娘かと疑うほどだ。

しかし、ウイニーといつ少女と付き合つを続けていけば、彼女が非常に明朗な性質で、更に しぶといのが分かる。

女性に対しても、しぶとことこののは褒め言葉ではないのかもしれないが、要するに『あきらめない』のだ。

『おつまみの座つぱちで、踏みどじある強さがある。

それは、世の女性の多くが持っているものではない。

そういうと、兄は残念なことをしたかもしないと思えてくる。

しぶとこ正妃を、もういそこなつたのだから。

「こんな恰好の時に言われてもなあ……」

ウイニーは、彼の褒め言葉におかしそうに笑う。

軍服の袖を、軽く広げて見せる。

男の子みたいでしょ、と。

「いや、予想以上に似合つてないだ

軍のムサ苦しい連中の田には、赤毛の天使に映つてこないところ。

そこまでウイニーに言つのは、微妙に憚られる。

スタッフは、自分は一途な男だと自覚していた。

本当に好いた惚れたの相手以外に、余り多くの装飾をほどこした

言葉を語る」とは控えているのだ。

フラの男にしてみれば、珍しい方だろうが。

「私もね……毎日すゞく楽しい。こんな時に、樂しいってのは不謹慎なのは分かつてゐるんだけど、毎日毎日、痛いくらい生きてるつて感じるので」

樂しく思つたが、後ろめたく思えるのか。

ウイニーは、何とも微妙な、しかしどうしても笑みをおさえられない表情で、やつといたのだ。

彼女の後ろに、『自由』とこの文字が見えそつながら。

姉妹は、母とこう鎌を引きあわせた。

ウイニーが、初めて自由この地を飛びまわっている。

その喜びを、抑えきれないのだ。

「よかつたな」

ぽんぽんと、彼女の頭に手を置くと、彼女は溢れる笑顔で自分を見返してきた。

ああ。

兄上は、本当に勿体ないことをしたな。

スタッフは、複雑な気分を味わつたのだった。

夜が力を失うのは

来た。

ウェニーは、ハフグレン将軍の隣で身体をこわばらせながら、軍舎の前でその人間の到着を出迎えた。

馬を降り、五人ほどの側近を従えてその男は近づいてくる。

ロアアールの冷たい春風に、黒髪を激しく翻られながら　しかし、彼の視線はわずかも揺らぐことなくウェニーに注がれている。

「こんなに早く再会することになるとは、思つてもみなかつた。

」の拳の国を統べる王の、後継者である王太子だ。

彼は、濃紺の地に金の飾りをあつらえた軍服姿つた。

いまのロアアールには、一番ふさわしい姿ではあるが、彼が身にまとつてこるその衣装には違和感を覚える。

普通の軍服といつよりも、儀礼的なそれに見えたのだ。

王宮で、装飾的な衣装を着ているのと、何ら変わらない気がした。

少なくとも。

王太子には、ロアアールを守りたくてしうがないといつ気持ちは、微塵も見えなかつたのである。

彼の目的の一部は、ウイニーだらう。

それは、彼女自身分かっていた。

そこに愛だの情だのがあるかと言えば、首をかしげざるを得ないのだが、奇妙な執着心があるのは分かっている。

彼は、そんな自身の執着心さえ、この国をもてあそぶ材料にしているような気もするが。

「遠路はるばる……」

ウイニーは深く膝を折り、儀礼的な挨拶を始める。

本当は、レイシェスも出迎えに来るはずだった。

スタッフも同席すると言つてくれた。

だが、それらをウイニーは押しとどめたのだ。

二人に比べて、彼女はまだ暇な方だ。

ならば、自分がこの王太子からロアアールを守る防波堤にならなければならぬ、と。

異国の勢力に立ち向かっている間に、背中から蹴り飛ばされてしまふ。

田の前の王太子は、ウイニーをじろじろ見ながら挨拶を受けた後、

更に足を進める。

彼女の手の前に立つと、至近距離で見降ろしてくるのだ。

ハフグレン将軍が、挨拶をする隙間を失つて、怪訝な視線をこっちに向けている中、王太子の手が、伸びる。

わしづ。

その手は、ウイニーの赤毛の上に着地し、無造作に髪を掴む。

あー。

慣れたわけではないのだが、彼のよくやる行動のひとつだつたため、ウイニーは冷や汗を背中にかきながらも、不用意な動きを押しとどめられた。

わしわし。

少年のように後ろで結んだ彼女の髪を、乱すよひにかき回す。

視線は、いつも通りの不機嫌さははらんでいたが、強い感情を表しているようには見えなかつた。

「ロアールの女は、男の真似事までするのか」

冷たい皮肉が、間近から落とされる。

ウイニーは、それにびくっと反応してしまつた。

男の、真似事？

彼女は、男になつたつもりはない。

それは、髪を短くした姉にも同じことが言える。

男がいないからと言つて、彼女ら姉妹は男になりたいわけではないのだ。

「男の真似ではなく、今はドレスが邪魔だっただけです」

愛しい祖母の衣装は、いつでもウイニーを待つていてくれる。

それに袖を通すのに、何のためらいもない。

しかし、安寧あつてのドレスだ。

強固なロアアールあつての、ドレスなのだ。

「都に来れば、邪魔になることなどない」

髪じと頭を掴まれて、上を向かされる。

王太子が夜のよつな髪と共に、上からウイニーに降つてくるよつな錯覚を感じる。

ロアアールは、寒い地だ。

冬の夜も長い。

だが。

髪を掴まれたまま、ウイニーはまっすぐに王太子を見返した。

「その話は、姉が正式に断りをお送り致しました。私は、ロアラー
ルにずっといるつもりです」

この地にも、ついに春が来た。

いつまでも、冬と夜に震える姉妹ではなくなったのだ。

王太子は、眉間をうつすらと翳らせながら、首を傾けた。

「お前の母からの承諾の書状しか、見てはいない」

冬と夜が、ウイニーの首根っこにまだ手をかけている気がする。

少しでも脅えれば、そのまま永遠に暗闇の彼方へ連れ去ってしま
いそうな気配だ。

拳を、ぎゅっと握る。

夜に力で刃向っても、ハつ裂きにされるだけ。

夜が力を失うのは。

ウイニーは、こわばる頬を叱咤して、ぐしゃぐしゃの髪の下で笑
つて見せた。

「では、改めて私の口から……その件は、お断り申し上げます」

夜が力を失うのは

柔らかな光の下だけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2062w/>

南の海を愛する姉妹の四重奏

2012年1月14日16時51分発行